DRAG-ON DRAGOON

ドラッグオンドラグーン　ストーリーサイド

Story Side

映島 巡
Eishima Jun

Illustration
藤坂公彦
Fujisaka Kimihiko



SQUARE ENIX

DRAG-ON DRAGOON *Story Side*

ドラッグオンドラグーン ストーリーサイド

映島 巡

Illustration 藤坂公彦

スクウェア・エニックス





DRAG-ON DRAGOON™
ドラッグ オン ドラグーン

Cover Illustration ⋆ 藤坂公彦 Fujisaka Kimihiko
Cover Design ⋆ 松木美紀 Matsuki Miki


DRAG-ON DRAGOON
ドラッグオンドラグーン　ストーリーサイド
Story Side
映島 巡
Eishima Jun
Illustration
藤坂公彦
Fujisaka Kimihiko
SQUARE ENIX

DRAG ON DRAGOON STORY SIDE
CONTENTS

DRAG-ON DRAGOON
ドラッグオンドラグーン ストーリーサイド
Story Side



映島 巡
Eishima Jun

Illustration
藤坂公彦
Fujisaka Kimihiko

cters



イウヴァルト

約対象：ブラックドラゴン
約の代償：歌
章の位置：首

カールレオン貴族の息子であ
、フリアエの元許婚。ハープ
かきならし歌う美声の持ち
。根が純粋だがそれゆえ自分
の心が支えきれず、カイムへの
コンプレックスと嫉妬心の呪縛
から自らを解き放てない。

フリアエ

カイムの妹であり、封印の女神。14歳まではごく普通の少女だったが、その身にオシルシが現れ、運命が一変。兄への許されざる思い、失われた日々への追慕の念を自らの内に封じ込め、女神としての責務を淡々と果たしている。

カイム

契約対象：レッドドラゴン
契約の代償：言葉
紋章の位置：舌

小国カールレオンの元王子。18歳の誕生日に両親をブラックドラゴンに殺され、さらにはたった一人の肉親である妹も女神として召還され、すべてを失ってしまう。以後復讐のため傭兵として連合軍に身を置き、帝国軍と戦い続ける。

Chara



セエレ

契約対象：ゴーレム
契約の代償：時間
紋章の位置：全身

母親の過剰な程の愛情を受けて育つ。そのため双子の妹マナは虐待を受ける。セエレは妹を不憫に思いながらも愛を独り占めする心地よさにマナのことを思いやれない。

ヴェルドレ

契約対象：石化したドラゴン
契約の代償：毛
紋章の位置：頭部

女神を守る役目の神官長。聖職者として慈悲の心を周囲に諭すが、極限状態になると弱い心を覗かせる。

レオナール

契約対象：フェアリー
契約の代償：視力
紋章の位置：眼球

礼儀正しく、気高い精神を持った隠者。その反面、少年愛に溺れる性癖がある。高潔と倒錯、この二面に苦しみ続ける。

アリオーシュ

契約対象：ウンディーネ、サラマンダー
契約の代償：子宮
紋章の位置：下腹部

エルフの里で暮らす平凡な女だったが、帝国軍に夫と子供を惨殺され、精神を病む。その後、子供喰いのエルフとして数々の惨殺事件を引き起こす。

カバー・口絵イラスト／藤坂公彦
本文章扉・オープニング・エンディングイラスト／寺田　亨
カバー・表紙・帯・目次・章扉デザイン／松木美紀
本文・キャラクター紹介デザイン／㈱エストール


鎮まらぬ魂はやがて紅き血を誘う
天使たちは血を食し発火する血を誘導する
武将たちは曇り空のもと静かに咳払いをする
女神の涙で四つの祠は断たれ母天使が現れる
紅き雷の塔よりドラゴンが墜ちゆく先は誰も見ぬ点であるだろう

第一章　鎮まらぬ魂はやがて紅き血を



1

翼を煌（きら）めかせて鳥が大空を舞っていた。

空には薄く雲がかかっていたがどこまでも広く、美しい。その真下で繰り広げられる光景と同じ世界に属するものだとはとても思えないほどに。飛び交う怒号も血飛沫（ちしぶき）も、ここまでは届かない。舞い上がる砂塵（さじん）が視界を遮ることもない。

やがて鳥は地上の人間たちを嘲笑（あざわら）うかのようにゆったりと旋回してみせると、何処（いずこ）かへと飛び去った。

「前方に歩兵部隊出現！」

地上では空を舞う鳥に気づく者などいない。空を仰いでいるのはただ骸（むくろ）のみ。

「カイム様、お気をつけください！」

戦場に出るにはいささか歳が行き過ぎている兵士の声に応えたのは、対照的に年若い男だった。

「怯（ひる）むな！　突っ込め！」

しかし年齢に似合わず戦慣（いくさな）れしている様子が見てとれる。剣の描く道筋に迷いがない。容赦なく斬りつけ、叩き潰す。転がる骸を蹴散（けち）らし、進む。周囲を薙（な）ぎ払う。が、斬り捨てても斬

り捨てても、敵兵は何処からともなく涌いて出てくる。
「後方に敵の援軍がっ！」
叫びに耳を貸す余裕はなかった。ひたすらに斬りつける。
「なんて強さだ。こいつら、人間じゃない！」
悲鳴にも似た声が上がる。ああ、そうだ。人間じゃない。こいつらは……壁蝨だ。帝国の。
あの赤い目が何よりの証。もともとそういう身体的特徴を持つのか、或いは怪しげな秘薬の類を飲まされているのかは定かではないが。
だから良心の呵責や罪の意識といったものを感じることもない。怯えた様子で後ずさる兵士の脳天に剣を振り下ろしたとしても。
憎む相手の血と肉というものは、なぜにこれほどの心地よさをもたらすのだろう。忌むべきはずの血の匂いが、肉が潰れ骨が砕ける手応えが、ただただ快い。つかの間、自分が連隊を率いる身であることを忘れそうになる。
それにしてもこの際限のなさはどうしたことか。倒す片端から骸が起き上がっているのではないかとさえ思う。
「城内に敵侵入！　このままでは女神フリアエ様が……」
背後からとてつもない力で突き飛ばされた気がした。肩から背に痺れが走る。斬られたと気づくよりも先に剣を振りかぶっていた。渾身の力で背後の敵兵を叩き潰す。

不意に足許が揺らいだ。必死で体を立て直す。倒れれば即座に死がやってくる。剣を持ち上げる腕が妙な具合に強ばっていた。さほど痛みは感じないが、ひどく息苦しい。肩で息をしながら両の足を踏みしめる。ここで倒れるわけにはいかない。

顔を上げ、再び剣を構えようとしたときだった。城門に掲げられた旗が炎に包まれている。敵兵が火を放ったのだ。

燃え上がる旗。降り注ぐ火矢。乱戦。血。そして……両親の死。

「フリアエ……」

瞬時に蘇った記憶が四肢に力を与えた。カイムは夢中で走り出す。女神フリアエの、今となってはたった一人の肉親となってしまった妹のもとへ。

2

人はいつ、自分が子供でなくなったことを知るのだろう。永遠に続くかに思われた子供時代が遠く過ぎ去っていたことに気づくのは。

自分は気づくのが遅すぎたのだ、とカイムは思う。恵まれすぎているということは、人を甘やかし、時に成長を妨げる。小国とはいえ王家に生まれ、何不自由なく育った。父王ガアプは武術の達人であるが温厚という、ともすれば相反しがちな資質を兼ね備え、名君の誉れも高い。

国は豊かで、近隣諸国との関係も良好だった。

王位継承者にありがちな孤独を知っていれば、また違ったのかもしれない。が、カイムにはイウヴァルトという親友がいた。ガアプ王は並み居る臣下の中で、殊のほかイウヴァルトの父イブリスを信頼していた。イブリスには宰相の地位を与え、イウヴァルトを我が子同様に可愛がった。

身分や家柄に厳格な先代の王に育てられたガアプは、友らしい友を持たないまま成人し、若くして即位した後もしばらくは腹心らしい腹心を持つことがなかったという。それゆえに息子カイムには、早くから心許せる友を持たせたいと願っていたのだろう。我が子に自分と同じ苦労をさせたくないという親心は、一国の王であっても変わらない。

そんな親心が通じたのか、カイムとイウヴァルトはまたとない遊び仲間となった。日がな一日王宮の庭で遊び、時には子供らしい悪さをしでかして女官長に叱られたりもした。やがて妹のフリアエが生まれて二人は三人になった。

フリアエが走り回れる年齢になると、三人で王宮を抜け出すことを思いついた。出入りの商人の荷馬車に紛れ込むのである。荷台の中でじっと息をひそめていれば、裏門を警護する兵士にも、王宮周辺を見回る兵士にも気づかれない。そして、荷馬車が速度を緩めた隙に飛び降りる。これはうまくいった。帰りは堂々と見張りの兵士に門を開けてもらう。行きは別の門から出かけたという顔をして。

しかし、度重なるにつれて、さすがに門番もおかしいと思ったのだろう。彼が女官長にご注進に及ぶに至って、三人の「無断外出」は発覚し、以来、商人の荷馬車は厳重に荷台を改められることとなった。

また、あるときは城壁の真下に穴を掘って外に出るという方法を考えついたが、これは着手するなり庭師に発見され、またもやこっぴどく叱られる羽目に陥った。

イウヴァルトの父イブリスは、息子の「不祥事」が発覚するたびに色を失って許しを請うたが、当のガアプ王は鷹揚に笑ってみせるのが常だった。

「良いではないか。門番の目をかいくぐる程度の知恵を持たぬようでは、先が案じられるというもの。何より、幼き日を分かち合った友は生涯の宝であろう。そのように気に病まずとも良いぞ」

そう言った後、ガアプ王が傍らの妃に同意を求めるのもまた常だった。カイムたちの母は隣国からガアプ王のもとに嫁いできたが、そのとき付き従ってやってきたのが今の女官長である。カイムたちの母と女官長もまた、姉妹のように睦み合って育ったという。

やがてガアプ王は、カイムとイウヴァルトに手ずから剣術を教えるようになった。こうして二人は遊び仲間であると同時に、競い合う仲となった。

ガアプ王は歴代の王の中でも突出した剣の達人である。その血を受け継ぐカイムもまた、周囲を驚かせる上達ぶりを見せた。イウヴァルトも人並み以上に腕を上げていたが、どうあって

もカイムには敵わなかった。年齢差があるのだから仕方がないだろうとカイムが言えば、それがまた悔しいのか、イウヴァルトはむきになって勝負を挑んでくる。

　とはいえ、その程度のことで二人の友情が揺らぐことはなかった。それに、いつまでも二人で剣を交えていたのでは、稽古が終わるのを待っているフリアエの機嫌が悪くなる。物心ついたときにはすでに三人で過ごしていたフリアエにとって、剣の稽古で自分一人が仲間はずれにされるのが甚だ面白くないのである。

「つまらないわ。カイム兄さまも、イウヴァルトも、剣の稽古ばっかり」

　さんざん待たされ、ふくれっ面になっているフリアエをなだめるのは、主にイウヴァルトの役目だった。というのも、イウヴァルトはカイムにはない才能を持っていた。歌である。どれほど待ちぼうけを食わされようとも、イウヴァルトが竪琴をかき鳴らして歌うとフリアエの機嫌はたちまち直った。

「もっと歌って」

　拗ねていたことなどすっかり忘れて、フリアエは次の曲をねだった。一曲終われば、また一曲。それほどまでにイウヴァルトの歌は人の心を惹きつけてやまないものがあった。イウヴァルトの楽才は母方の血筋によるものらしい。母方の祖父もまた竪琴の名手であり、早世した伯母は宮廷の歌姫と呼ばれた人だったという。

　歌だけに魅了されたわけではないだろうが、やがてイウヴァルトとフリアエは幼い恋を育む

ようになった。ガアプ王は、我が娘と忠臣イブリスの一人息子との仲を喜び、これを認めた。婚儀はまだまだ先のこととはいえ、許婚となるには決して幼すぎる年齢ではない。

イウヴァルトならいい。二人の仲を知ったとき、カイムはそう思った。お互いに気心も知れているし、イウヴァルトがフリアエを不幸にするなどということはまず考えられない。両親も、王宮の誰もが喜び、祝福の言葉を口にしている。心の片隅にある痛みは、三人が二人と一人に別れていくことへの寂しさに違いない。剣の稽古が終わるのをじっと待っていたフリアエの気持ちが少し理解できるような気がした。

しかし、まさかこの婚約が、片時も離れずに過ごしてきた三人の関係に影を落とすことになろうとは思いもしなかった。

何かが少しずつ歪み、損なわれ始めたのはそれから間もなくのことである。後になって振り返ってみれば、馬鹿馬鹿しいほど単純明快な理由だった。イウヴァルトは二人と一人に別れることを望み、カイムもそれを受け容れた。が、フリアエは受け容れなかった。ただそれだけのことだった。

イウヴァルトがフリアエを独占したがるのは至極当然のことであるとカイムは思う。それに対してフリアエはまだ子供だった。これまでと変わることなく兄と幼なじみの二人に甘やかされていたいと願っていたのだ。フリアエの年齢を考えれば、これもまた無理のないことだったのかもしれない。

フリアエの幼さを許容するだけの寛大さが、残念ながらイウヴァルトにはまだなかった。子供ではないが大人でもない微妙な年齢である。フリアエを独占できないもどかしさを、イウヴァルトはカイムのせいにした。カイムもまた、そんなイウヴァルトに反感を覚えた。妹を諭し、友の言いがかりを許すほど大人にはなれなかったのである。

大人にならなければ。他愛もなく笑い転げ、じゃれ合って過ごした子供時代はもう終わったのだ。

そう気づいたときには、すでにイウヴァルトとの間にできた亀裂は修復不可能なほど大きくなっていた。言葉を交わせばぎこちなく、剣を交えればなお険悪になる。何をやっても裏目に出る。……いったい、どこで何を間違ってしまったのだろう。

イウヴァルトと激しく剣をぶつけ合いながら、カイムはどうしようもない苛立ちと焦りを覚えていた。今やっているのはもはや稽古ではなく、真剣勝負だった。イウヴァルトの目には確かに憎しみが宿っていた。おそらく自分も同じ目をしているのだろう。

なぜだ？　なぜ、俺たちはこんなにも憎み合わねばならない？

このままではイウヴァルトを殺してしまうかもしれない。剣の腕は明らかに自分のほうが上だ。このまま続ければ……。暗い予感にカイムは戦いた。それが剣先を鈍らせ、隙を生んだ。

剣がぶつかり合う甲高い音とは違う音を聞いた。右肩に灼熱の感触があった。痛みが遅れてやってくる。思わずその場に膝をつく。

「カイム……」
イウヴァルトの手から血塗れの剣が落ちた。周囲に控えていた兵士たちがあわてて駆け寄ってくる。
「大丈夫だ……心配するな」
そう答えるのが精一杯だった。
深手ではなかった。傷が塞がるのにさほどの日数を要さないという侍医の見立てに、誰もが安堵した。そんな次第で、あれは事故だ、真剣を使っての稽古中に考えごとなどしていた自分が悪かったというカイムの言い分を、ガアプ王は全面的に受け容れ、決してイウヴァルトを罰しようとはしなかった。
しかし、イウヴァルトを許さなかった者が二人いた。その一人はイブリスで、たとえ事故であったとしても責めを負うべきであると主張し、当面の間、謹慎するようにとイウヴァルトに命じた。忠臣である彼にとっては到底許せぬ事態だったのだろう。
もう一人はフリアエである。兄の身を案ずるあまり、フリアエはイウヴァルトを激しく非難したらしい。その場に居合わせたわけではなかったが、翌朝、妹の顔を見るなり何があったのかをカイムは察した。
「イウヴァルトに何を言ったんだ？」

別に何も、とカイムの目を見ずにフリアエは答えた。それで確信を持った。
「イウヴァルトのせいじゃない。事故だったんだ」
「でも……」
「仲直りしろよ」
フリアエがうつむく。
「自分でも言い過ぎたと思ってるんだろう」
「そんなことないわ。悪いのはイウヴァルトなんだもの。だって」
「だって？」
「今日はカイム兄さまの誕生日なのよ。ひどいじゃない。誕生日にこんな……」
カイムは苦笑した。言い過ぎたことを認めたくないばかりに、まるで関係のない事柄を引っ張り出してくる妹がおかしかった。
「誕生日じゃなければいいのか？」
からかうように問うと、フリアエは黙り込んだ。が、反論の言葉を思いついたらしく、すぐに口を開いた。
「でも、怪我(けが)のせいで宴(うたげ)が取り止めになってしまったじゃないの」
カイム十八歳の誕生日は国を挙げての祝日となっていた。王宮でも祝賀の宴が催されるはずだったが、息子を気遣ったガアプ王は急遽(きゅうきょ)それを取り止めた。代わりに家臣や兵士たちに今日

一日の休みを与えたのである。

「だったらイウヴァルトに感謝しなけりゃな。宴は苦手なんだ」

妹をやり込めながら、胸の中のわだかまりがとけていることに気づく。不思議だ。まるで憑き物が落ちたかのようである。今なら昔のように笑い合える気がした。イウヴァルトのほうはまだ和解する気分ではないかもしれないが、気長に待とうと思えた。

考えてみれば、これほど穏やかな気持ちになったのは久しぶりである。イウヴァルトとフリアエの婚約以来、いつも心のどこかがささくれ立ち、ひりついていた。それが跡形もなく消えている。ようやく自分も大人になれるときが来たのかもしれない。そう思えば、悪くない誕生日だ。

窓からは柔らかな陽射しが注ぎ、王宮の内は静けさに包まれていた。心安らぐ一日を与えてくれた父王にカイムは感謝した。

しかし、それからほんの数刻の後、事態は暗転した。王宮の中庭で家族水入らずの一時を過ごしていたカイムたちのもとへ、漆黒の死神が舞い降りたのである。

ブラックドラゴン。カイムとフリアエは無論のこと、おそらく両親でさえその姿を目の当たりにしたのは初めてだったのではないか。ドラゴンは神の遣いとも呼ばれる生き物で、滅多なことでは人間の前に姿を現さないという。

だから黒い翼を鳴らして滑空するドラゴンを目にしたとき、その場にいた誰もが無防備だっ

た。かりそめにも神の遣いが無抵抗の人間を襲うなど、想像もつかなかったからである。

一瞬の出来事だった。黒い疾風が駆け抜けた。時が止まった。

見開いた目の中に血の色が飛び込んでくるのをカイムは感じた。ドラゴンが鉤爪で母を引き裂き、次には鋭い牙で父に襲いかかったのをはっきりと見た。自分が何か叫んでいるのがわかった。

ドラゴンが振り向く。爛々と光る紅い目。

カイムが覚えているのはそこまでだった。気がつくと、ブラックドラゴンは飛び去っていた。傍らでフリアエが真っ青になって震えている。右肩が激しく痛んだ。自分が何をやったのか、まるで覚えていないが、傷が開いている。

血の滴が指先を伝う。傷口を押さえることも忘れて、カイムは倒れ伏している父と母に歩み寄る。抱き起こす。すでに息はない。驚いたように見開かれたままの瞼をそっと閉じさせる。怒ることも嘆くこともできなかった。カイムはただ両親の骸を見つめていた。

ガアプ王の死後、信じ難い勢いで国は荒れていった。肥沃な国土を持つとはいえ、もともと小国である。近隣諸国との友好的な関係も、王の人柄によるものだった。ガアプ王はあらゆる意味で国の要であった。宰相のイブリスが執政を行ったものの、彼は国の要たり得なかった。

喪明けとともにカイムが新王として即位すれば、事態はまた変わっていたのかもしれない。

宮廷には忠臣たちが残っていたし、年若いとはいえガアプ王の血を引く王子に民は期待を寄せていた。

しかし、カイムはそれをしなかった。できなかったのである。

もしもあの日、予定どおりに祝賀の宴が行われていたならば。もしもあのとき、中庭に出ていなければ。

あの日、あのとき、警護の兵士もなしに中庭で過ごすことになった原因はすべて自分にある。両親を殺したのはブラックドラゴンだが、自分はその殺害に荷担したようなものではないか。それを思うと、父王の跡を継ぐなどできようはずがなかった。

それだけではない。ガアプ王亡き後、王宮の中を様々な噂が乱れ飛んだ。曰く、ブラックドラゴンはとある狂信的な集団が放った刺客である。曰く、ブラックドラゴンは、封印の女神アシラがガアプ王に道に外れた恋慕の情を抱いたことに対する神の怒りである。曰く、ブラックドラゴンは謀反を企てた宰相イブリスが怪しげな秘術で召喚した魔物である……。

いくら耳を塞ごうとしても、噂はカイムの耳に入ってくる。とりわけ我慢ならなかったのが、イブリスが息子イウヴァルトを唆してカイムに怪我を負わせたという噂だった。さらに、祝賀の宴を取り止め、家臣や兵士たちを王宮に近づけまいとしたのもイブリスの企てである、と。

それればかりではない。ガアプがまだ王子であったころ、イブリスとは激しく敵対する間柄であったという。イブリスは表面では忠誠を誓いながら、腹の底でガアプを弑するべく機会をうかがって

かがっていたのだ、そう囁き交わす者たちもいた。

おそらく大半が根拠のない噂に違いない。が、真実を知らぬ者にとって噂は、どれもそれらしく聞こえるものである。また、どれほど虚偽にまみれていても、噂というものは一片の真実を含むとも聞く。或いは、噂は人々の願望である、とも。

イブリスが奸臣であるなど、にわかに信じ難い。が、イブリスならばあの日、王宮の警護が手薄であったことを知り、かつ昼下がりを中庭で過ごしていたことを知り得るのである。

あの狙い澄ましたような襲撃……。もしも噂が真実だったとしたら。

日毎募っていく不信感に耐えかねて、カイムはイブリスに問うた。父の敵であったとの噂は真実か、と。言下に否定するかと思いきや、イブリスは是と答えた。

「なれど、私は王の前に膝を折り、服従と忠誠を誓いました。敵なればこそ、生まれる絆というものもあるのです」

その言葉を額面どおりに受け取ることはできなかった。むしろ、嘘でもいいからなぜ否定してくれなかったのかと、カイムはイブリスを恨んだ。また、心乱す噂を耳に入れてくる家臣たちを嫌悪した。もはや誰一人として信じることができなかった。

カイムはイウヴァルトと顔を合わせることを極力避けた。口を開けばきっと取り返しのつかない言葉を投げつけてしまうだろう。何より、向かい合えば本気でイウヴァルトを憎んでしまうに違いない。もとを正せばカイムに怪我を負わせたのはイウヴァルトなのだ。

惨劇の直前、イウヴァルトへのわだかまりがとけたと思った。いつか昔のように笑い合い、語り合えるときが来る、その日を気長に待とうと思った。あれはいったい何だったのか。振り返れば空しさだけが募る。

そんな矢先、内乱が勃発した。カイムを新国王として擁立しようとする一派と、宰相イブリスの執政を望む一派とが武力衝突を引き起こしたのである。もっとも、カイム本人には全く与り知らぬことであった。

内乱は日に日に拡大し、王宮にも戦火は及んだ。ついにイブリスは隣国の王に援軍を求めた。結果、内乱は鎮圧されたが、国としての崩壊は一挙に進んだ。

カイムは王宮を出る決心をした。自分の存在が自分の意志とは無関係に戦の大義名分として使われる。到底容認できることではなかった。このまま王宮に居続ければ、また同じことが起きるに違いない……。

ある朝、カイムは人知れず旅立った。家臣たちにも、イウヴァルトにも何も告げずに。両親の死からちょうど一年が過ぎようとしていた。

たった一人で旅に出るはずだった。何のあてもなく、行き先すら定まらぬ旅である。同行者は不要だった。フリアエにだけは王宮を出ることを打ち明けたのは、それが今生の別れになると思ったからにすぎない。

「さっさと帰れ。邪魔だ」

どれほど邪険にしても、フリアエは頑として頭を振った。

「イウヴァルトが心配している」

「大丈夫よ。イウヴァルトには話してきたから」

「話せばいいというものでもないだろうが」

「いいえ」

フリアエが目を伏せる。

「こんな気持ちで……イウヴァルトのそばにいられないもの」

フリアエもまた、虚実様々な噂に悩まされていたのだ。自分一人ではなかった。カイムはため息をついて天を仰いだ。

「勝手にしろ」

空は青く澄んでいた。冬が近いのだ。しかし、地上に目を移せば焼け野原が続いている。わずかな荷を背負い、うつむき歩く人々の群れを見た。誰もが口をつぐんでいるために、恐ろしく静かな行進である。まるで葬列を見ているようだとカイムは思った。

国土の荒廃を目の当たりにしたのは初めてのことだった。先の内乱で王宮の被害も少なくはなかったものの、人が住めないほどではなかった。だから、国が崩壊しつつあることを頭ではわかっていても、今ひとつ実感がなかったのだ。

「俺は……何をやってたんだろうな」
父王の死後、本来なら背負うべき荷を放り出した。その結果が目の前の光景である。突然のできごとで混乱していたとはいえ、もっと他にやりようがあったはずだ。
「もう遅いか」
カイムは自嘲的につぶやく。過ぎてしまったことだ。どれほど悔いたところで、目の前の焼け野原が消えるわけでも、国を捨てざるを得なかった人々の暮らしが元に戻るわけでもない。
「ねえ、カイム兄さま」
フリアエが足を止めた。
「今日限り、王家の人間であることをやめてしまいましょうよ」
「何を今さら……」
こうして国を出ていくのだから、改めて言われるまでもない。
「王家の人間である限り、命を狙われたり利用されたりするわ。お父さまとお母さまが亡くなったのも、きっと国王であり王妃であったせいよ。だって、私と兄さまは生き残ったんだもの」
だから、とフリアエは微笑んだ。
「ただの人として生きていくの。もう二度と……あんな思いはしたくないから」
異国を流れ歩く身に出自など意味がない。ただの人として生きるなどと宣言する必要はないのだ。わざわざ口に出して言うことで、フリアエは恵まれた暮らしに別れを告げる不安を紛ら

わそうとしているのかもしれない。
「ね、良い考えでしょう」
両親が襲われたとき、自分は何もできなかった。国も民も守れなかった。だからせめて今日からは、妹のフリアエを守ろう。たった一人の肉親となってしまった妹を守って生きていこう。
「カイム兄さま。いえ……兄さん」
フリアエが照れたように笑う。この笑顔が再び翳ることがないようにと、カイムは心の底から願った。

国境近くにさしかかったときだった。遙拝所に黒い旗が揚がっているのを二人は見た。薄曇りの空の下、それはどこか不吉なものを感じさせる光景だった。おそらく今、世界中の神殿という神殿、遙拝所という遙拝所に同じ黒い旗が揚げられているに違いない。
「アシラ様が亡くなったのね」
フリアエの口調に重いものが混じったのは、女神アシラがガアプ王に恋慕したという噂を思い出したのだろう。
「封印の女神か……。そんなもの、本当は必要ないんじゃないか」
この世界を秩序づけている「大いなる時間」を正しい場所につなぎ止めているのが、森と砂漠と海にある三つの神殿の封印、そして女神自身の命である。神殿内の封印がすべて解かれ、

女神の命が失われたとき、「大いなる時間」はあるべき場所を失い、世界は混沌に包まれる。そして、生きとし生けるものすべてが滅亡の危機に瀕したとき、神の御手によって再生の卵が生まれ、世界に新たな秩序をもたらすという。

どうせ神によって世界が再生されるなら、最初から封印など不要なのではないかとカイムは思う。あらゆる時代にただ一人存在すると言われる封印の女神は、もとはただの人なのである。ごく普通の生活を送っていた女性がある日突然、女神と認定され、神殿の奥深く幽閉されることとなる。俗世との関わりを一切絶ち、家族にも恋人にも二度と会うことは叶わない。女神とされた本人と周囲の者たちにとって、これ以上の悲劇はないだろう。最初から封印などなければ、そんな悲劇も起こり得ないのだ。

「だめよ、そんなことを言っては」

フリアエがあわてて周囲を見回す。遥拝に訪れている人々の前で不敬なことを言うわけにいかないと思っているのだろう。

「神は私たち人間が自らの手で世界を守ることをお望みなのよ。お母さま……いえ、母さんが言ってたわ」

「俺は御免だな。どうせ再生するとわかっていて、何をわざわざ」

「兄さん！」

「もしもおまえが次の女神候補なんてことになったら、俺はおまえを連れてさっさと逃げ出す

さ。ちょっとの間我慢してれば、再生の卵が孵るんだろう」

フリアエに睨みつけられ、カイムは肩をすくめてみせた。これまで女神候補が逃げ出したという話は聞いたことがない。そんな簡単なことも思いつかないほど頭の鈍い連中ばかりだったということか。或いは、逃亡を図った事実が厳重に伏せられているか。

「まあ、俺たちには関係ないことだ」

空の色がにわかに暗くなってくる。一雨来るのかもしれない。その前にと、二人は宿屋へと急いだ。

異変が起きたのは夜半過ぎのことだった。フリアエの悲鳴を聞いたような気がした。闇の中でカイムは跳ね起きた。手探りで燭台を捜す。いや、明かりは必要なかった。部屋の片隅が仄白く光っている。

カイムはその場に立ちすくんだ。フリアエが床に倒れていた。その体が螺旋状の光に包まれている。

「フリアエ！」

抱き起こした体が奇妙な熱を帯びている。額や手は氷のように冷たいのに、光を発している部分だけが熱い。

「痛い……兄さ………」

フリアエの顔が苦痛に歪んだ。冷たい額から汗が流れ落ちている。カイムの脳裏に昼間見た光景が蘇った。遙拝所に揚げられた黒い旗。次の候補であることを告げる刻印は、螺旋状の文字列となって女神の体に現れると聞いたことがある。この螺旋状の光。まさか。

違う。これは病だ。

寝台にフリアエの体を横たえると、カイムは部屋を飛び出した。宿の主人が何事かと起き出してくる。

「治癒師を呼んでくれ！　病人だ！」

しかし、やってきたのは治癒師ではなく遙拝所の神官だった。治癒師を呼びに行くために鎧戸を開けた宿の主人は、その場に凍りついた。そして、気の毒そうな顔でカイムを振り返った。黒い旗が揚がり、神官が現れる。その意味がわからぬ者などいない。

「神官長の命によりお迎えに参じました」

なぜ、こんなにも早く？　なぜ、この場所を知っている？

まだ年若い神官は淡々とした口調で尋ねた。

「女神はこちらですね」

「違う。ただの病人だ。帰ってくれ！」

部屋に駆け込み、内側から掛け金を下ろす。両の手がはっきりわかるほど震えている。

「フリアエ……」

応えはない。もはや呻き声を上げることさえ苦痛なのか、フリアエは目を閉じたまま、ぐったりと横たわっている。なんてことだ……。たまらずカイムは両手で顔を覆った。昼間、自分が口にした言葉のひとつひとつが鋭い矢となって突き刺さってくる。

背後で扉を叩く音がした。開けてください、と神官の声がする。

「帰れ！」

扉に向かって怒鳴る。フリアエは渡さない。封印の女神は俗世の人間と接することができないだけではない。封印の力がもたらす苦痛に絶えず苛まれ、長くは生きられないと聞いている。たとえ世界が崩壊しようとも、そんな過酷な運命を妹の肩に担わせるわけにはいかない。

そうだ、昼間言ったことを実行すればいい。フリアエを連れて逃げるのだ。

「このままではお命に関わります」

カイムは顔を上げた。どういうことだ？

「転移の儀式はまだ終わっておりません。ここから先は、神官長が直接手を施さないと封印は完成しないのです。未完成の封印は女神のお命を削ります」

震える手でフリアエの頬に触れる。冷たい。王宮の中庭で母の骸を抱き起こしたとき、ちょうどこんな冷たさだった……。

「どうぞ、お急ぎを。神官長一行はすでにこの町へ向かっております」

女神候補が逃げ出さない理由がわかった。逃げられないのだ、この状態では。また、逃げた

ところで、すぐに神官たちが追ってくるのだろう。現に、ここへも驚くほどの迅速さで神官がやってきた。
「たとえ会えなくても……生きていらっしゃることに変わりはないのですから」
淡々としていた神官の口調に、ほんの少しだけ同情の色が滲(にじ)んだ。これまでにも、多くの者たちが同じ言葉で別れを受け容れてきたのだろう。二度と会えなくても、生き続けてくれれば。たとえ絶え間なく続く苦痛と孤独が待っていたとしても。
両親を一度に失い、残されたのは妹のフリアエだけだった。今また、その最後の一人を失おうとしている。……それでも、生きていてくれれば。
「フリアエ……許してくれ」
守ってやれなかった。それどころか、この手で妹を絶望の直中(ただなか)に放り込もうとしているのだ。もう二度と目の前で家族に死なれたくない、ただその思いだけで。
いつの間にか握りしめていたフリアエの手をそっと放す。立ち上がる。扉に歩み寄る。
カイムはゆっくりと掛け金を外した。

それから一月の後。遠い異国でカイムは、とある国の女王がブラックドラゴンにより惨殺されたという噂を聞いた。陰で糸を引いているのが「赤い目を持つ兵士たち」を率いる不気味な集団であることも。彼らは「帝国軍」と呼ばれ、日増しに勢力を広げているという。

そして、カイムは傭兵となった。黒幕の正体がわかった以上、黙っているわけにはいかない。一人でも多くの帝国兵を殺す。両親と国とを失い、為す術もなく妹をも失ったことへの怒りと怨みとを鎮めるためには、それしかなかったのである。復讐という言葉ですべてをすり替えるしか。

戦場を駆け巡り、ただひたすらに帝国兵を殺し続けた。母国の噂も、イウヴァルトの消息も聞かぬまま、五年の歳月だけが流れようとしていた。

3

女神はその短い生涯を神殿の奥深くで過ごす。俗世の人間と決して触れあうことなく、ひっそりと。先代の女神アシラも、そうやって一生を終えた。

しかし、フリアエが女神となった後、予期せぬ事態が発生した。帝国軍の侵攻である。どこからともなく、帝国が封印の女神を狙っているという噂が流れた。確かに帝国の進路は女神の神殿へと向かっていた。信仰と祈りの場である神殿には戦の備えなどなく、攻め込まれればひとたまりもない。

そこで、神官長は女神を他の場所へ移すように取りはからった。女神が匿われたのは、岩山と濠に囲まれた堅固な城塞の中。そこへ連合軍の兵力を可能な限り投入し、警護にあたらせれ

ば、急速に勢力を伸ばしている帝国であっても手は出せまい……。

にも拘わらず、帝国は常軌を逸した大軍で城を包囲した。その知らせを聞いて、カイムは急ぎ援軍に加わった。が、援軍到着までの間に次々と守りは破られ、ついにはカイムの目の前で城門が破られたのである。

無我夢中で敵を蹴散らしていられたのは、ほんのわずかな間でしかなかった。なんとか城門へと転がり込んだときには、相当な深手を負っているのがいやでもわかった。

まるで極寒の地で凍えながら剣を振り回しているようだと思う。一振りごとに重くなっていく腕と、鉛でもくくりつけたかのような足。加えてこの息苦しさ。それでもカイムは走り、剣を振るった。

おそらくフリアエは天守の最上階だろう。城攻めで逃げ込むとしたら、そこしかない。しかし、そこまで体力が保つだろうか。

時折、ふっと周囲の音が遠くなる。汗が目に入ったか、視界が悪い。それでも敵を斬り伏せることができる自分に半ば呆れ、半ば感心してしまう。五年に及ぶ傭兵暮らしは無駄ではなかったということか。

不意に回廊が途切れ、周囲が明るくなった。中庭に出たのだ。まずい。狭い回廊と違って中庭は囲まれやすい。しかし、中庭を迂回するだけの体力が残されているかどうか。天守までは

まだまだ遠い。事態は一刻を争う。

いや、ここは迂回するのが賢明だろう。自分の体力を信じて踵を返そうとしたときだった。

カイムの足が止まった。

「ドラゴン……」

深手を負ったせいで幻覚を見たのかと思った。何か他の猛獣の類が捕縛されているのではないか、と。が、他の獣ならまだしも、この自分がドラゴンを見間違えるはずがないのだ。あの鱗、あの鈎爪。夥しい矢を背に受け、幾重にも鎖で縛められてはいたが、紛れもなくレッドドラゴンだった。

夜の闇を凝らせたような鱗、真紅に燃える目。カイムの脳裏に蘇る光景があった。あの牙が父の喉に食い込み、あの爪が母の胸を引き裂いた……。ドラゴン。こいつが。俺とフリアエから両親を奪い、民からは国と平穏な暮らしとを奪った。

カイムは中庭へと足を踏み入れた。敵に発見されようが、囲まれようが、どうでもよかった。頼りない足を踏みしめ、近づく。すべての元凶。すべてを奪い、壊していった……。

償わせてやる。今ここで。俺が。苦痛と、死とで。

「殺すがよい」

その声で我に返った。剣を振り上げたまま、カイムは視線を落とす。

「ただ……」

もはや言葉を発することさえ苦痛なのだろう、ドラゴンの声はひどく掠（かす）れていた。吐く息とともに赤黒い滴が地面にこぼれ落ちる。

「我の命は奪えても、魂までは汚せぬぞ」

それでも最後の力を振り絞って頭を上げようとしているのは、人間ごときに見下ろされているのは我慢ならないと考えているのだろうか。

両親を殺されたせいで、カイムはこれまでドラゴンを獣と同列に見なしてきたが、実際には違う。途方もなく長い寿命と高い知能を有する、この世界で最強の生き物。「神の遣い」とも呼ばれる誇り高い生き物がドラゴンなのだという。

このレッドドラゴンを捕らえたのは帝国軍に間違いない。封印の女神を戴（いただ）く連合軍が、神の遣いであるドラゴンを捕縛するはずがなかった。帝国の連中はこのドラゴンを捕らえて使役しようと、戦場まで引っ張ってきたのだろう。或いは、地面に得体の知れない血文字が書いてあるところを見ると、何かの儀式に使おうとしたか。

「おまえに生きる意思はまだあるのか？」

剣を構えたまま、カイムは問う。こいつは帝国の軍門に下るのを潔しとしなかった。その結果がこの姿。ここで剣を振り下ろさずとも、ほどなく息絶えるに違いない。それは自分も同じこと。今のままではフリアエを守るどころか、天守にたどり着くことさえおぼつかない。

「他の道はない」

こいつも、自分も。生き延びるには、この道しか。ドラゴンが訝しげに首を揺らす。

「契約だ！」

人間が人間以外の生き物と心臓を交換することで、共に新たな力を手に入れる行為。それが契約だと聞いている。ただ、実際の契約がいかなるものなのか、心臓を交換し合うなど果たして可能なのかどうかは知らない。

「おぬしにそれほどの資格があるのか」

ドラゴンが小さく息を吐く。鼻で笑ったつもりらしい。

「資格などない」

知ったことか、そんなもの。ドラゴンの鼻先に剣を突きつける。力で脅せる相手ではないとわかってはいたが。

「俺は……」

契約。この俺が、親の仇であるドラゴンと生死を共にするなど。似つかわしくないと言えば、俺ほど似つかわしくない者はいないだろう。しかし。

「ただ俺は、生きたいだけだ」

死にたくない。俺はまだ復讐を果たしていない。帝国のやつらに。この手で帝国兵を根絶やしにするまで、俺は死ねない。

「答えろ！」

俺は生きる。どんな手段を使ってでも生き延びてやる。
「契約か？　死か？」
背後で鎧の鳴る音がした。ドラゴンが目を閉じる。カイムは舌打ちをして振り返った。帝国兵が数人。……邪魔しやがって。
「それでも俺は生きてやる！」
怒りに任せて突進した。無性に腹が立った。よりにもよって、大事な話し合いの最中に。
「失せろ！」
剣を叩きつける。しかし怒りはおさまらない。全身が熱い。視界が赤いのは返り血を浴びているからか、それとも怒りの激しさゆえか。
かかってこい。皆殺しにしてやる！
この怒りはいったい何なのだろう。契約の邪魔をされたからか？　帝国への憎しみか？　いや、それだけではないような気がする。俺は……。
「生き残れたのか」
背後でドラゴンの声がした。気がつくと、帝国兵の骸があちこちに転がっている。
「悪運の強いやつだ」
口調こそ笑い含みだったが、先刻よりもさらに息が荒い。死にかけているのだ。もはや一刻の猶予もならない。カイムは振り返る。その途端、地面が大きく揺れた。あわてて剣を杖代わ

りに体を支える。激痛が走った。
「答えろ……」
息をつくたびに背骨が締め上げられるようだ。自分に残された時間もまた少ないらしい。
「契約か？　死か？」
目が霞む。自分の声がひどく遠い。がくがくと震える足でカイムはドラゴンに近づく。頭を地面につけたまま、ドラゴンがゆっくりと目を開いた。
「おぬしの生きる意思に誓おう」
「では？」
縛めの鎖を食い込ませながらドラゴンが身を起こす。
「いいだろう。……契約だ」
カイムの右手が剣から離れた。放したのではない。勝手に離れたのだ。自分の意志とは無関係に手が動く。左胸に指先が吸い寄せられる。契約がいかなる方法で行われるかを知らなくとも、何ら不都合はないのだと悟った。
全身の骨と肉が一斉に悲鳴を上げた。体をねじ切られるような痛みが頂点に達した瞬間、右手が何かを掴み出すのがわかった。
まぶしくて目を開けていられない。光の矢が眼球めがけて突き刺さってくる。右手が握りしめている何かが、どくどくと脈打っている何かが、強烈な光を放っているのだ。

足が勝手に前へと動く。いつの間にかまっすぐに伸びた右手の先に、同じような光球がある。目が焼けるようだ。たまらず目を閉じる。それでもまぶしい。
瞼の内側までが真っ白になったときだった。唐突に光は消えた。空っぽの右手が宙を泳いでいる。カイムは思わず両の手を見比べた。握り、開く。あの操られているような感触は微塵も残っていない。全身を食らい尽くすかに思われた激痛も、跡形もなく消え去っていた。息苦しさもない。一瞬にして傷が癒えたのだ。
傍らで、夥しい数の矢と幾重にも巻きつけられていた鎖が音をたてて弾け飛んだ。傷ひとつない翼が大きく広げられる。咆哮が辺りの空気を震わせた。乗れ、と言いたげにドラゴンが振り返る。カイムがその背に飛び乗ると同時に、翼が風を切った。

初めての飛行は思いのほか短い時間だった。風の音が耳元でごうごうと響き、弧を描いて上昇したと思えば、もう下降を始めていた。天守の周辺にいた帝国兵たちをドラゴンは炎をひと吐きして焼き払うと、悠々と着地した。
中庭から城の最奥にある天守までがほんの一瞬である。つい先刻まで、たどり着けるかどうかさえ危ぶまれた長い長い距離が。ドラゴンが人間を見下すはずだとカイムは内心で苦笑した。
ドラゴンの背から飛び降りる。信じられないほど体が軽い。両手で握っていた長剣も、今なら片手で易々と振り回すことができそうだ。なるほど、人ならぬ強大な力を得たらしい。これ

なら、とカイムは薄く笑う。
内部へと続く入り口には、兵士であったと思われる黒焦げの塊が転がっている。ここから先は狭い通路、一人で行くしかない。背後のドラゴンを振り返る。ここで待ってろ、と言おうとしたカイムは呆然(ぼうぜん)とする。
「……！」
開きかけた形そのままに口許が固まった。
「声を失ったか」
契約には代償が伴う。そのことを失念していた。強大な力と引き替えに、その人間にとって最も大切な身体の機能をひとつ失うのだ。そして、失った部分には契約の代償を示す紋章が現れるという。おそらく自分の舌にも、その印が刻まれているに違いない……。
「減らず口など、あって百害。契約の代償としては軽いものよ」
ドラゴンがどこか楽しげに言う。己の契約相手であっても、ドラゴンにとって人間は蔑(さげす)みの対象でしかないのだろう。
しかし、なぜ……。なぜ、代償が声であったのか。それほど大切に思った覚えなどないというのに。ドラゴンではないが、言葉などあって百害と感じたことすらある。なのに、それが代償として失われるとは。
「案ずるな。我がおぬしの声となろうぞ」

どういうことだ？　いったいそんなことが可能なのか、と訝しく思ったが、それだけで通じたらしい。ドラゴンはうなずいた。

「契約者たる人間と我々は、〝声〟を交わすことができる」

声？　俺の声は契約の代償として失われたんだろう？

「その声ではない。そうさな、人間どもの言葉でいえば……思念、といったところか」

ということは、こいつは人間の心の中を読むのだろうか。現に、こうして意思の疎通が図れている。

「心の奥底まで覗き込むような下賤な真似はせぬ」

心外だと言わんばかりにドラゴンは頭を振った。

「行け。ここでおぬしが帰るのを待っておる」

もしもこの中で俺が死んだら、どうするつもりだ？　いつまでも待ち続けるのか？

「おぬしが死んだことなどすぐにわかる。我が命もそこで尽きるゆえ」

わかった、とカイムは片手を上げてみせた。ここで休んでいろ。ひと暴れしてくる。この中にどれくらいの帝国兵がいるのかは知らないが、一人残らず叩き斬ってやる。

「憎しみだけでは生き残れまいて」

皮肉な声を振り払おうと、カイムは背を向け走り出す。生き残ってみせるさ、と胸の内でつぶやく。今までずっと、憎しみだけを支えに生きてきた。それだけで十分だ。もっとも、ご高

潔な神の遣いには、人間の憎しみが生み出す力など理解できようはずがない。理解して欲しいとも思わないが。

薄暗い通路に味方の兵士たちが転がっていた。帝国軍にやられたのだ。どの死体もむごたらしく切り刻まれている。

おまえたちの仇はとってやる。一兵たりとも逃しはしない。

と、骸だとばかり思っていたひとつが動いた。まだ息があったらしい。

「女神は……最上…階……」

わかったと答えてやりたかったが、声が出せない。見えているかどうかは定かではないが、カイムはうなずいてみせた。

「イ…ウヴァ……ル……」

イウヴァルト？　来ているのか。その先を聞こうとして屈み込んだときには、兵士はすでに事切れていた。おそらく、女神フリアエの潜伏先が襲われたと聞いて、イウヴァルトは居ても立ってもいられなくなったに違いない。そして、女神の許へ馳せ参じた、ということだろう。

不意に足音が聞こえ、カイムは弾かれるように立ち上がった。通路の向こうに人影が見える。帝国兵だ。そのまま突進して剣を突き出す。漆黒の鎧が二体そろって吹っ飛ぶ。あまりの手応えのなさに拍子抜けしてしまう。とても人間二人分の重さとは思えない。

次から次へと敵が押し寄せてきても、取り囲まれても、恐れることはなかった。敵兵たちの

動きがひどく鈍い。隙だらけだ。面白いように剣先が鎧を切り裂いていく。人間を斬っているという実感がまるでない。棒杭でも相手にしているかのようにたやすい。つい先刻まで、こんな連中を相手に苦戦していた自分が情けなく思えてくる。

これが契約によって得た力か。

縦横に剣を振るい続けても、全く疲れを感じない。それどころか、ひと振りごとに力が漲ってくるような気がする。口許に笑いが浮かんでいるのが自分でもわかった。夥しい返り血を浴びながら笑う。血の匂いに酔っているのだ。

気がつくと、敵はいなくなっていた。敵であったものはすべて骸となって、そこかしこに転がっている。殲滅に要した時間は物足りないほど短かった。高揚した気分が急速に醒めていくのを感じながら、階段を駆け昇る。

これまで契約者というものに相まみえたことはなかった。これほどの力が手に入るにも拘わらず、契約者は決して多くはないと聞いた。なぜだろう。

冷静さが戻ってくると、そんな疑問が涌いた。

代償として何かを失うのを恐れてのことか？　いや、そんなことはないはずだ。人間はそこまで臆病ではないし、無欲でもない。

――心の内に底無しの闇を飼う者でなければ、契約者にはなれぬ。何が何でも生きたいという意思を持ち、そのためには他者を犠牲にすることも厭わないという利己的な者でなければな。

負の心が精霊や魔物たちを惹きつける。

カイムは思わず足を止めた。辺りを見回す。確かにドラゴンの声を聞いた。

——遠く離れていたとしても、〝声〟を交わすのに何ら支障はない。

そういうことならば、離れていたから心の中を覗かれずにすむというわけではないのか。

——覗いたわけではないと何度言わせる。あれほどやかましい声を聞くなというほうが無理なもの。耳を塞ぐわけにもいくまい。

これだから人間は、と呆れ返ったような声が聞こえてくる。

——最下級の魔物でさえ当たり前のように使いこなす能力を。

嘲(あざけ)りを無視して、カイムは再び階段を駆け昇った。

——先を急ぐがよい。不穏な動きを感じる。

言われなくともわかっている。黙ってろ！

階段から通路に出るなり、不意打ちを食らわせようとしたのだろう、いきなり帝国兵が飛び出してきた。難なくかわし、脳天を叩き割る。声はそれきり聞こえなくなった。

悲鳴が聞こえたのは、ちょうど階段を昇りきったときだった。開け放たれた扉の向こうに帝国兵、いや帝国騎士団員の姿が見える。城の周辺に群がっている雑魚(ざこ)どもと違って、帝国騎士団は最前線には滅多なことでは姿を現さない。傭兵として最前線で戦ってきたカイムは実際に

剣を交えたことはなかった。が、骸を見たことはある。遠目からでもわかる特徴的な鎧を纏っていた。
フリアエ……！
全力で走る。ほんのわずかな距離が果てしなく思われるほど遠い。騎士団員が五人、部屋から飛び出してくる。
邪魔だ。どけ！
一刀のもとに斬り捨て、部屋に飛び込む。
「カイム！」
イウヴァルトの驚いた顔。
「く、来るなっ！」
一人残った騎士団員が白い服の女を羽交い締めにして叫ぶ。うつむいていた女が顔を上げた。その目がわずかに見開かれる。
フリアエ？　フリアエ……なのか。生きて再び会うことはあるまいと思っていた……。
「そ、それ以上近づくと女神の……」
みなまで言わせるつもりはなかった。カイムは跳んだ。血の色の双眸めがけて剣を突き立てる。鎧に包まれた体が壁に叩きつけられる。今度は喉元を突き刺す。
許せない。許すものか。空白の五年間。俺とフリアエがこんな場所でこんな再会をしなければ

ばならなくなったのは、誰のせいだ？　人形のように生気のないフリアエの顔。それもこれも、何もかもこいつらの……。

　何度も何度も剣を振り下ろす。鎧が拉(ひし)げ、血溜まりを泳ぐ。

「もういい！　カイム、もういいんだ。もう死んでる」

　イウヴァルトの声で我に返った。骸から剣を引き抜く。フリアエを怯えさせてしまったかもしれない。振り向くと、白い衣服が返り血に染まっているのが目に入った。

　が、フリアエは怯えた様子もなく、ぼんやりと立っている。恐ろしさに感情が麻痺(まひ)してしまったのならまだいい。しかし、恐れることすら忘れてしまったかのような顔。五年前の、快活な少女の顔はそこにはなかった。目鼻立ちは紛れもなくフリアエのものだったが、まるで中身がそっくり抜き取られてしまっているかのような。

「相変わらず激しいやつだな」

　イウヴァルト。五年経ってもこいつは変わらない。相変わらずなのはお互い様だ。

「だが、助かったよ。またおまえに助けられたな」

　そういう言い方はやめろよ、と言おうとして自分が言葉を失っていたことを思い出す。

「ん？　どうした？」

　いったいどうやって説明したものか。とりあえず自分の喉を指さした。が、イウヴァルトは訳がわからないといった顔をしている。今度はしゃべる真似をして、喉を指さす。それを何度

も繰り返した。

「おまえ、言葉が……」

ようやく理解してもらえたらしい。とはいえ、それが契約の代償であることまではわからないだろう。カイムは口を開けて、舌を出してみせる。

「まさか、契約者に？」

カイムはうなずいた。イウヴァルトとフリアエが顔を見合わせる。

「そうか……」

イウヴァルトは戸惑いを隠そうともしなかった。馬鹿がつくほど正直なのは変わっていないらしい。しかし、フリアエのほうはやはり何の表情も浮かべていない。

考えてみれば、フリアエは封印の女神としてすべてを捨てさせられた。カイムが契約の代償として失ったのは、言葉のみ。その程度では驚きに値しないということなのかもしれない。

重苦しい沈黙が続いた。フリアエはほとんど言葉を発しようとはしなかったし、カイムに至っては話したくても話せない。イウヴァルトが黙り込むと、どうしても沈黙が続いてしまうのである。

「なあ、カイム」

ようやくイウヴァルトが口を開く。

「俺は、フリアエをエルフの里に連れていこうと思ってる」

エルフの里は、永世中立で知られている。森に囲まれた小さな里だが、守りにかけてはどんな城塞にも引けを取らないという。

「あそこなら、帝国軍もそう簡単には手が出せないはずさ」

本当にそうだろうか。永世中立の里だから安全だと言い切れるものなのか。

「女神を連れ回すなど畏れ多いことだが……仕方あるまい？」

確かに、この城が落ちるのは時間の問題だ。一刻も早くフリアエを脱出させ、落ち着き先を捜さねばならない。

「もともとは俺の許嫁なんだ。死なせたくない」

許嫁、という言葉がわずかに胸を刺した。

「フリアエは、おまえにとっても大切な妹だろう？　女神である以前に」

こうなってしまうと、イウヴァルトは自分の考えを決して曲げないだろう。物心つく前からのつき合いだ。それくらいのことはわかる。が、肝心のフリアエはどうなのか。カイムはフリアエに視線を移す。

「私は生き続けなければならないのでしょう」

抑揚のない声だった。イウヴァルトの言葉にも心を動かされた様子がない。

「世界の封印を保つ女神として」

まるで他人事のようにフリアエは言葉を紡ぐ。五年の間、フリアエがどんな日々を過ごして

いたのか、垣間(かいま)見えた気がした。

「いいだろう?」

カイムはうなずいた。そして、肩をすくめる。どうせ俺が何を言っても、おまえは聞きゃしないんだろうが。

「そうか」

イウヴァルトはうれしそうに笑い、傍らに倒れている椅子を起こした。

「それでは祝杯を」

戯(おど)けたように言うと、竪琴を手に取った。そんな悠長なことをしている場合か。カイムは顔をしかめてみせる。

「少しは休め。ここまで走りづめだったんだろう」

イウヴァルトの指が弦をつま弾く。もう長いこと忘れていた音色だ。……おそらくフリアエにとっても。ならば、これでいいのかもしれない。

美しい歌声が部屋を満たしていく。こうしていると昔に返ったようだ。もちろん、今も階下ではむごたらしい殺し合いが続いているし、三人とももはや屈託のない子供ではない。それでも、とカイムはフリアエの横顔に目をやる。人形のようだった顔に、わずかに穏やかさが見えたような気がした。

第二章
天使たちは血を食し



1

不測の事態ではなかった。いつかこの日が来ることは、里の誰もが予期していた。不気味な赤い目の兵士たちが諸国を蹂躙し始め、「天使の教会」を名乗る正体不明の集団が近くの渓谷に住み着いたと、風の噂に伝え聞いたそのときから。

備えは万全だった。エルフは本来、争いを好まない温厚な種族であり、自ら他国へ攻め込むことは決してしない。が、他国に侵略された場合は別である。いかなる国に対しても決して与せず、里人すべてが女子供に至るまで一丸となって戦う。周辺諸国に対して永世中立を貫く以上、当然のことである。エルフの里に生まれた者は、読み書きよりも先に武器の扱いを教えられる。

だから夫が弓を摑み、短く「森へ」と言い捨てて出ていったときも、アリオーシュはうろたえたりしなかった。森の奥へ逃げ込め。ふたつの橋は俺たちが守る。子供は任せた。そういう意味だ。急いで使い慣れた剣を腰に差し、まだ幼い娘の手に弓を持たせた。

ただ、せめてあと半年先のことであればと思わずにいられなかった。娘はまだ弓の扱いを習い始めたばかり、敵を倒すことはおろか、身を守ることさえ心許ない。アリオーシュ自身も子を宿した体、戦いにはいささか不利である。せめてあと半年あれば。娘は初陣の兵士程度なら

難なく仕留められるようになっているだろうし、自分もまた身ふたつになっているのに。

考えても詮無いことだった。アリオーシュはまとわりつく不安を振り払い、娘の手を引いた。母さま、と言いかけた娘が口をつぐむ。武器を持たされたら必要以上に言葉を発してはならない。これもまた、エルフの里の子供たちが物心つくと同時に教え込まれることである。

「大丈夫よ」

微笑(ほほえ)んでみせると、アリオーシュは足早に歩き始める。石畳の道は使わず、樹々の間をかき分けるようにして進む。里人だけが知っている「道」である。森の奥には巨大な迷路にも似た洞穴群がある。道はそこへ通じていた。

橋からずいぶん離れているはずなのに、風向きのせいだろうか、何かが焦げる臭いが漂ってくる。娘が肩で息をしているのがわかったが、アリオーシュは歩調をさらに早めた。里へ通じるふたつの橋以外には結界が幾重にも張り巡らしてあるし、里の男たちがそう易々(やすやす)と橋を明け渡すはずがない。わかってはいたが、不安は去らなかった。

不意に枝の折れる音がした。アリオーシュはあわてて立ち止まる。鈍色(にびいろ)の鎧(よろい)、血の色の双眸(そうぼう)。

……馬鹿な。なぜ、前方から敵が現れるのだろう。それも一度に四人。

「逃げなさい！　早く！」

狼狽(ろうばい)していたのは一時のことだった。娘を背後に押しやり、剣を抜く。目の前を薙(な)ぎ払う。突く。叩きつける。

鎧がひとつ、沈んだ。あと三人。仕留められない数ではない。またひとつ、鎧が傾く。古木の幹で背を守りながら、剣を振り下ろす。あと二人。

そのときだった。下腹部に鈍い痛みが走った。アリオーシュの手が止まる。ほんの一瞬だったが、それが命取りになった。痺(しび)れにも似た衝撃が両腕に伝わる。剣が弾き飛ばされる。とっさに身をかわしたが間に合わなかった。左腕に焼けつくような痛みを感じた。

髪を掴まれた。締めつけてくる腕から逃れようと、アリオーシュはもがいた。何かが折れる音がした。木の枝を折るような乾いた音ではなく、もっと不愉快な音。腕を折られたのだと思った。それでも構わず身をよじり、頭をのけぞらせる。

アリオーシュの全身が凍りついた。上下が逆になった視界の先、逃げたはずの娘を鈍色の腕が捕らえていた。折られたのは自分の腕ではなかった。

不自然な方向に曲がった首。だらりと力無く垂れ下がった手足。

絶叫が森を震わせた。

どれだけの時が経ったのか、どこをどう逃げてきたのか、アリオーシュには何ひとつわからなかった。

「私の……子供はどこ？」

荒い息とともにつぶやく。沈黙が怖かった。

「捜さなきゃ……」
一足歩くごとに下腹が鈍く痛んだ。脚を伝って血が流れ落ちる。それでもアリオーシュは歩いた。いつの間にか右手には見慣れない剣を握っている。こんなもの、いったいどこで手に入れたのだろう?
「どこ……? どこにいるの?」
きっと心細くて泣いているだろう。女の子にしては気が強すぎると言われる娘だったが、それでもまだ母と離れて平気でいられる年齢ではない。
「今、行きますからね。泣かないのよ」
鈍い痛みはいつしか引きつるような痛みに変わっていた。それでも立ち止まるわけにはいかない。左手で下腹を押さえ、右手の剣で体を支え、歩き続けた。
「ここは、どこ?」
森の中でも、見慣れた里の中でもない。どこだろう。無惨に踏み荒らされた畑が延々と続いている。どうやら人間たちの住む里に出てきてしまったらしい。急がなければ。エルフの里から一歩も出たことがなく、商人の姿を見たこともない娘の目に人間は、オーガにも等しく映るに違いない。
「早く……急がなきゃ」
道の向こうに人影が見えた。あの人間に訊(き)いてみよう。エルフの子供は人里では珍しいから、

きっと知っているはずだ。
よろめきながら、それでもできるだけ足早に人影に近づく。女だ。人間の女。子供を抱いている。子供？
「子供……」
そうだわ、私は子供を捜しているのよ。
「私の……子供を返して」
女が後ずさる。その目に浮かんだ怯(おび)えの色。わかった、この女が私の子供を盗んだんだ……。
「返して！」
女の肩に剣を振り下ろす。それでも女は子供を放そうとしない。
「私の子供よ！」
女の腕から小さな体を奪い取る。がら空きになった胸に剣を突き立てる。何か言いたげな顔のまま、女は仰向けに倒れた。子供が大声で泣き出す。
「泣かなくていいのよ。もう大丈夫」
子供は泣きやまない。
「かわいそうに。怖かったのね」
きつく子供を抱きしめる。きつく。もっと、きつく。持てる力のすべてで。
いやな音がした。何かが折れる音。どこかで……どこかで聞いた気がする音。娘が殺された

ときの。違う！　殺されてなんかいない！　ちょっと迷子になっただけ。だってほら、今こうして私の腕の中にいる。
「誰にも殺させない……。私が守る」
でも、どうやって？　ここは森の外。辺りは敵だらけ。どうやって守ればいいの？
「私が守る」
子供はいつの間にか静かになっている。
「いい子ね。そうよ。母さまがいるから何も心配いらないの」
そうだわ。母さまのお腹の中に戻りなさい。そこなら誰も手出しはできない。
「ひとつになりましょう。私の赤ちゃん」
もう決してあなたを産んだりしないわ。ずっとお腹の中にいなさい。外の世界は危険がいっぱいだから。
白い喉に歯を立てる。流れ込んでくる命の滴。私が守る。誰にも渡さない。ひとつになりましょう。柔らかな肉。甘い……なんて甘い。とろけるよう。あら、私は何を食べているんだったかしら？
やがてアリオーシュは立ち上がった。血塗れの口許を手の甲で拭い、つぶやく。
「子供……。子供はどこ？」
声をたてて笑いながら、アリオーシュは歩き始めた。

2

鬱蒼とした森がどこまでも続いていた。緑というよりも黒に近い色の葉を茂らせた樹々は、陽の光だけでなくあらゆる音を遮っているかのようである。行けども行けども静寂が辺りを支配していた。獣の気配はおろか、鳥の啼く声さえ聞こえない。

周辺に住まう者たちは、この森の静けさを薄気味悪がって、滅多なことでは足を踏み入れようとしないという。

しかし、この森を通り抜けるのが、エルフの里への最も安全な道筋だった。開けた平地の道と違って、樹木の生い茂る森の道は身を隠しやすい。また、大軍と遭遇した際、反撃や逃走も容易である。警護にあたる兵士の数に限りがある今、森の暗さも薄気味悪さも物の数ではなかった。

実際、城を出て数日、帝国軍の襲撃はなかった。残りの行程はあと五日ほど。現時点では、イウヴァルトの選択は正解だったと言える。

この数日間、イウヴァルトはカイムに対して子供のころに戻ったかのような親密さを示してきた。敵に囲まれた中での再会がかえって幸いしたのだろう。戦乱とは無縁な場所で再会していたら、お互いに気まずさを隠しきれなかったかもしれない。

カイムが言葉を失っていたのも、穏やかな空気を保つ上で役に立っていた。話し役と聞き役という分担が固定してしまえば、口論になりようがない。必要な事柄はドラゴンが伝えてくれる。つくづく軽い代償であったと思う。

城を脱出したときにはほとんど口を開こうとしなかったフリアエも、いくらかなりとも言葉を取り戻しているかのように見えた。イウヴァルトが夜毎奏でる竪琴(たてごと)に癒(いや)されたのかもしれない。とはいえ、無表情は相変わらずだった。二人で国を出たときの、はにかんだような笑顔を思い出しては、カイムはやりきれない思いに駆られる。

もっとも、自分にしても同じことだった。最後に声をたてて笑ったのはいつだっただろう。片時も忘れたことのない怒りが、すべての感情を食らい尽くした。昔と同じように三人でいても、その怒りが消えることはなかった。

自分たち兄妹は変わってしまった。笑うことを忘れ、語り合う言葉をなくした。再会の喜びよりも、今は失ったものを見せつけられるほうがつらい。

「なあ、カイム。女神が死ぬと世界が終わるんだろう。でも俺は……フリアエがこんなことになった今、もう世界の終わりって気分だよ」

とっくの昔に終わってるよ、俺にとっては。

それでもカイムは黙ってうなずいてみせた。穏やかな語らいも今は苦痛でしかない。戦場へ戻りたかった。あの殺戮(さつりく)の日々が無性に恋しい。フリアエを安全な場所に送り届けたら、その

足でどこかの戦場へ向かおう。イウヴァルトにも二度と会うまい。もはや生きる世界が違うのだ。

イウヴァルトの言葉を聞き流しながら、カイムはひたすら戦いへと思いを馳せていた。

広い沼地のそばで野営していたときだった。上空を旋回していたドラゴンが舞い降りてきた。兵士たちが一斉に顔を上げる。カイムに対する遠慮で誰も口には出さないが、やはりドラゴンを間近に見るのは恐ろしいらしい。

「どうかしたのか」

イウヴァルトが怪訝そうに訊いた。カイムの契約相手だからか、イウヴァルトはドラゴンに対して極めて友好的な態度をとっている。その結果、ドラゴンと直接言葉を交わすのはイウヴァルトの役目となった。

「エルフの里が襲われた」

イウヴァルトが目を見開く。しかし、カイムはさほど驚きを覚えなかった。予期せぬ事態ではなかったからだ。帝国軍の強さは身にしみて知っている。おまけに理屈や常識が通用しない相手であることも。永世中立の里であろうとなかろうと、攻め込むのに躊躇するとは思えない。

「おそらく全滅であろう」

「馬鹿な」

「声を感じるのだ、我らは」

「あり得ない。永世中立の里が襲われたなんてことになったら、世界の秩序は無茶苦茶になるぞ。……そうだろう?」

同意を求めるようにイウヴァルトが視線を向けてくる。しかし、カイムは静かに頭を振った。自分には聞こえないが、ドラゴンが声を聞いたというのだから間違いないだろう。エルフの里は帝国軍に襲撃され、全滅したのだ。

どうする、とドラゴンがカイムを見下ろしてくる。エルフの里が全滅した以上、行くだけ無駄だとはわかっていた。だからといって、代わりにどこへ行けばいいのか……。

「俺は信じないぞ!」

イウヴァルトが叫んだ。

「実際に行って見てきたわけじゃないんだろう。契約者の力だかなんだか知らないが、この目で確かめるまで、俺は信じない」

そんなイウヴァルトを見ながら、昔からそうだったとカイムは思う。自分が不利になるほどむきになる。

——どうするのだ?

ドラゴンがカイムだけに問いかけてくる。

イウヴァルトの好きにさせるさ。どうせ他に行くあてなんてないんだ。

――ならば好きにするがよい。
ドラゴンは音をたてて翼を広げた。この見下したような物言いをイウヴァルトが聞いたら、さぞや激怒するだろうと思う。
「何か……あったのですか」
背後からフリアエの静かな声がした。イウヴァルトが怒鳴っているのを聞きつけたらしい。
「いや、なんでもないんだ」
イウヴァルトがフリアエに駆け寄った。すでに怒りの色はない。
「心配しなくていい。それより、横になってたほうがいいんじゃないのか」
「いいえ。大丈夫ですから」
穏やかな答えとは裏腹に、顔色が紙のように白い。封印によってもたらされる苦痛は、どこへ行ってもついてくるのである。女神の体に絡みついている文字列がある限り。
「無理をするんじゃない。休んだほうがいい」
フリアエを横から抱えるようにしてイウヴァルトが歩き出す。が、すぐに振り返ってつぶやいた。
「早く安心して休める場所へ連れていきたいんだ」
カイムにというよりも、むしろ自分に言い聞かせているかのような口調である。
「これ以上、無理をさせたらフリアエは……」

わかったとカイムはうなずいてみせる。確かに、フリアエをいつまでも連れ回しているわけにはいかない。日を重ねるごとにフリアエの消耗が激しくなっていくのがわかる。歩かせているわけではないが、重病人のようなものなのだ。騎乗での移動が体に障らないはずがなかった。せめて空が安全ならばと思わずにいられない。ドラゴンでの飛行は地上を行くのとは比べものにならないほど早い。だがその分、危険度も格段に高い。帝国の空中兵器部隊が鬱陶しいほど頻繁に出没するからである。カイム一人ならば願ってもないことだが、フリアエを連れて飛ぶには無謀すぎる。

やがて天幕のほうからイウヴァルトの奏でる竪琴の音が流れ始めた。

エルフの里の正確な場所は、意外にも知られていない。用心深いエルフたちが里の周囲に結界を張り巡らした上に、いくつもの目眩ましを仕掛けているためである。里の周囲は森に囲まれ、さらにその外周は流れの速いふたつの川に挟まれている。里へ続く橋はたった二つ、しかも厳重すぎるほど厳重な見張りが立てられていた。商人や敵意のない旅人ならば橋を渡ることを許され、里へ案内されるが、その道筋を覚えられた者はいないという。

「強力な結界が張られておる。声が聞き分けられなくなった」

眼下に森を見下ろしながら、ドラゴンがつぶやいた。帝国の空中兵器部隊を一掃したついでに、上空からおおよその所在地を確かめておくことにしたのである。見た目にはわからなくと

も、声を頼りに探すことは可能なはずと踏んだ。しかし、エルフの里に近づいたとたん、声の方角がわからなくなったとドラゴンは言う。
焼け跡の類が見えるのではないかと、カイムは目を凝らした。帝国軍の襲撃は恐ろしく派手かつ稚拙だった。数に物を言わせて片っ端から住人を殺し、建物を焼き払う。ただそれだけで、何ひとつ工夫というものがない。襲われた町や村はどこも皆、そろって焼け野原になるのだ。
「それが見えれば苦労はせぬわ。結界が生きている以上、どれほど目を凝らしても、ただの森にしか見えぬ」
里が燃えている最中ならまだしも、とドラゴンは吐き捨てた。エルフ族には強力な魔法の使い手が数多く存在すると言われている。その彼らが張った結界なのだ。
「いや。地上近くの結界がわずかだが綻びておる」
帝国軍がエルフの里を襲撃する際に破ったものだろう。帝国兵が開けた穴を利用するのは癪に障るが、このまま上空を旋回していても埒があかない。結界の綻びがどの辺りにあるのか、カイムには全く見えないが、ドラゴンは一直線に下降を始めた。
細い線にしか見えなかったものが次第に太さを増し、川になる。橋が見えてくる。当然のことながら、見張りの姿はない。
「どうやら我が翼では入れぬようだ」
橋の真上を何度か往復した後、あきらめたようにドラゴンが言った。

「しかし、間違いなく何かの気配がある。おそらく帝国兵であろうがな」

橋の上を見るともなく見ていたカイムは、ふと違和感を覚える。あちこちに矢が突き刺さり、血の跡もまだ生々しく残っているというのに、エルフの死骸が見当たらないのだ。川沿いに倒れていたのも、帝国兵の骸ばかりだった。見張りのエルフたちは真っ先に帝国軍の餌食になったはずだ。それとも、彼らは持ち場を捨てて逃げ出したのだろうか。

不意に、視界の端を何かが横切った。帝国兵だ。ドラゴンがゆっくりと旋回して炎を吐く。十分に届く距離だった。後には黒焦げの骸が点々と残るはずだった。が、炎の中で動く人影を見たような気がした。目を疑った次の瞬間、衝撃がやってきた。

「エルフの血か！」

緑色の光が襲いかかってくる。ドラゴンはそれを急旋回で避けると、翼を鳴らして上昇した。

何だったんだ、あれは？

「エルフの血には、我が炎を跳ね返す力がある。鎧に塗りつければ、魔力や呪文の類も一切効かぬ」

もしや、橋の上にエルフの死骸がなかったのも……？

「連中はその場で死骸を切り刻み、鎧に血を塗りつけたのであろう」

そして、その残骸を川に放り込んだ……。ならば、この橋の向こうに生存者がいる可能性はまずない。

「戻るか？」

いや。俺は里へ向かう。

「無駄なことを」

せせら笑いながらも、カイムの言わんとすることがわかったのだろう、ドラゴンは再び急降下を始めた。

おそらく何を言ってもイウヴァルトは聞き入れない。里の惨状を目の当たりにするまでは。だとしたら、先に危険を排除しておく必要がある。帝国兵が徘徊する場所へフリアエもろとも突っ込ませるわけにはいかない。

赤黒い鎧が前方に見える。炎や魔法を跳ね返すというのなら、鎧もろとも切り裂いてしまえばいい。簡単なことだ。

地上での戦いは数日ぶりだった。己の両手が血と肉とを欲しているのを感じながら、カイムは敵の真っ直中へと斬り込んでいった。

橋を渡った後、里までの道を探すのはさほど難しいことではなかった。あたかも道標のように帝国兵の骸が転がっていたからである。仲間の骸をいちいち片づけるような連中でなかったのが幸いした。

しかし、同じ道筋をたどってフリアエがやってくるかと思うと、気が滅入った。心身共に衰

弱している妹にこの光景を見せたくなかった。悪いことに、すでに骸は腐敗し始めている。目を閉じたとしても、この死臭はごまかせない。いや、フリアエは眉ひとつ動かさずにこの道を行くだろう。その様子を想像するとたまらなかった。

時折、襲いかかってくる帝国兵を蹴散らしながら、奥へと進む。と、不意に体が弾き飛ばされた。何が起きたのかわからないまま、急いで体を起こす。左肩が痺れている。また何かが飛んでくる。とっさに地面に転がってかわす。

飛び起きて身構える。得体の知れない何かが飛んできた方角にいたのは、兵士ではなかった。白い衣を纏った人影が見える。白い人影が右手を挙げた。その手の先が光った。音をたてて火の玉が飛んでくる。

さっき食らったのはあれか……。

今度は余裕をもってかわした。相手の出方をうかがう。連続で放つことはできないのか、再び右手が挙がるまでに間がある。火の玉が来る。それを避けて走る。白い人影が近づいてくる。また右手が挙がる。かわす。そのまま突っ込む。

白い布がふわりと舞い上がった。さらに斬りつける。頽れるように相手は倒れた。白い衣がみるみる赤く染まっていく。おそらく帝国の手先だろう。どうやら連中は魔術師まで抱き込んでいたらしい。

ようやく左腕に感覚が戻ってくる。正直な話、敵が一人で助かった。魔術師に取り囲まれた

りしたら、果たして無事にすんだかどうか。
周囲を見回す。どんな小さな気配でも見逃すまいと目を凝らし、耳をそばだてる。と、少し離れたところから石畳の道が始まっているのが目に入った。里へ続く道に違いない。この魔術師は里の入り口を見張っていたのだ。
里の中は予想に違わず破壊され尽くしていた。例によって、殺戮の後に火を放つという帝国軍のやり方のせいで、建物も木々も焼け落ちていた。まるで鬱蒼とした森の中に突然、広場が現れたかのようだ。目眩ましの類が仕掛けられていなければ、上空からもこの惨状が見下ろせたに違いない。
ただ、奇妙なことに、エルフたちの骸はもちろんのこと、肉片ひとつ見当たらなかった。律儀に後片づけをしていくような連中ではないから、この場で住人たちを切り刻んだわけではないらしい。
いくつか焼け残っている建物もあるが、扉や窓はどれも破られていた。帝国兵が待ち伏せしている気配はない。破壊と略奪を終えて引き揚げていったということだろうか。それにしては、里の入り口には魔術師が残っていた……。
「……助けて」
か細い声が聞こえた。焦げ臭い建物の中で、カイムは耳をそばだてる。何か重いものが落ちる音がした。石造りの暖炉から黒く汚れた手がのぞいている。生存者がいたのだ。

「里人たちが……みんな捕らえ……られて……」

煤まみれのエルフを暖炉から引きずり出し、仰向けにする。このエルフがもう間もなく唯一の生存者でなくなることは、一目でわかった。

「この近くの渓谷……天使の…教会……宮…殿……」

天使の教会？　エルフたちを襲ったのは帝国軍のはずだ。だとすれば、連れ去ったのも帝国軍のはず。しかし、それ以上の情報を得ることはできなかった。瀕死のエルフは二度、三度と体を痙攣させ、それきり動かなくなった。

——何があったのだ？　結界が消えた……。

ドラゴンの声が聞こえてくる。どうやら、里の中がこれほどの惨状でも結界が生き続けていたのは、生存者がいたためだったらしい。最後の一人が死んだことで、結界の効力が失われたのだ。

その声を無視してカイムは焼け残った建物を調べるという作業を続けた。無視したがっているのが通じたのか、ドラゴンもそれ以上は話しかけてこなかった。

里の外れまで来たときだった。もとは広場であったらしい場所で、カイムは足を止めた。帝国兵の骸が転がっていたのだ。それだけなら別段めずらしいこともないが、十字に切り裂かれた挙げ句、口の中に剣を突き立てられていた。住人の反撃にやられたのではなく、仲間内での制裁だろうか。

そのまま立ち去ろうとして、地面に血文字が書かれているのに気づく。ドラゴンが捕らえられていたとき、周囲に書かれていた血文字を思い出す。あれは判読不可能だったが、こちらは辛うじて読みとれる。

天使を語ってはならない
天使を描いてはならない
天使を彫ってはならない
天使を歌ってはならない
天使の名を呼んではならない

——なんだ、それは？
ドラゴンの声がした。心の中で読み上げた声を聞かれてしまったのだ。このところ、ようやく無闇に「わめき散らす」こともなくなっていたが、妙なものを見たせいでつい〃声〃を上げてしまったらしい。
この奇妙な文句が、さっきのエルフが言っていた「天使の教会」と何らかの関係があるのは確かだろう。が、これが何を意味しているのか、何のために書かれたのかはさっぱりわからない。得体の知れない薄気味悪さと禍々(まがまが)しさだけはありありと伝わってくるが。

カイムは長いことその場に佇んで、謎の血文字を見つめていた。

イウヴァルトたちと合流したのは、それから間もなくのことだった。自分の予想が悉く的中していくのをカイムはいささか複雑な思いで眺めていた。

「地獄だ……地獄だよ。まさか、こんなことが……」

イウヴァルトが言葉を失ってその場に膝をつくのも、傍らのフリアエがぼんやりと佇んでいるのも、予期したことだった。

「いったい、どうすれば……」

放心したようにつぶやくイウヴァルトを見ると、つくづく幸福な男だと思わずにいられない。こんな物騒な世の中で、子供のような正直さと弱さを失わずにいられたことは、これも一種の奇跡なのかもしれないと思う。

「神官長ヴェルドレから、声が届いた」

空からドラゴンの声が降ってくる。ようやく〝声〟での会話に慣れてきたばかりだからか、エルフの里からの声同様、カイムには神官長の声が聞こえなかった。

イウヴァルトが我に返ったように空を仰ぐ。

「声って……神官長も契約者なのか？」

「すでに相手のドラゴンは石化しておるがな」

カイムの脳裏に五年前の悪夢が蘇った。あのときは、神官長一行の到着を待たずに町を離れた。たった一人の肉親を自分から奪っていこうとする人間の顔など見たくなかったのだ。まさか、その神官長が契約者であったとは。
「神官長は非常事態を危惧し、女神の保護を申し出てきた」
しかし、今となっては神官長が契約者なのは幸いだった。フリアエを安心して任せられる。契約相手のドラゴンが石化してしまっているのは残念だったが、それでも連合軍の中隊程度の力はあるに違いない。それに、連合軍の最高位にある神官長ならば、女神の潜伏先としてふさわしい場所も押さえているはずだ。
「俺ごときでは、やはりおまえを守れないな」
すまない、とイウヴァルトが自嘲的につぶやく。
「いいえ。あなたの歌に私は癒されます」
「歌など何になる！　俺は……力が欲しい」
そんなに力が欲しいか？　たとえば、その美しい歌声と引き替えであったとしても。
底意地の悪い目でイウヴァルトを見ている自分に嫌悪感を覚える。あまりにも隔たった世界を生きている、かつての友に対する妬みなのかもしれない。
「神官長一行は砂漠にいる。早急に向かうが良い」
「わかった……」

俺は行かない。ここからは別行動をとる。

――それで良いのか？

ああ。イウヴァルトに、そう伝えてくれ。フリアエは任せる、と。

ここから砂漠までなら、たいした日数はかからない。森の中が比較的安全なのは、これまでの移動で証明されている。自分が同行することもないだろう。それに「天使の教会」のことも気にかかる。

――また天使か。

この先の渓谷だそうだ。たいした距離じゃない。上空から探せば、すぐに見つかるだろう？

――結界が張られていなければの話だが。

そのときは歩いて探すさ。エルフたちを捕らえた敵だ。どうせ炎は通用しないだろう。いずれにしても地上で戦う羽目になる。

「カイム？　行かないのか？」

イウヴァルトが怪訝そうな顔で振り返る。

「我々は、もう少しこの周辺を調査する。フリアエはおまえに任せるそうだ。……しっかりやれ」

そこまで言うこともないのにと、カイムは内心で苦笑する。まあいい。ドラゴンなりに気を利かせたつもりなのだろう。的はずれではあるが。

「兄さん……」

フリアエがイウヴァルトの手をほどいて引き返してくる。

「お気をつけて」

まっすぐに向けられた視線が痛い。五年前の別れ、旅立ちの日、あの忌まわしい十八歳の誕生日。過去の記憶が一度に押し寄せてきそうで、思わず目を逸らす。

そんな目で俺を見ないでくれ……。

カイムは大急ぎで踵を返す。あとはイウヴァルトに任せておけばいい。これ以上、過去につながる者と向き合っているのは苦痛だった。

瀕死のエルフは「宮殿」という言葉を使ったが、渓谷の奥深くに隠されていたのは廃墟だった。昔は神殿か宮殿だったに違いないが、今は巨大な石の柱が残っているばかりである。

「人間どもの趣味は理解し難い。これを宮殿と呼んで憚らないとは」

単にあのエルフが勘違いしていただけだろう。それを人間全般の趣味嗜好のように誤解されても困る。

しかし、そう言い返してやることはできなかった。背後にあの火の玉の気配を感じたのである。ぎりぎりのところでかわし、向き直る。エルフの里で見たのと同じ白装束がいた。魔法以外に能がないことはすでにわかっていた。

突進して斬りつける。それで終わりだった。あのときと同じように白い衣が翻り、同じ音をたてて倒れた。恨めしげに目を見開いたまま。目？　赤い目？　カイムは骸を覗き込む。

「赤い目がどうかしたか？」

エルフの里で倒したときには気づかなかったが、帝国兵と同じ目だ。天使の教会と帝国にはつながりがある。これではっきりした。ただ、どういうつながりなのかは見当もつかなかった。

廃墟を歩き回ってみたが、捕らえられたエルフの姿はもちろん、敵の姿も見当たらなかった。

「一足違いだったか……」

渓谷の入り口には申し訳程度に帝国兵が残っていたが、ここには何もない。あの魔術師を倒してしまった今となっては。人の気配も、人ならぬ邪悪なものの気配も。残されているのは、おそらくエルフのものであろう血が流れた跡だけである。

「血の跡がまだ新しい」

つまり、エルフたちはここにいたが、少し前に別の場所に移されたということになる。いったい「天使の教会」とやらは、いや帝国軍は、なぜそんな手間のかかることをしたのか。

連中の目的は何だと思う？

「我が知るはずなかろう。人間の考えはあまりに卑小すぎて想像もつかぬわ」

こいつに訊いたのが間違いだった……。

いずれにしても、エルフを捕獲していた集団が帝国とつながっているのは喜ばしいことではなかった。炎や魔法を跳ね返す鎧が戦場に多数出現することを意味するからである。

「無駄足であったな」

せめて帝国兵がもうすこし残っていれば、全くの無駄に終わらずにすんだものを。カイムは頭を振って歩き出す。が、すぐに足を止めた。

人影が近づいてくる。敵ではない。味方の兵士でもない。怪我をしているのか、よろめきながら、それでも懸命に走ろうとしているのが遠目にもわかった。男だ。武装しているようには見えないから、この辺りの住人なのだろう。

「助けて……助けてください！」

お互いの顔がわかる程度のところまで来ると、男はそう言って倒れた。疲労のあまり足がもつれたのか、安堵感から力が抜けたのか。

「我々の村が……」

男は必死の形相で体を起こし、這うようにしてカイムに近づいてくる。

「……襲われて」

帝国軍に、と聞いてカイムは男に駆け寄った。この近くに帝国軍がいるのだ。

「助け…て……」

男が足にすがりついてくる。

「ここから……東へ三日……妖精の……谷……」
それだけわかれば十分だ。しかし、男はしつこくカイムの足にしがみついている。返事がないのを断られたのだと勝手に勘違いしたらしい。
「どうか……」
カイムは男を蹴り飛ばした。邪魔だ。頼まれるまでもない。帝国の連中なら大歓迎だった。
——おぬし、助けに行くのか？　それとも、殺しに行くのか？
決まってるだろう。わかりきったことを訊くな。
口許に笑みが浮かぶのを感じた。背後で男が何か言ったような気がしたが、カイムの耳にはもはや届かなかった。

3

美しい姿形を持つ者は心根まで美しく、醜い容貌の内には醜い魂しか宿らぬとしたら、この世はどれだけ整然としてわかりやすいことかと思わずにはいられない。美と醜、善と悪、闇と光。相反するものすべてが決して交わることなく、明確な境界線で隔てられていたならば。
しかし現実の世界はあまりにも猥雑(わいざつ)で、矛盾に満ちている。相反するふたつが分かち難く結びつくことも、美しい仮面の下に邪悪な素顔が潜んでいることも、決してめずらしくはない。

以前、村の学校で教鞭(きょうべん)を執っていたころ、そんな子供たちを何人も見てきた。

だからといって、彼らを叱責(しっせき)したり、嫌悪したりする気持ちは全くなかった。むしろ、成長した彼らが、己の二面性に心を痛めることがないようにと願った。

子供たちの邪悪さ、醜さを許し受け容れることは容易(たやす)かったのに、自分自身のこととなるとこれほどまでに嫌悪感を伴うのはなぜだろう。仮に他人が同じ性癖を持っていたとしても、それだけで相手を蔑(さげす)むことはしない。しかし、自分自身の性癖を許すことはできないのだ。

子供たちに学問を教えるという点だけに限れば、自分は決して悪い教師ではなかったと思う。ただ、人間としては最低最悪、失格だった。教え子たちを心から愛していたのも事実だが、特定の子供に邪(よこしま)な愛情を抱いていたのもまた事実である。

それでもまだ、許されざる欲望を己の内に秘めている間は良かった。誰も気づいていない、黙っていればわからない、そう自分に言い聞かせていられる間は。

「先生。ぼくのこと、好きでしょう?」

とりわけ美しい顔立ちの子供が瞳(ひとみ)に邪悪な光を湛(たた)えて微笑んだとき、なぜ狼狽の色を顔に表してしまったのか。

「嫌いなの?　だったら悲しいな」

あの瞳の色を生涯忘れないだろう。何かを決定的に狂わせるような、深く冷たい碧(みどり)。

「うそつき」

拗ねたように横を向くと、栗色の髪が揺れた。砂がこぼれ落ちるような秘やかな音をたてて。見るからに柔らかそうな頬、花びら色の唇。ただただ見惚れた。相手の術中にはまったとわかっていても抗えなかった。

「ねえ、レオナールって呼んでいい？」

その刹那、己の内で何かが引きちぎられ、解き放たれた。道を踏み外したと自覚しながらも止められなかった。

教師を辞め、村を出たのはそれから間もなくのことである。誰に知られたわけでもない。ただ、二度と顔を上げて表を歩けないと思った。家族とも顔を合わせていられなかった。誰もいない森の奥で、隠者として生きる道を選んだ。一人でひっそりと生き、ひっそりと死んでいくことを望んだ。

予定外だったのは、家族が帝国軍に追われる羽目に陥ったことだった。幼い弟たちに逃亡生活は過酷すぎた。結局、三人の弟たちを匿うことになり、一人きりの生活は呆気なく終わりを告げた。

その後、両親や共に逃亡した親戚たちの消息は全く聞いていない。帝国軍に捕らえられたか、異境に斃れたか……。その意味では、弟たちを引き取ったのは正解だったに違いないと思う。

しかし、弟たちの存在は同時に苦痛をもたらした。とりわけ末の弟ルーキフーゲを見るたびに、道を踏み外すきっかけとなった教え子を思い出さずにいられなかった。年も近く、背格好

もほぼ同じ、顔立ちこそ似ていなかったものの、ルーキフーゲもまた栗色の髪と碧の瞳の持ち主だったのだ。
似ても似つかない顔の中に、あの邪悪な瞳を見出そうとする自分に気づいては、自己嫌悪に陥った。しかし、自己嫌悪に陥りながらも、思い出さずにいられないのである。絹糸のように細い髪の手触り、柔らかな肌の色、幼子特有の甘酸っぱい匂い。
弟たちがいなければ、すべて忘却の海に沈めてしまうはずだった。いや、自分にそこまでの意志の強さはなかっただろう。忘れよう忘れなければと思いながらも、それらの記憶の断片を引きずり出しては、弄んでいたに違いないのだ。
むしろ弟たちの目がなければ、歯止めがかからなかった。おそらく夜となく昼となく、己の薄汚い欲望に振り回されていただろう。弟たちの目があるからこそ、こうして夜中にこっそりと家を抜け出すだけにとどめていられる。自らの手で欲望を処理し、何喰わぬ顔で戻る。それだけで。
まだ荒い息をつきながら、レオナールは立ち上がった。行為の後にあるのはいつも、苦い悔恨と嫌悪感ばかりである。それがわかっていながら、なぜ……。
自嘲的な笑いが浮かぶ。が、すぐにそれが凍りつく。鬱蒼と茂った木々の向こうが不自然に明るい。月明かりではない、禍々しい明るさ。
全力で走った。何度も木の根につまずき、転んだ。それでも構わずに走った。家までの距離

がひどく遠い。永遠にたどり着かないのではないか、途中で自分は息絶えるのではないかと思えるほどに遠い。

息を切らし、よろめきながら走った。何かの間違いであってくれ、そう願いながら。しかし、予感は最悪の形で的中した。

家が燃えていた。外には弟たちが倒れていた。生死を確認するまでもなかった。遺体には無数の矢が突き刺さり、或いは縦横に切り裂かれていた。

「ラウム……リベサル……ルーキフーゲ………」

何度も弟たちの名を呼んだ。許しを請う声が震えているのがわかった。弟たちがここへやってきたのは、帝国軍の手を逃れて生き延びるためだったはずだ。それをみすみす……。もしも自分が家にいたならば。確かに、三人とも助けるのは無理だったかもしれない。しかし、一人くらいは森の奥へと逃がしてやれたのではないか。

「私のせいだ……」

人目を避けて隠れ住んでも、神の怒りから逃れることはできなかった。神は最も残酷な方法で罰を下したのだ。

いつの間にか地面に俯していた。ぼやけた視界の向こうで家が焼け落ちていく。弟たちは情けない兄を恨んだことだろう。なぜ守ってくれない、なぜ助けに来てくれないと恨みの言葉をつぶやきながら死んでいったに違いない。

リベサルの体に突き刺さっていた剣を引き抜く。とても生きてはいられない。震える手で剣を喉元に向ける。この汚れた魂が償いになるとは思えないが、死をもって詫(わ)びる以外に何ができようか。

喉元に痛みが走った。剣が手から落ちる。拾い上げ、今度は胸に向ける。痛み。落ちる剣。

……なんという情けなさ。この期に及んで死への恐怖を捨てきれないとは。死にたくない。弟たちも同じ気持ちだったはずなのに。

これ以上、生き続けて何になる。生きるべきではないのだ。わかっている。頭ではわかっているが、恐ろしい。誰か私を殺してくれ……。

不意に光が横切った。はっとして顔を上げる。緑色の小さな光が飛び回り、踊っている。やがて光はレオナールの目の前で止まった。

「アンタ、誰?」

フェアリーだ。そういえば、この近くにフェアリーたちの住処(すみか)があると聞いたことがある。

「何やってんの?」

「私は……」

笑いながらフェアリーが顔を覗き込んでくる。愛らしい顔に透き通った羽。人ならぬ生き物が相手ならば、己の罪を告白できそうな気がした。死にきれないなら、せめて懺悔(ざんげ)だけでもと思った。

「私は汚らわしい人間なのです。弟たちが殺され、家が焼かれているのも知らず、私は……」
嗚咽で言葉が途切れた。だめだ。これ以上、言えない。が、言う必要はなかった。フェアリーがその先を続けたのである。
「ふーん。おまえってば、弟たちを見捨てたのかあ。なるほどねー。弟たちがバッサリやられてる間、一人でいいコトしてたワケ。可愛い弟たちより右手が大事。右手がオトモダチ。そっかー。そゆことしてたワケ。そりゃ、やめらんねーよなー。ああ、かわいそうな弟たち！　同情しちゃうね」
けたたましい笑い声をたてて、フェアリーが飛び回る。どうやら彼らには人の心を読む能力があるらしい。
「うっわー。見ろよ。ひでえ死に方。こりゃまた派手にやられたなー。可愛いお目々が泣いてるよ。助けてー、助けてーってさ」
「やめてください！」
「最後に何見て死んだんだろうなー。見てみろよ、こいつも。ほら」
「見たくない……私には見られない」
「キモチ悪いってか。おまえが見捨てたんだろ？　おまえのせいなんだろ？　救われないねえ、あわれな弟たちよ」
たまらず耳を塞ぐ。それでもフェアリーの甲高い声はしつこく響いてくる。

「人間なんてダメだね、ほんっとダメダメダメ。臭いし、汚いし。死んでいいよ。うん。死ねば？　そうそう、死んじゃえ。死ね死ね死ね死ね！」

可愛らしい外見とはおよそかけ離れた残酷さ、邪悪さ。また……また私は同じものを引き寄せてしまったのか。

「怖いんだろ？　死にたくねえんだろ？　情けねー。最低じゃん。弟たちを殺したくせによー」

目を逸らしても、顔を背けても、フェアリーはしつこく鼻先を飛び回る。

「ほんじゃあさ、ちーっとばかり契約してみっか？」

「契約？」

「わっかんねーかなあ？　契約だよ、ケ・イ・ヤ・ク！」

何を言われたのか、すぐには理解できなかった。

「だからぁ、オレとおまえ、一心同体になっちゃうワケ。一生離れられないワケ。うえー。最っ低。キモチわるー。ウソウソ。そんなコト思ってませーん。契約してくださーい」

思い出した。人ならぬ生き物たちが、人の心の闇を欲する。心の闇、人間の負の部分は、人ならぬ生き物たちにとって自らを高める糧となるという。この邪悪なフェアリーが契約を望んでいるということは、やはり自分は醜く汚らしい魂の持ち主なのだろう。清廉な魂を持つ者ならば、決して契約など持ちかけられたりしないだろうから。

「ねっ、契約しましょーよ、おにいさーん」

弟たちに死んで詫びようと思ったが果たせなかった。かといって、このまま自分一人がのうのうと生きていくわけにはいかない。だとしたら。フェアリーに責められ、罵られて生きていくのは罰にならないだろうか。この邪悪な生き物ならば、間違いなく自分を罰してくれる……。
「契約してして。ねえ？　いいだろ？　契約するって言えよぉ」
口汚い罵倒とは裏腹に、フェアリーの笑顔はどこまでも可愛らしい。再び己を捕らえようとしてくる者に手を差し伸べ、レオナールは静かにうなずいた。

4

渓谷周辺と違って、妖精の谷には十分すぎるほど十分な数の帝国兵がいた。そして、ほとんどの兵士が血染めの鎧を身に纏っている。予想どおり、ドラゴンの炎は使えないということだ。望むところだった。このところ、相手にしていたのが空中兵器部隊ばかりでいささか食傷気味になっていた。いやでも過去を思い出させる者たちと行動を共にしていたせいで、ひどく苛立ってもいた。心の内奥を灼かれていくようなこの痛みを鎮めてくれるのは、帝国の連中だけだ。彼らの叫び、彼らの悲鳴、そして彼らの血。
骸の山を幾つか築いたときだった。子供の背丈くらいの何かが飛びかかってきた。すばやい。ぎりぎりで剣先をかわす。振り向きざまに斬り払う。

と、背後から同じようなものが襲いかかってくる。今度は二体同時だ。一体は仕留めたものの、もう一体は外した。左腕に痛みが走る。構わず斬り返す。小さな体が吹っ飛んだ。

ゴブリン。帝国の亜人部隊か……。

契約者となって初めて手こずった敵だった。人間とは比べものにならない跳躍力とすばやさ。低い位置から繰り出される攻撃は、威力はさほどでもないが回避しにくい。集団で襲いかかってきたとしたら、かなりの脅威となるに違いない。

帝国はいったいどんな方法で彼らを支配下に収めたのだろう。亜人部隊にはゴブリンだけではなく、オークやトロルの類もいると聞く。こういった連中は、人間を襲うことはあっても、人間に従うことはないと考えられてきたのだ。

帝国を束ねているのは人間ではないのかもしれない。あまり愉快な想像ではなかったが、赤い目の兵士たちといい、そう考えたほうが自然だ。

――ヴェルドレからの声が途切れたぞ。

あの神官長か？　フリアエとイウヴァルトもいっしょなのか？

――女神とは少し前に、合流している。

帝国か！

――わからぬ。だが、おそらくは。

契約者ならば大丈夫だろうと、フリアエを託したというのに。

急いで砂漠へ向かわなければと思ったときだった。再びゴブリンの集団が襲いかかってきた。気づいたときには取り囲まれていた。

攻撃が避けきれない。一匹倒す間に一匹が斬りかかってくる。下のほうばかりに気を取られていると、高い位置から攻撃がくる。彼らは大人の背丈くらいなら、楽々と跳躍してみせるのだ。反撃も早い。確実に息の根を止めないと、血塗れになりながら向かってくる。

すべて片づけたときには、立っているのがやっとだった。浅いとはいえ、あちこちに傷を負っている。荒い息をつきながら、周囲を見回す。

――声が聞こえる。

ドラゴンの呼びかけにもすぐには応えられなかった。

――契約者だな。

どこにいる?

呼吸を整えながら耳を澄ませる。はっきりとした声ではなかったが、遠い海鳴りにも似た何かを感じた。

――近い。この方角は……谷の奥であろう。

わかった。すぐに向かう。

カイムはドラゴンの告げた方角へ向かって走り出した。戦力は多いほどいい。この先も亜人部隊を相手にするなら、自分一人では手に余る。

行く手を遮るように帝国兵が現れた。一瞬、また亜人部隊かと身構えたが、ごく普通の鎧を纏った帝国兵である。ならば、物の数ではない。ついさっきまで、すばやいゴブリンを相手にしていたせいか、帝国兵の動きがやたらと遅く感じる。

――ここも……地獄の炎が。

ドラゴンのものとは違う〝声〟が聞こえた。帝国兵を薙ぎ倒しながら、カイムは声の方角を探った。

――私の声が聞こえているのですか。

初めて聞く、自分以外の契約者の声だった。行く手を阻む帝国兵を骸に変え、先を急ぐ。

――待て！　その者たちには、もはや戦う意思はない。

何を言ってるんだ、こいつは？

――これ以上、無益な殺し合いは……。

その声を無視して剣を振り回す。寝言につき合う義理はない。やがてあきらめたのか、戦いを止めようとする声は聞こえなくなった。

無惨に焼け落ちた村の中、ひざまずく男がいた。カイムが近づくと、男は緩慢な動作で立ち上がった。足許には帝国兵の骸が横たわっている。この男はいったい何をしていたのだろう。

「連合軍の兵士さんですね。剣さばきの音でわかります」

男は振り返り、一礼した。契約相手らしいフェアリーは、カイムの鼻先まで飛んでくると、ぷいと向きを変えて飛び去ってしまった。
「初めまして。私、レオナールと申します」
閉じた瞼の下に紋章があるのがわかった。見えたわけではない。ただ、そこにあると感じたのだ。だとすれば、この男は目が……。
「ええ。見えません。君と同じく、契約の代償です」
契約者同士が感じとることができるのは、声だけではないらしい。
——闇より明るい希望はなし。人間の愚かさを見ずにすむとは幸運なことよ。
ドラゴンの声が割り込んでくる。
「たとえこの目に映ることはなくとも……感じますから。愚かさも、憎しみも……怒りも」
つぶやくようなその言葉は、なぜか悲しげだった。それにしても、視力を失っていて戦えるものだろうか。ふとそんな疑問が脳裏をよぎった。
「戦うことに支障はありません。できることなら殺生は避けたいと思いますが」
殺生は避けたい？　何を寝ぼけたことを。
「ああ、いえ。帝国軍の野望を阻止するためであれば、戦うのに吝かではありません」
ならば、共に。一刻も早く砂漠に向かわないと、フリアエの……女神の身が危ない。
「わかりました」

うなずいたレオナールだったが、いくらも歩かないうちに足を止めた。足許にはやはり帝国兵の骸があった。レオナールがひざまずく。見開いたままの瞼を閉じてやり、投げ出された両手を胸の前で組み合わせている。

何をしている？

「弔ってやっているのです」

帝国兵をか？

「死者はもはや土塊と同じ。悼むべき存在です」

この男は……！

腹の底から怒りがわき上がった。指が白くなるほど両の拳を握りしめる。

「君に従いましょう、カイム」

あきらめたように立ち上がる背中を蹴り飛ばしたい衝動をカイムはどうにか抑えた。

「私とて、女神のことは心配ですから」

その言葉のひとつひとつがひどく癇に障る。契約者でなければ、間違っても同行したくない相手だった。

「……誰にでも、赦される権利はあると信じたいのです」

この男と理解し合える日は永遠に来ないだろう。点々と横たわる骸を足蹴にしながら、カイムはドラゴンを呼んだ。

「森が……！」
カイムは足を止めた。レオナールが見えないはずの両目に手をかざしている。
「視えます……。森が燃えている」
「あの性悪どもの巣か。全く、やつらは何をしておったのだ」
性悪ども？　やつら？　誰のことだ。
「フェアリーです。封印の森はフェアリーたちが守護している」
なるほど、それでレオナールには森が燃えているのがわかったのか。この男の契約相手は、フェアリーなのだ。
「自ら神殿と名付けた場所を奪い合い、汚し、破壊する。人間とは度し難いものよ」
呆れ果てたようにつぶやくドラゴンの背に飛び乗り、レオナールのほうを振り返る。ここへ置いていくべきか。それとも……。
同行させるか否かを逡巡する必要はなかった。レオナールの周囲を飛び回っていたフェアリーの光が一際明るく輝く。やがてそれは緑色の光の渦となった。レオナールの体が浮き上がる。フェアリーには毒舌以外に能がないと聞いたことがあるが、実際にはそうでもないらしい。あんなに小さな生き物に人間一人を飛行させる力があるのは、正直なところ意外だった。
「とにかく森へ。もう遅いかもしれないが」
砂漠と森と海にある三つの封印。そのどれもが女神と、フリアエとつながっている。放置す

るわけにはいかなかった。

森の中は真昼のように明るかった。業火が森全体を包んでいたのだ。炎の爆ぜる音、木々の倒れる音、そして悲鳴。森そのものが暴れ、叫んでいるかのようだった。

「オレの森が燃えてるよー。ひっでー。人間のやつら、勝手に入り込みやがって。ほんっと人間って迷惑な生きモンだよなー。臭いし、汚いし、バカだし」

興奮状態なのか、フェアリーが早口で喚きたてている。

「臭う臭う。人間の皮膚がぺろんと剥がれてる臭いがさ。くっせぇ。たまんないね。おいおい、おまえ。木の陰見てみな。お仲間がいるぜ。変態仲間がよー」

レオナールが顔を背けている。フェアリーはいったい何のことを言っているのだろう。

「この臭いは何かなー。おまえの大好きな少年兵が黒こげになってるみたいだぜー。ああ、お気の毒お気の毒。変態野郎に欲情されんのと、どっちがマシかなー」

「やめてくれ！」

「どっちもイヤだってさ。そりゃそーだ」

「いっそ……ここで死なせてくれ」

レオナールが地面に両の手をつく。意味するところはわからないが、彼にとって触れられたくない話らしい。フェアリーが羽虫のようにレオナールの周囲を飛び回る。

「死なせろぉ？　何言ってんの。もしもーし。あなた、死ねなかったんですよねー。ためらい傷ばりばり！　どうしても死ねなくって、オレと契約したんでしたよねー」

そのときだった。激しく飛び回っていたフェアリーがぴたりと動きを止めた。そして、流星の如き勢いで飛び去っていった。入れ替わりに一際大きな光の玉が滑るようにカイムたちの目の前にやってきた。光の中心にいるのはやはりフェアリーのようだが、さっきのフェアリーとは似ても似つかない。白い髭に白い髪。共通しているのは、狡賢そうな表情だけである。

「おぬしは」

「いえいえ、とくに名乗るほどの者では。ただ私はですね、臭くて野蛮なあんたがたに、これ以上この森に居て欲しくないだけでして。こりゃ失敬。臭くて野蛮は余計でしたかな。しかし、一応、長としては、言うべきことは言わないとですね」

「フェアリーの長か」

ドラゴンが吐き捨てた。レオナールの契約相手だけでもうんざりしているのに、この上また、と言わんばかりである。

「燃えた木は元に戻らないんですよねえ。あんたがたは考えたこともないでしょうが、木は森を作る骨組みでしてねえ。人間一人死んだところで、ろくな肥料になりゃしませんがねえ」

「脅すなら他をあたれ。つき合いきれぬわ」

フェアリーの長はますます狡猾そうな笑みを浮かべた。

「脅すなんてそんな。とんだ邪推ってもんですなあ。ドラゴン様ほど位が高いと、さぞかし複雑なことをお考えのようで。人間なんぞとじゃれ合うのも、深遠なお考えあってのことかと。下等なものにやられるのも、興のひとつかと」

「失せよ！」

ドラゴンが吼えても、フェアリーの長は笑いながら飛び回っている。

「こりゃまた失敬。誰しも図星は痛いものですからなあ。それはそうと砂漠は暑いですねえ。死体の腐りも早いことでしょうなあ」

「砂漠？　砂漠がどうかしたのですか」

レオナールが叫んだ。

「こりゃ口が滑った。いやはや。言えませんよ。神官長一行が間抜け面並べてあっさり襲われた、なんてねえ」

ヴェルドレからの声が途切れていたことを失念するところだった。封印を守るために、先に森へ回ったのだが完全に裏目に出た。

「あんたらのお仲間の無事も定かじゃない、いい気味だ、なんてねえ」

「砂漠へ！」

急いで踵を返す。背後からしつこくフェアリーの長の言葉がついてくる。

「みんな死ねばいいのに、なんてとてもとても。言えませんって」

ドラゴンが翼を広げた後も、フェアリーの長の笑い声は消えなかった。

5

指先がひどく痺れていた。アリオーシュは両の手首から力を抜いた。わずかに拘束具が緩み、手首から先へ、どっと血が流れ込んでいくのがわかる。痺れた指先が今度はくすぐったくてたまらない。それがおかしくてアリオーシュは声をたてて笑った。

今度は両足に力を込める。革の拘束具が足首に強く食い込んだ。一、二、三、四……。ゆっくりと数える。足の先から感覚がなくなるまで。

退屈でたまらなかった。見えるものといえば、灰色の壁と赤茶けた鉄格子。目を愉しませてくれるものなど何もない。手も足もきつく縛められ、できることといえば壁から壁へと転がる程度。おまけに空腹だった。ここへ入れられてから口にしたものといえば、兵士の腕の肉だけ。ほんの一口だけだったのに、あの兵士はみっともなく泣き喚いていた。

大人なんて嫌い、とアリオーシュはつぶやいた。固くて、骨ばかり太くて、ちっともおいしくないんだもの。どこかに子供はいないかしら……。

赤い目の兵士たちに捕らえられる直前に食べた子供は美味だった。白くてふっくらとした二の腕も、少し歯ごたえのある小さな指も。その前に食べた子供も良かった。かなり痩せていて

肉なんていくらもついていなかったから、こそげ落とすようにして食べなければならなかったけれども。

「お腹すいたわ……」

喉の渇きと空腹は、次第に耐え難いものになっていた。見回りの兵士が来たら、指の一本でも食いちぎってやりたいけれども、次は向こうも警戒しているだろう。大きくため息をつく。が、次の瞬間には自分のついたため息が滑稽に思えて噴き出してしまう。いったん笑い出すと止まらない。脇腹が痛くなるまでアリオーシュは笑い続けた。

捕らえられるまでに何人の子供を手に掛けたのか、もはやアリオーシュは理解していなかった。当然、自分が子供ばかりを狙う殺人鬼として、人々に恐れられていたことも。一人殺すごとに、彼女の中で何かが確実に壊れていった。

最初のうちは、子供を守らなければという保護本能と、食欲や嗜好は明確に切り離されていた。彼女が幼い子供を見た瞬間に感じていたのは、敵の手から守らなければという使命感だけだった。その使命感ゆえに、彼女は子供を殺し、その肉を食べた。子供を自分の胎内に戻せば守ってやれる、そう信じた。

しかし、守るために食するという行為を繰り返すうちに、保護本能と食欲の境界線はどんどん曖昧になっていった。やがて彼女の中ではっきりと子供は食欲の対象になり、守るという言葉本来の意味は忘れ去られた。

ただ、本来の意味は忘れても、守るという言葉は忘れなかった。こうして彼女は、「私が守る」「守ってあげる」と言いながら子供を殺し食するという、常人には理解し難い殺戮様式を獲得したのである。

甲高い笑い声をあげて子供を探す彼女の姿は、辺り一帯の人々を恐怖に陥れた。子を持つ母親たちにとって、彼女の存在は帝国軍よりも忌まわしいものとなった。

が、皮肉なことにその殺人鬼を捕らえたのは帝国軍だった。もっとも、捕縛の理由は子供を殺し続けたからではなく、アリオーシュがエルフだったからである。帝国軍はエルフの里を襲った後も、エルフ狩りを続けていた。里の外に住まうエルフも、ごく少数ながら存在する。アリオーシュはそういったエルフと見なされ、捕らえられたのだった。

牢獄の中は薄暗く、静かだった。時折、見回りの兵士らしい足音が聞こえるが、それもすぐに消え去ってしまう。いつまでここにいればいいのだろう。つまらない。退屈。お腹がすいた。アリオーシュは苛立った。拘束具をつけられた足で壁を思い切り蹴ったときだった。

体が浮き上がった。轟音とともに壁に叩きつけられる。体の下で両腕が不自然な方向に曲がった。体中の血が一瞬にして蒸発してしまったかのような、妙にざらついた感触と強ばりがある。遅れてやってくる鈍痛。ざらついた感触が針で突き刺すような痛みに変わっていく。

痛みを紛らわそうと、アリオーシュは周囲に視線を走らせる。いつの間にか、目の前の壁が崩れ落ちていた。その向こうが明るい。炎だ。牢獄が燃えている。助けを呼ぼうとしたが、出

てきたのは呻き声だけだった。奇妙な強ばりは手足だけではなかった。唇も、舌も、瞼も、どこもかしこも思うに任せない。

ごぼり、と音をたてて何かが口からあふれ出た。よく知っている味の、何か。血を吐いたのだとすぐにわかった。自分が死に瀕していることをアリオーシュは瞬時に理解した。

だめよ……。まだ死ねない。子供を捜さなきゃ。早く捜してやらないと。きっと泣いてるわ。早く行かなきゃ。だめ。死ぬわけにはいかないのよ。助けて。誰か……。

娘の名を呼んだ。しかし、声にならない。苦しい。息ができない。崩れた壁が、燃えさかる炎が、ゆっくりと歪み、渦を巻く。

きれい。なんて、きれいなの。

アリオーシュは微笑んだ。娘のことも、自分が死にかけていることも、もう彼女の脳裏から消えている。

白い炎。赤い炎。青い炎。きれい、きれい、きれい……。

「そこの女」

「死ぬにはまだ早いぞ」

男の声と女の声がどこからか響いてくる。目の前で、青い光と赤い光が踊っている。よく見ようと、アリオーシュは頭を起こす。もっとも、それは気持ちばかりで、実際には視線をわずかに上げただけだった。

「そうだ」
「我々と来い」
どこへ？　そこに子供はいる？
声にならない問いかけだったが、青い光と赤い光は理解してくれたらしい。肯定するかのように光がアリオーシュを包む。ふたつの光は揺らめきながら、ひとつの言葉をささやいた。
その言葉の意味が完全に理解できたわけではない。が、アリオーシュはうなずいた。赤い光と青い光は宝石のように美しく、また彼らの声は二重唱にも似て耳に心地よかった。目と耳を愉しませてくれる、ふたつの光。それだけで彼女には十分だった。

6

途中、空中兵器部隊の相手をさせられたせいで、砂漠に着いたときには日が暮れようとしていた。
「あの廃墟は……」
石造りの建物が砂塵（さじん）の中から忽然（こつぜん）と姿を現した。今にも倒壊しそうな様子が遠目にもわかる。よく見れば、ひとつの建造物ではなかった。同じ形の棟が整然と並んでいたのである。
「何やら怪しげな気配がある」

帝国軍の拠点か？

「には違いないが、部分的に結界が張られておる。さほど強力なものではないようだがな。しかし、雑兵どもの隠れ家に結界など不要なもの。ならば、それ以外の何かが隠されていることになろう」

まさかフリアエが？

帝国軍が結界を張ってまで隠す必要があるものといえば、女神と神官長くらいしか思いつかない。

「いや、待て。女神の気配が……」

いったんは下降しかけたドラゴンが急反転、上昇した。どうやら別の場所にフリアエの気配を感じたらしい。ドラゴンはまっすぐに砂漠の外れへ向かって飛んだ。

やがて大きな岩が点在する中、連合軍の兵士の姿が見えてくる。といっても、どこかの小隊の生き残りなのか、人数は少ない。契約者となった傭兵の噂はすでに耳にしていたのだろう、ドラゴンが舞い降りても恐慌を来した様子はなかった。

「女神は何処に？」

ドラゴンの問いかけに、兵士の一人が応えようとしたときだった。

「兄さん！」

岩陰に掘られた穴から這い出してきたのは、紛れもなくフリアエだった。身を隠すためとは

いいえ、全身砂塵にまみれ、手足は傷だらけである。カイムが助け起こすよりも、フリアエが駆け出すほうが早かった。

「よく……よくご無事で」

腕の中に倒れ込んできた妹を静かに抱きしめる。その肩が小刻みに震えている。よほど心細かったのだろう、フリアエは顔を上げることすら忘れているようだった。

「ヴェルドレとイウヴァルトは？　捕らえられたのか」

ドラゴンの声に、ようやくフリアエが顔を上げる。それは、不安に身を震わせていた小さな妹ではなく、無表情な女神の顔に戻っていた。

「はい……私をかばって」

さっきの建物か。結界を張ってまで帝国軍が隠匿していたのは……。

「おそらく。ヴェルドレとイウヴァルトはあの建物の中に囚われている。あれを潰すのが確実な方法であろう」

しかし、フリアエはどうする？　護衛の兵士はいるが、この人数では。

「兄さん。イウヴァルトを……。早く、あの人を助けてあげて。私なら大丈夫ですから」

言葉こそかつての許婚の身を案じるものではあったが、その口調はあまりにも平板にすぎた。それがかえって痛々しい。フリアエの目を見ないようにしながら、カイムはうなずいた。

「では、ゆくぞ」

ドラゴンが翼を広げた。

月の光が煌々と辺りを照らしていた。一面の砂が白い光を受けて雪原のように輝いている。
「イウヴァルトは報われぬ努力をしておるな」
嘲りとも蔑みともつかない低い笑いが響く。
「所詮、愛など愚かな独り遊びよ」
そうかもしれないな。いずれにしても、俺にとってはどうでもいいことだ。
「おぬし、妹の気持ちに気づいておろう? 女神の、血の通った思いに」
何が言いたい?
それには答えず、ドラゴンはゆるやかに旋回しながら下降を始めた。あの廃墟のような建物が見えてくる。その少し手前に友軍の偵察隊が陣取っていた。彼らの頭上を飛び越え、建物へと近づく。
「おぬしら三人、真実に背くことに慣れすぎたか」
うるさい! さっきから 訳のわからないことを……!
繰り言につき合う暇などない。ドラゴンの背から飛び降りると、カイムは敵の中へと突っ込んでいった。やや遅れてレオナールが続く。
この男、果たして戦場で役に立つのかどうか。殺生は避けたいなどと、愚かしいことを平気

で口にするような男が。

驚いたことに、レオナールはさほど後れをとることなくついてくる。背後を任せるにはまだ不安が残るが、とりあえず戦力にはなるらしい。

——聞こえるか？

結界の内側に入り込んだのだろう。聞き覚えのない〝声〟がした。建物の入り口めがけて走る。見張りの兵士を倒し、内部に侵入する。と、さっきよりも鮮明に声が聞こえた。

——私は神官長ヴェルドレ。帝国軍に捕らえられてしまった。〝声〟を受けた者よ、助けてはもらえまいか。

どこだ？

カイムが問い返すのと同時に、爆発音が聞こえた。かなり近い。隣接する棟のどれかが爆破されたのだろう。急がなければ。攻撃を仕掛けたのは友軍に違いないが、彼らはここに神官長が捕らえられていることを知らない。ぐずぐずしていると、ここも爆破されてしまう恐れがある。

「こっちです」

レオナールが叫ぶ。声を聞き分ける能力は彼のほうが上らしい。時折、物陰から飛び出してくる兵士に応戦しながら奥へと進む。

——そなた……ドラゴンと契約しておるのか。

さらに鮮明な声。施錠された扉を叩き壊す。幸いにも室内に敵兵の姿はなかった。すでに老境に入った男が一人。拘束はされていない。

「そなたがカイムか？」

ヴェルドレはカイムを見、さらにレオナールを見た。

「もうお一方(ひとかた)は？」

一礼してレオナールが尋ねる。

「イウヴァルトはどうも別の場所に捕らえられているらしい。この牢獄に彼の気配はない。無事だと良いのだが」

――ヴェルドレ。おぬし、何か知っていることがあろう。

ドラゴンの声で、いつの間にか結界が消えていたことに気づく。そういえば、さっきヴェルドレが、ドラゴンと契約云々と言っていたのはそのせいか……。

――答えよ。何が起きているのだ。

「帝国軍は諸国への介入だけでは飽きたらず、もっと根本的なところから創造し直そうとしているようです」

――世界か。

「封印がすべて解けたときに出現すると言われている再生の卵、彼らの狙いはそれでしょう」

それで、最終封印である女神の命を狙ったというのか。

――再生の卵、だと？　真実を、自分たちにとって都合の良い神話へとねじ曲げる。人間の悪い癖だな。
「は？」
ドラゴンが得意とする皮肉に慣れていないせいで、ヴェルドレは訳がわからないといった顔をしている。もっともカイムにもドラゴンの言葉の意味するところはよくわからなかった。
「そなたたち。連合軍の聖地破壊を止めてはくれぬか」
ヴェルドレが改めてカイムとレオナールのほうへと向き直った。
「封印を解いて世界が無事ですむはずがない」
五年前までは、封印などないほうが、最初から封印の女神などいないほうが良いと思っていた。しかし、フリアエが女神として招致されてしまった今は違う。
「まして、神殿の封印がひとつ破られるごとに、女神の心身に及ぼす負担は重くなっていくのだ」
わかっている。頼まれなくとも、俺が止めてやる。この剣で。
「おお……なんということを」
意に反して、ヴェルドレが驚愕(きょうがく)の表情を浮かべる。
「帝国軍とて人の子。慈悲をもって穏便に……」
結局、こいつも同じか。殺生は避けたいだの、穏便にだの。この連中には、帝国軍を本気で

止める気があるのか。
――この男に説教は無駄だ。
笑い含みの声が響いてくる。
――世界がどうなるかよりも、己の恨みをどう晴らすかで頭がいっぱいらしい。
悪いか。
「おお……。神よ。あわれな子らに祝福を」
ひざまずいて祈りを捧げるヴェルドレを、カイムは白けた思いで見下ろす。
――祈る者と殺す者にどれほどの違いがあろう。人間など一皮剥けば皆、おしなべて愚劣よ。
ごもっとも。一皮剥けば愚劣なのは人間に限った話じゃないだろうがな。
やれやれと肩をすくめてみせたときだった。悲鳴とも笑いともつかない奇妙な〝声〟を聞いた。レオナールもまた、はっとしたように辺りを見回す。
「あの声は……」
契約者には違いない。しかし。
「少しばかり癖の強い……気がかりな声だが」
ヴェルドレが眉根を寄せる。カイムも顔をしかめる。無駄だとわかっていても、耳を塞ぎたくなった。癖が強いというよりも、尋常な声ではない。
「それほど遠くではないようです。おそらく、さっき爆破された場所と方角的には同一かと」

レオナールの言葉にヴェルドレがうなずいたときだった。ドラゴンの声が割って入ってくる。

——おぬしら、この声の持ち主と関わるつもりか。おそらく正常な者ではあるまい。

「かといって、放置するわけにもいきますまい」

帝国軍に慈悲を持てと言うだけのことはある。カイムは半ば呆れつつヴェルドレにうなずいてみせる。重要なのはその契約者が戦力になるか否か、だけだ。戦力になるのならば、正常であろうが異常であろうが構いはしない。

——自分の力量を知っての発言か？　足手まといほど網にかかりやすいものよ。

返す言葉が見つからないのだろう、ヴェルドレは黙ったまま小さく頭を振った。とはいえ、ドラゴンもそれ以上の皮肉を投げつけてはこなかった。

「急いだほうがよろしかろう。声が不安定になってきておる」

探し回る必要はなかった。それほどその声は、特徴的かつ耳障りだった。声の甲高さだけではなく、意味をなさない言葉の羅列（られつ）も気味が悪い。

——赤い炎、青い水……きれい。きれい。きれい。

行きたくない、と本能が告げる方角へ敢えて向かうだけでよかった。近づけば近づくほど、声の持ち主の精神状態が正常でないのがよくわかる。

——死んだ。死んだ……。みな、死んだ。

声の方角へ進むうちに、半壊し、炎上している建物を見つけた。爆発に巻き込まれたのか、敵の気配はない。吹き飛んだ建物の上部、不揃いに崩れ落ちた壁や扉が、爆発のすさまじさを物語っている。ただ、ところどころ火の手が上がっているが、今は近寄れないほどではない。

やがて、契約者だけでなく普通の人間でも聞き取れる笑い声が聞こえてきた。甲高い、女の笑い声である。

崩れ落ちた壁の向こうに、背の高い女が立っていた。近寄ってみると、女は炎を見つめて笑っている。その足許に引きちぎられた拘束具が転がっているのが見える。

女が振り向く。エルフだ。その周囲を炎と水とが帯になって駆け巡っている。よくよく見れば、炎の精霊サラマンダーと水の精霊ウンディーネである。この女の契約相手らしい。

女がゆっくりと歩み寄ってきた。紋章が下腹部にあるのがわかる。

「子宮を……なくされたのか」

ヴェルドレの口調に同情の色がにじんだ。

「そなた、名はなんという？」

果たして、まともな受け答えができるのだろうか。この精神状態では期待できそうにないと思ったが、予想に反して女はすぐに口を開いた。

「アリオーシュ」

さっきの笑い声とは似ても似つかない、柔らかく低い声だった。

「ねえ、どこかに子供はいないかしら」
「心配せずとも、優先的に保護されておる」
「ここにはいないの？　残念」
女がつまらなそうに鼻を鳴らす。
「じゃあ、大人でもいいわ」
女がカイムに向かって飛びかかってくる。避ける暇がなかった。とっさに左腕で顔と喉元をかばう。その腕に女が噛みついてくる。
「人喰いエルフか！」
レオナールが悲鳴にも似た声をあげる。ものすごい力だった。振り払おうとしても離れない。レオナールが間に割って入ろうとしても、女は渾身(こんしん)の力でしがみついてくる。女とはいえ契約者、尋常な力ではない。
不意に女が手を放した。弾かれたように背中をのけぞらせ、白目を剥いて倒れた。女の背後でヴェルドレが杖を振り上げている。魔法だか呪文の類でも使ったのだろう。
いずれにしても助かった。噛みつかれた左腕がひどく痛んだ。武装していたから良かったようなものの、そうでなければ確実に食いちぎられていた。カイムは大きく息を吐く。
「とりあえず、彼女の狂気を抑え込んだ。当面はこれでなんとかなるであろう」
女が目を開けた。体を起こし、不思議そうな顔で辺りを見回している。

「しかし、いつまで抑えておけるかどうか」
ヴェルドレが女を見下ろした。表面上だけでも狂気が消えたおかげで、女はおとなしくなっていた。ただぼんやりと虚空(こくう)を見つめている。
「このまま放置していたのでは、周囲にとっても彼女にとっても良い結果にはなるまい。私が連れていこう」
――それが人間の優しさか。
またドラゴンの嘲笑が聞こえた。
――まあいい。女神の許へ戻るか？
「いえ。封印が気になります。先に砂漠の神殿へ……」
そう言いかけたヴェルドレをサラマンダーとウンディーネが遮った。
「砂漠の封印は」
「もう破られた」
「あなたたちは」
「何も感じないのか」
ヴェルドレが目を見開く。
「う、嘘だ……。封印が破られるなんて！」
ヴェルドレが膝をつく。

「神よ、これもあなたの意思なのでしょうか。我々に試練を与えるのが……あなたの」

誰も言葉を発しようとはしなかった。ついに砂漠の封印が破られた。その事実だけが重くのしかかっていたのである。

7

窓のない牢獄だった。今が昼なのか夜なのか、全くわからなかった。途方もなく長い時間が経ったような気もするし、拘束されていくらも経っていないような気もする。

神官長とともに捕縛されたところまでは覚えているが、その後の記憶はぷっつりと途切れている。気がつくと、目の前に灰色の壁があった。両腕を上げた状態で、柱のようなものから吊されているのがわかった。扉を背にしているのだろう、時折、人の気配を背後に感じたが、誰が出入りしているのかまではわからない。

両手首が痺れている。ぎりぎりで足が届かない高さに吊されているために、自分の体重がすべてかかっているのだ。体の節々が痛み、ひどく喉が渇いていた。疲れてもいた。いっそ眠ってしまいたかったが、この姿勢ではそれもままならない。

肩の関節が軋む。同じ姿勢に耐えきれなくなって身を捩ると、両手首がちぎれそうに痛んだ。呻き声をあげれば喉の渇きがますます強く感じられる。

そういえば、こういう拷問のやり方があったと、何かの書物で読んだ覚えがある。遠い昔、爆薬や空中兵器が発明される以前の話だ。大陸の北の果て、残忍な皇帝の統べる国があったという。民を虐げては喜び、近隣諸国を攻め滅ぼしては愉しんだと伝えられている。

誰からともなく、赤い目の兵士たちを率いる狂信的な集団を「帝国」と呼ぶようになったのは、史上最も残忍と言われた皇帝の統べる国が同じ呼び名で恐れられていたからである。

まさか、虜囚に対する扱いまで、古の帝国と同じではあるまいな。

イウヴァルトは苦笑した。……つもりだったが、それは苦痛の声にしかならなかった。次第に頭が朦朧としてくる。このまま意識を手放すことができたら、どんなに楽になれることか。

フリアエは無事だろうか、うまく身を隠すことができただろうかと、霞のかかったような頭で考える。帝国兵を迎え撃つことができないなら、せめて自分が囮になってフリアエから遠ざけようと思った。帝国兵を引きつけながら、必死で走り続けた。もっとも、いくらも続かなかったような気がするが。

「ごめんなさい、イウヴァルト」

フリアエの声が耳もとに蘇った。五年前のあの日の。

「このまま一人で行かせたら、二度とカイム兄さまに会えない。そんな気がするの」

許嫁であったはずなのに。フリアエは旅立つ兄についていくと言った。

「お父さまもお母さまも亡くなったわ。二度と会えない。もういやなの。兄さままでが……」

「カイムを止めることはできないのか？　また三人で……昔のように。こんなことになった今だからこそ」
「いいえ。止められない。私が泣いて止めれば、もしかしたら思いとどまってくれるかもしれない。でも、ここにいたら兄さまの心が死んでしまう。わかるの」
「しかし……」
「たった一人の家族なのよ。私にはできない。兄さまを止めることも、このまま見送ることも」
俺ではだめなのか？　俺よりもカイムを選ぶのか？
その言葉を口にすることはできなかった。そして、夜明け前、フリアエはカイムとともに王宮を去った。
それでもいつの日か、フリアエが戻ってくると信じたかった。自分がもっと大人になったら、フリアエを捜しに行こうとも思った。遠い未来に希望をつなぎ、時が過ぎるのをじっと待ち続けるつもりだった。なのに。
新しい封印の女神が神殿に入ったのは、それからいくらも経たないころだった。最初は同じ名前の別人だろうと思った。しかし、女神の出自を聞いて、耳を疑った。東の小国の王女。この周辺の国にフリアエという名の王女は他にいない。自分とフリアエとの絆が永遠に断たれた瞬間だった。
なぜ……。なぜだ、カイム。なぜ、フリアエを連れて逃げなかった？　おまえならできただ

ろう？　なのに、おまえは妹を神官たちの手に引き渡した。その後、フリアエにどんな運命が待ち受けているか、考えなかったのか？　わかっていて、フリアエを見捨てたのか？　それほどまでに世界が大事か？

かつての友を激しく憎んだ。あれほど誰かを憎んだのは初めてのことだった。二度と生きて会うことはあるまいが、仮に再会したらこの憎悪をぶつけずにいられないだろうと思った。

もっとも、実際には自分でも驚くほどなごやかな再会だった。あのとき平静でいられたのは、先にフリアエの許に駆けつけたのが自分で、カイムが後だったからだ。ただそれだけだったが、許すことができた。フリアエを守りたいという思いの前に、過去の恨み辛みなど霞んでしまったのだ。

にも拘わらず、フリアエを守れなかった。自分はこうして虜囚となり、フリアエの生死は知れない。もしかしたら、すでにフリアエは敵の手に落ちているのかもしれない……。

歌など何の役にも立ちはしないのだと、つくづく思う。昔、歌は自分にとって何ものにも代え難い能力だった。フリアエの笑顔が手の届くところにあった昔は。しかし今、歌が何の役に立つだろう？　歌など要らない。そんなものより、俺に……。

「俺に力があれば」

背後で、野太い男の声がした。

「誰だ！」

扉の開く音は聞こえなかった。いったいいつの間に入ってきたのだろう。
「俺に力があれば。フリアエを守れるのに」
必死で首を巡らせる。が、背後から響いてくる声の正体はわからない。
「俺に力があれば。フリアエを守り、俺だけのものにするのに」
「やめろ！」
聞きたくない。耳を塞ぎたかった。が、両手を拘束され、それも叶わない。
「俺に力があれば。俺の腕に抱き、誰にも渡さないのに。俺の許嫁なのに。俺だけを愛してくれるはずなのに」
「やめてくれ……」
違う。俺はそんなことを考えちゃいない。
「誰にも渡さない。俺だけのもの。俺だけの女」
聞きたくない。そんなわかりきったこと……いや、違う。これは俺じゃない。俺が考えていることじゃない。
「誰にも渡さない。フリアエは渡さない。誰にも。誰にも。誰にも。誰にも。誰にも」
俺は……。
「誰にも渡さない。誰にも。誰にも。誰にも……カイムにも」
「違う！　違うんだ！」

たまらず身を捩る。手首に痛みが走る。それでも構わずに身を捩る。痛みのほうがましだ。この声を聞かずにすむのなら。
「誰にも渡さない」
痛みと疲労で朦朧とした頭の中に、声が反響しながら繰り返される。
「僕を愛して。僕だけを見て。僕だけを抱いて。僕だけを愛して。僕だけを……」
やめてくれ……。
「僕だけを。僕だけを。僕だけを」
喉の奥で何かが弾けた。叫んでいるのか、泣いているのか、もはやわからない。
「……女神は死ぬ」
はっとして顔を上げる。灰色の壁を見つめる。
「封印役は精神、体力ともに蝕まれる。必ずや命を落とすだろう。近いうちに」
「そんな……」
「それが女神の役目」
フリアエの青白い顔が浮かんだ。起きていることさえ苦痛のようだった。いつも何かに耐えているように眉根を寄せ、言葉少なだった。
「本当はただの女なのに。おまえの横で子を抱き、しあわせそうに笑っているのが似合う、ただの女なのに」

フリアエが死ぬ？　それが女神の役目？　馬鹿な！
「女神の任を降りれば、ただの女に戻れるのか」
沈黙があった。耐え難いほど長い沈黙が。
「答えてくれ！　戻れるのか？」
「……命は延びる」
「俺はどうすればいい？　何をすればいい？」
「力が必要だ」
また力か……。無力感が全身を押し包んだ。
「ドラゴンと手を結ぶような、強大な力が」
強大な力？　ドラゴン？
「そうだ、カイム！　カイムなら！」
「カイムで良いのか？　フリアエの感謝と愛を一身に浴びるのが、本当にカイムで良いのか」
「俺は……」
できることなら、俺がこの手でフリアエを助けたい。守りたい。いつだって、そう願ってきた。俺の手で。心の底からそう願ってきた。でも、俺の力では……。
「俺に力があれば。フリアエを守れるのに」
ああ、そのとおりだ。俺はフリアエを守りたい。

「俺に力があれば。フリアエを守り、誰にも渡さないのに」
ああ、誰にも渡さない。あのとき、フリアエをカイムとともに行かせたのが間違いだったんだ。無理矢理にでも引き留めていれば。神官たちが束になってかかってきても、俺ならフリアエを渡したりしなかった。
「誰にも渡さない。俺だけのもの。フリアエは渡さない。俺だけの女」
そうだ、俺だけのものなんだ。俺が守るべき女。
「俺に力があれば」
力が欲しい。強大な力が。欲しい。
「俺に力があれば。俺に力があれば。俺に力があれば」
俺に力があれば……。
痛みと疲労が消えた。ゆっくりと顔を上げる。己の両眼が血の色を帯びていることに、イウヴァルトは気づいていなかった。

8

フリアエの許へ戻る途中、イウヴァルトの竪琴を拾った。砂漠の真ん中に、ぽつんと落ちていたのである。

イウヴァルトは片時も竪琴を放さなかった。どこへ行くにも、戦場にさえも持参した。その竪琴が落ちていたのだ。いかなる状態で捕らえられたか。楽観的な考えは捨てざるを得ないということだった。

「女神に何と説明すれば……」

ヴェルドレが沈痛な面持ちでつぶやいた。

「女神とて人間。心を痛めぬはずがない。かつての許婚の安否がわからぬとあっては」

人間か……。女神は女神、人間であってはならないんだろう？

ヴェルドレがつらそうに目を逸らすのを見て、カイムは肩をすくめる。このところ、気がつけば誰かに皮肉を投げつけている。ドラゴンの癖がうつってしまったらしい。

しかし、本当にフリアエは心を痛めるだろうか。あの無表情な顔のまま、他人事のようにうなずくだけではないのか。妹が嘆き悲しむ姿を見るのはつらい。が、それすらできなくなっている姿を見るのは、もっとつらい。目の前にいるのが妹の抜け殻にすぎないと思い知らされるのは。

ヴェルドレはイウヴァルトの件をどう告げようかと頭を悩ませていたようだったが、実際には説明の必要などなかった。カイムの手にイウヴァルトの竪琴があるのを見た瞬間、フリアエにはすべてわかってしまったらしい。

表情こそなかったが、白い顔がいっそう白くなった。無言のまま、フリアエの体が傾く。カ

イムはあわてて手を差し伸べ、フリアエの体を支える。頼りない感触だった。手足にまるで力が入っていない。

「封印が破られたゆえ、あなたへの負荷が重くなったのでは？」

「いいえ」

静かに首を左右に振るフリアエだったが、その言葉が偽りなのは誰の目にも明らかだった。

「それよりも、イウヴァルトが……」

その声が震えて途切れた。風が砂塵を巻き上げる。顔にかかる髪を払おうともせずに、フリアエはただ地平線を見つめている。

こんなやりきれなさを覚えたときには、帝国軍への怒りですべてを紛らわせてしまうのが手っ取り早い。今までの経験でわかっていた。カイムは剣に手をかけ、明日流されるであろう血の色を思った。

夜明け前、気配を感じてカイムは目を覚ました。

「この匂いは」

ドラゴンがつぶやいた。やはり同じ気配を感じたのだろう。ドラゴンだけではなかった。天幕からヴェルドレが這い出してくる。不意に地面に影が差した。空を仰いだヴェルドレが叫ぶ。

「ブラックドラゴン？」

どうやら契約相手と同種族の気配には敏感になるものらしい。そういえば、レオナールもフェアリーたちの住処の異変にいち早く気づいていた。しかし、今回は何も感じないのか、起き出してくる様子はない。アリオーシュも同様である。
ブラックドラゴンがなぜここに？
黒い翼が舞い降りてくる。カイムは剣に手をかけた。あれが両親を襲ったブラックドラゴンと同一のものとは限らないが、事と次第によっては無傷で帰すわけにはいかないだろう。が、ブラックドラゴンの背から飛び降りた者を見て、カイムは瞠目する。
「イウヴァルト！」
フリアエの叫び声がした。単に眠りが浅かったのか、かつての許婚が戻ってくるのを予感したのか……。
「ドラゴンを連れているとは。そなた、いつから契約者に？」
ヴェルドレの問いかけを無視して、イウヴァルトはまっすぐにフリアエへと向かう。
「フリアエ。おいで。何も怖くない。何も恐れることはない」
カイムは我が目を疑った。イウヴァルトの双眸が血のように赤い。
「世界はきっと良くなる。君だけが犠牲にならなくていいんだ」
イウヴァルトの目の色に気づいたのだろう、フリアエが後ずさる。女神の城で帝国騎士団員に襲われたフリアエは、当然、彼らの目の色を見知っている。

「おいで」
イウヴァルトが両手を広げてフリアエに近づく。カイムはその間に立ちはだかった。
「堕ちたか……」
ドラゴンのつぶやきには、諦めの色だけがあった。
「俺は強くなったんだ。歌を代償にして。俺は力を得た。だから、安心してフリアエを任せてくれ」
外見も声もイウヴァルトのものだったが、その口調はどこか尋常ではなかった。フリアエを背後にかばいながら、カイムは剣を構える。
「またその目か。俺は、おまえのその目がずっと嫌いだった。俺を見下し、憐れむその目が！」
なぜだ、イウヴァルト。なぜ、帝国の手に堕ちた？　なぜ、よりにもよって、おまえが。
「おまえのせいだ。おまえなんかといっしょに行ったから、フリアエは……」
何を言っている？
「復讐のためなら妹をも犠牲にするおまえより、俺はずっとまともだ！」
イウヴァルトが剣を抜いた。ドラゴンが吼える。剣と剣とがぶつかり合う。
重い。まるで岩の塊を投げつけられたかのようだ。今まで人ならぬ者を相手に戦った経験はあったが、契約者同士で剣を交えたことはなかった。これほどの力が自分に向けられるとは思いもよらなかった。

イウヴァルトの目が赤く光る。なぜだ、とカイムは繰り返す。五年前。今と同じようにイウヴァルトと剣を交えた。真剣勝負。あの日を境に何かが狂い、壊れていった。
結局、俺たちはあの日に戻っていくしかないのか？
強烈な衝撃がやってくる。体が浮き上がるのがわかった。背中から地面に叩きつけられる。口の中に苦い味が広がる。
「兄さん！」
フリアエが駆け寄ろうとする。来るな、と小さく頭を振ってみせながら、体を起こす。その瞬間、カイムは目を見開いた。フリアエをヴェルドレが必死で止めている、その向こう。ドラゴンの首筋にブラックドラゴンが嚙みついていた。
漆黒（しっこく）の翼、紅（あか）いふたつの目。脳裏をよぎる光景があった。父の喉に食い込む牙、母を切り裂いた鉤爪（かぎづめ）。
二度とあんなことは……。俺の目の前で。二度とさせるものか！
剣を構え、走る。ブラックドラゴンへと突進する。二度と殺させない。ブラックドラゴンが首を巡らせる。紅い目。大きく首をのけぞらせ、吼える。吐き出される炎。
炎に包まれたと思った刹那、突き飛ばされ、地面に転がった。
「馬鹿者……が」
ドラゴンの翼がカイムの上に力なく覆い被（かぶ）さってくる。

炎から守ってくれたのか……。

頑丈な鱗に守られたドラゴンとはいえ、炎の直撃を受けて無事でいられるはずがない。カイムもまた、起き上がることができなかった。契約相手が傷つけば、自分もまた傷を負う。

どさりと何かが投げ出される音がした。地面に縫い留められているかのような体を辛うじて横に捻る。ヴェルドレが血に染まって倒れている。フリアエは……？

ブラックドラゴンが飛び立つ音がした。

「歌の消えた世界にくちづけを」

イウヴァルトの勝ち誇った声が降ってくる。必死で立ち上がるが、まともに歩けない。イウヴァルトとフリアエを乗せたブラックドラゴンが遠ざかっていく。膝をついたカイムの前には、無惨に壊れた竪琴が転がっていた。


第二章
武将たちは曇り空のもと

1

「むかしむかしあるところに、とてもとても小さな、けれども勇敢な兵士がおりました。小さな兵士は時のしずくを飲み干し、世界の穴で眠っておりました。ずっと、ずっと若くて強い、そのままの姿で。長い長い、気が遠くなるほど長い歳月が過ぎて、世界が血で染まったとき、小さな兵士は目覚めました。

『今こそ、われのいのちを使う時！』

小さな兵士は時のしずくに浸った体で世界のはてをめざしました。小さな兵士は老い、弱り、やがて死にました。けれども、小さな兵士の永遠の時は、世界に新たな命を作りました……。あら、眠ってしまったの？」

腕の中で寝息をたてている我が子に、彼女は愛しげに頬ずりをした。起こさないようにそっと抱き上げ、寝台に運ぶ。

「可愛い可愛い私の坊や」

愛しいひとの、ロシエルの面影を宿した私の宝物、と心の中でつぶやく。この目許も、口許も、まるで写し取ったよう。なんて可愛らしい……。

うっとりと寝顔に見入っていると、背後で扉の開く音がした。

「お母さん、あのね……」

おずおずと扉の陰から覗いてくる顔を、彼女はきつい目でにらみつける。いやだわ、またこの子は。歩み寄り、扉の外へと突き飛ばす。

「セエレが目を覚ましてしまうじゃないの。気の利かない子ね」

ふたつの瞳がうるんで大きくなる。いやだ、いやだ。なんて私に似ているの。双子なのに、どうしてこの子は私に似たの？

「ごめんなさいは？」

「……んなさ……」

か細い声が震えて途切れる。耳障りな、神経を逆なでする声。怒りにまかせて頰を張り飛ばす。どうしてこの子は、マナは、ロシエルに似ていないの？　私にだけ似ているのは、なぜ？　私そっくりの目で、私を責めているのは……。

実際には、セエレもマナもそろって母親似だった。里の誰もが、彼女の夫でさえも、この二人に別の顔を重ね合わせることはできなかった。彼女の思い込みにすぎないのである。セエレが、死んだロシエルに似ているというのは。

手のひらが痛くなるほど打ち据えてしまうと、マナの顔を見ているのも苦痛になってきた。うずくまっている幼い娘を廊下に残したまま、彼女は後ろ手に扉を閉めた。

荒野の先、複雑な浸食地形によって作られた谷の奥に、土の化身ゴーレムを操る人々が隠れ住む里があると言われている。その里を見た者も、その里からやってきたという者もいないために、石の隠れ里の存在は半ば伝説となっていた。

しかし、里は実在していた。ゴーレムを操るという能力を周辺諸国に利用されることを恐れた里人たちは、余所者(よそもの)との接触を断つことで里の存在を隠し通してきたのである。荒野と里を結ぶ道はすべて岩で塞(ふさ)いだ。完全な自給自足を旨とし、旅人はもちろんのこと、商人でさえ出入りを許さなかった。それでも迷い込んできた者がいたときは、二度と里の外へ出さなかった。

閉鎖的な社会においては、婚姻相手が限られるために、代を重ねるごとに血統が近くなっていく。石の隠れ里も例外ではなかった。そのため、いつしか里に迷い込んできた者は「客人(マレビト)」として歓待され、里の者と婚姻関係を結ぶことを強要されるようになった。無論、生きて里の外へ出ることは許されない。また、婚姻を拒んだときには即座に殺された。

ロシエルもまた、そのようなマレビトであった。彼女はロシエルを一目見た瞬間、恋に落ちた。ロシエルも彼女に惹(ひ)かれた。ただ、困ったことに、彼女はすでに人妻だったのである。

マレビトは里へ来て二度めの新月を迎えるまでに婚姻相手を決め、里に永住する意思を表明しなければならない。その期日が迫っている。夫の目を盗んで逢瀬(おうせ)を重ねるうちに、すでに二度めの満月の夜もすぎ、月が欠け始めていた。もっとも、マレビトには期日のことも、婚姻と永住を拒めば何が待ち受けているのかも、一切教えてはならないことになっている。彼女の思

いは千々に乱れた。

すべてを知ったとき、ロシエルはどうするだろう。自分が何を要求されているのかが明らかになったとき、ロシエルは。死を望むだろうか。それとも里の娘たちの誰かを、私以外の女を妻に娶る道を選ぶだろうか。

ロシエルが他の女のものになる。考えただけでも胸が張り裂けそうだった。かといって、ロシエルを永遠に失った後、私は生きていけるだろうか……。

思い悩んだ末、彼女は掟を破った。マレビトが要求されているもの、その選択の後にたどる運命を教えたのである。驚愕するロシエルに彼女は言った。

「二人で逃げましょう。里の北にある分かれ道のひとつは、石の谷に通じているの。石の谷を越えれば荒野に出られる。荒野に出てしまえば、里人は決して追ってこない。次の新月まであと三日……。明日の夜、石の谷の入り口で待っているわ」

彼女にとって、これは賭けだった。果たしてロシエルが命懸けの逃避行に応じてくれるかどうか。いいえ、ロシエルはきっと私との逃避行を選ぶはず。明日の夜、分かれ道を通って石の谷まで来てくれる。彼は決して私を裏切らない。

あと二日で新月、マレビトに許された猶予の時も終わりに近いその夜、彼女はロシエルが密かに里の北へと向かう姿を見た。背後を気にしつつ、闇夜に紛れて走る姿を。

彼女は急いで自宅に引き返し、夫に告げた。

「マレビトが逃げるわ。彼は石の谷へ向かっていた。逃げようとしているのよ。早くゴーレムを呼んで」

里の北にある分かれ道。右を選べば行き止まり、左を選べば確かに石の谷へと通じている。しかし、切り立った崖に挟まれた狭い道は、死へと通じる道でもあった。切り立った崖の上にはゴーレムによって運ばれた大岩がいくつも並べられている。

婚姻と永住を拒否したマレビトは、わずかな食料と水を与えられ、その日のうちに里を出ていくように命じられる。分かれ道を左へ行き、石の谷を抜ければ荒野に出られると教えられて。もちろん、誰一人として荒野に出た者はいない。道の途中、転がり落ちてきたいくつもの大岩に押しつぶされてしまうのである。

彼女は敢えてその道を教えた。決して自分以外の女に愛しい男を奪われたくない一心で。

「ロシエル、ごめんなさい。……ごめんなさい」

夫が里の男たちとともに出ていくのを見送りながら、彼女は謝罪の言葉を心の中で繰り返した。石の谷への道は狭い。転がり落ちてくる大岩から身を隠す場所もないほど。これまで逃げおおせたマレビトは一人もいないと聞いている。

「あなたを他の女に奪われたくなかったの。それだけはいや。耐えられない。だから、誰の手にも届かないところへ行ってちょうだい。あなたが死んでしまっても、私には子供が残る。きっと男の子よ。私はもう一度、あなたに会えるわ。私だけの、あなたに」

星ひとつ見えない、暗い夜だった。

月満ちて生まれたのは、双子だった。女児の名は父親が、男児の名は母親がつけるのが里の習いである。生まれたばかりの息子を胸に抱いたとき、自然にセエレという名が浮かんだ。それ以外の名は考えられなかった。きっと死んだロシエルが耳元でささやいてくれたに違いないと彼女は信じた。

しかし、夫が娘につけたマナという名にはどうしてもなじめなかった。理由はわからない。誰かが娘の名を呼ぶたびに、落ち着かない気持ちになった。まるで、生まれてきてはならない子供をこの世に送り出してしまったかのような。

マナの瞳の色が赤というめずらしい色だったのも、一因かもしれない。透き通るように白い肌と真紅の瞳の組み合わせは、客観的には美しいものだったにも拘わらず、彼女の目には不吉で禍々しいものに映った。

その赤い瞳と、夫のつけた名が気に入らないのだと思い、彼女は決して娘と目を合わせず、その名を呼ばなかった。ただ黙って乳を与え、顔を背けて揺りかごを揺すった。もしもこの子が赤い瞳でなければ、マナという名でなければ、私はこの子を可愛いと思えたはず。だから、決して目を合わせてはならない。名前を呼んではならない……。

やがて双子は一歳の誕生日を迎えた。顔立ちがはっきりしてくるにつれて、彼女はセエレの

中にかつて愛した男の面影を見るようになった。一日じゅうセエレの顔を眺めていても飽きなかった。彼女はセエレしか見なかった。それで気づくのが遅れた。娘の、マナの顔が自分に瓜二つであることに。

気づいたのは、二歳の誕生日の直前だった。セエレとマナが遊んでいるのを何げなく眺めていたときだった。マナが遊ぶ手を止め、顔を上げた。にこりともせずに自分を見つめてくる赤い瞳。どこか非難がましく、恨めしげな目。

あれは私の……私の目だわ。

色こそ違っていたけれども、彼女にはそれがよくわかった。目だけではない。きつく結んだ口許も、薄気味悪くなるほど似ている。あの中指の爪を噛む癖。幼少時の彼女にも同じ癖があり、よく母親に叱られたものだった。

自分と同じ癖を持ち、自分とそっくりの顔を持つ娘。決して笑うことなく、血の色の瞳で冷ややかな視線を向けてくる娘。

何が言いたいの？　なぜ、そんな目で私を見るの？　わかったわ。私を責めているのね。夫を裏切り、ロシエルを死に追いやった。それを責めているんでしょう？

夫のつけた名前のせいではなかった。私がマナを愛せないのは。この娘はもう一人の私。過去の罪を責め立て、償いを強要する私の良心。だから、こんなにも私はこの娘が憎い。疎ましくてたまらない。

彼女は立ち上がると、セエレからマナを引き離した。訳がわからず、きょとんとしているマナの襟首を掴んで部屋の外に放り出す。大きな泣き声が上がる。マナではない。セエレだった。マナは泣き出すどころか、声ひとつたてようとしない。それがますます気に障る。

「悪い子ね！　そうよ、おまえが悪いのよ！」

何度も打ち据えると、ようやく泣き出した。それでも視線だけはこちらに向けたまま、決して目を逸らそうとしない。

「何よ、その目は。なんていやな色なのかしら」

憎い。疎ましくてたまらない。すべてを見透かすような目が。

「おまえなんか、生まれてこなければよかったのよ」

セエレ一人で良かったのに。私が欲しかったのは男の子だけなのに。

声もたてずに泣いている娘に背を向け、セエレを抱き寄せる。大切な大切な私の宝物。お母さんはね、あなただけが欲しかったのよ。あなただけを愛しているの。わかるでしょう。お母さんが愛しているのは、この世でたった一人、あなただけよ。

以来、日を追うごとに、セエレへの愛情は深まり、マナへの憎悪は激しくなった。マナが言葉を発するようになると、憎悪に恐怖が加わった。いつかマナが、ロシエルとの関係を洗いざらい夫に告げ口するのではないか、そんな思いが彼女に取り憑いて離れなかった。

もちろん、ロシエルの死後に生まれたマナが真実を知っているはずなどない。馬鹿げたこと

を考えていると、彼女自身にもわかっていた。それでも、いざマナの目を見ると、理性も常識も吹き飛んでしまう。

夫が子供たちに全く愛情を示さないのも、彼女の不安に拍車をかけた。もともと無口で、無愛想な夫だった。彼女に対しても愛情らしい愛情を見せたことがない。しかし、我が子に対しても無関心なのはどうしたことか。

もしかしたら、夫は気づいていたのだろうか。セエレとマナの父親が誰なのか。

考えれば考えるほど不安が募る。それを紛らわせたくて、彼女はセエレを溺愛した。そして、マナを罵り、叩いた。

そんなある日、彼女は里の外れにある廃屋でセエレとマナが遊んでいるのを見つけた。頭に血が上るのがよくわかった。人知れずロシエルと愛し合った思い出の場所を……。恐れていたとおり、この子はすべてを知っていた！

廃屋に踏み込んで、マナを何度も打ち据えたのは覚えている。泣きじゃくるマナを引きずって、里の北へと向かったことも。分かれ道を左に進み、ロシエルが殺された道をひたすら歩いた。すでに日が暮れようとしていた。

彼女が一人で家に戻ったのは、夜だった。どこでマナを置いてきたのか、どこをどう通って帰ってきたのか、さっぱり思い出せなかった。セエレは居間の長椅子で眠っていた。泣き疲れたのだろう、頬には幾筋も涙の跡があった。彼女はセエレを優しく抱きしめると、そっと寝台

に運んだ。

帰宅した夫に、彼女は告げた。マナが石の谷でいなくなった、と。しかし、夫はやはり何も言わなかった。

マナと同じ赤い目を持つマレビトが立て続けにやってきたのは、里の人々がマナを忘れ始めたころだった。最初のマレビトは、里にたどり着くなり力尽きた。次のマレビトは、飢えと疲労で衰弱していたが、話をすることはできた。

その男は尋ねられても名乗らず、ただ「天使の教会」の使者だと答えた。男は、石の谷で発見された子供の生まれた里を探すためにやってきたという。その場にいた里人たちには、その子供がマナであることがすぐにわかった。後難を恐れた彼らは、その場で男を殺した。

三番めと四番めのマレビトは、全く疲労した様子もなく、いきなり里人に襲いかかってきた。ゴーレムを使って仕留めたものの、何人かの里人が命を落とした。

里が襲撃されたのは、その翌日だった。見たこともない空中兵器が空を埋め尽くし、鈍色の鎧を纏った赤い目の兵士たちが大挙して押し寄せてきた。ゴーレムたちはまるで言うことをきかず、里人の多くが為す術もなく倒された。

表が騒がしくなったとき、彼女はとっさにセエレを床下に隠した。マナが「天使の教会」に連れ去られたことはわかっていた。マナはこの里の場所を教え、自分に代わって復讐して欲し

いと頼んだに違いないのだ。
六歳の子供にそんな知恵があるとは思えなかった。けれども、あの娘は普通の子供ではない。私を罰するために生まれてきた、もう一人の私。だから、私とセエレは真っ先に殺される……。
セエレだけは殺させない。私の宝物。命よりも大切な。
「そこでじっとしているのよ。何があっても、動いたり、声を出したりしちゃだめ」
そうささやいたときだった。扉が破られる音がした。夫の叫び声を聞いた。赤い目の兵士たちが踏み込んでくる。彼女は動かなかった。剣がまっすぐに振り下ろされる。
セエレだけは殺させない。セエレだけは……。

「母さん、どうしたの？　母さん」
いつの間にか、セエレが傍らにいた。床下から出てきてしまったのだ。
「だめよ……。まだ隠れていないと。早く……」
このままではセエレまで殺されてしまう。誰か助けて。セエレを助けて。お願い、ロシエル。あなたの子を守って。
崩れかけた家が大きく揺れた。ゴーレムの気配を感じる。そうだわ、ゴーレムなら……。
「ゴーレム。セエレを連れて逃げて。セエレを安全な場所へ連れていきなさい」
しかし、ゴーレムは動こうとしない。おかしい。なぜ、ゴーレムが言うことをきかないのだ

ろう。そういえば、気配がいつもとは違う気がする。
「ゴーレム、お願い。言うことを聞いて！」
もう時間がないの。私の命はまもなく尽きる。このままではセエレが一人になってしまう。まだ自分の身を守る術さえ持たない小さなセエレが。
「……セ……エレ」
「ゴーレム？」
今にも自分を呑み込もうとする死に抗いながら、彼女は必死で考えた。このゴーレムは、私たちが使役しているゴーレムとはどこか違う。操るのは無理かもしれない。でも、操ることができなくても、何か方法があるはず。セエレを守らせるための方法が。
「おまえは何が欲しいの？　言ってごらん、ゴーレム」
ゴーレムが低く唸った。それは、彼女の耳にひとつの言葉になって響いた。
「わかったわ」
今度は傍らの我が子に声をかける。
「セエレ、よくお聞き」
「母さん？」
「ゴーレムはね、あなたとお友だちになりたがっているの。わかる？」
霞んでいく視界の中、セエレがうなずくのがわかった。

「あなたの時間をあげなさい。そうすれば、ゴーレムはずっと友だちでいてくれる。あなたもお友だちが欲しいでしょう」

セエレは首を傾げていたが、やがてうなずいた。

「時間、あげればいいの？」

「そうよ。小さい勇者さまのお話、覚えてるでしょう。あなたも小さい勇者さまになるの。小さな兵士の永遠の時は、世界に新たな命を作りました……。あなたも子供のままの姿で、待つのよ。子供のまま。今のままで。いつまでも……私の赤ちゃん」

急激に目の前が暗くなる。母さん、と呼ぶ声が遠い。

「大丈夫よ。セエレ、覚えていて。私はあなただけを愛していた。忘れないで」

私の大切な宝物。私の可愛い赤ちゃん。永遠に……私の。

「母さん？　眠っちゃったの？　ねえ、起きてよ。母さん、キスしたげる。だから起きて。早く。どうしたの？　お返事してよ。ねえ、起きてってば」

2

誰もがそれぞれにやりきれない思いを抱いていた。いや、アリオーシュだけは何も感じていないようだったが、そもそも彼女は精神状態が普通ではない。

レオナールはブラックドラゴンの気配に気づかなかった自分を責め、ひたすら謝罪の言葉を口にしていた。ただ、カイムにとってはそんな謝罪すら鬱陶しいとしか感じられなかった。いくら言葉を連ねたとしても、フリアエがさらわれたという事実が消えるわけではないのだ。

もちろん、その場にレオナールとアリオーシュがいたからといって、フリアエを守りきれたかといえば、甚だ心許ない。己の契約相手がドラゴンだったせいで、ドラゴン族が敵に回ったとき、どれほどの脅威となるのか考えたこともなかった。敵を焼き尽くす炎を当たり前のものと思っていたが、それが味方に向けられたならばどうなるか……。

いや、何よりも自分の中の迷いが敗北を招いたのだ。心のどこかに、かつての友を殺めたくないという甘い感傷があったことは否めない。それが剣先を鈍らせた。五年前のあの日もそうだった。本気を出せばイウヴァルトを殺してしまうかもしれない、殺さないまでも傷を負わせることになる、そう逡巡していた隙を突かれた。また同じことを繰り返した己の甘さが情けなかった。

カイムは腹立ち紛れに剣を地面に突き立てる。肩から背中にかけて鈍痛が広がった。契約者の驚異的な回復力をもってしても、まだ全快とは言い難い。

「カイムよ」

横たわって傷ついた体を休めていたヴェルドレが、苦しげにつぶやく。ヴェルドレの傷は深い。契約者でなければ、果たして生き長らえたかどうか。

「イウヴァルトに剣を向けられたとき、私の心にあったのは慈悲ではなかった」
無意味に剣を振り回しながら、カイムはその言葉を聞くともなく聞いていた。
「恐怖ですらなかった」
ヴェルドレの視線を感じたが、カイムは気づかないふりをした。今は誰の顔も見たくない。
「怒りだ。私の心にはただ怒りだけがあった。そして、今もなお、心の奥底からわき上がってくる憎しみ……」
当然だろう。それが当然の反応なのだ。敵意と殺意をもって向かってくる者に慈悲を持てと言うほうが間違っている。
「今さら、人に何かを説くなど」
それがどうした。何を大げさに嘆く必要がある？
カイムは肩をすくめてみせる。全くどいつもこいつも。ヴェルドレに背を向け、その場を離れる。これ以上、この連中の相手はできそうにない。見ているだけで気が滅入る。
地平線が砂塵（さじん）に霞んでいる。ブラックドラゴンは東へと飛び去っていった。イウヴァルトはフリアエをどこに連れていったのだろう。今から追えば間に合うだろうか。
「おぬしの両親はドラゴンに殺されたのか」
背後からドラゴンが声をかけてくる。まだ知らなかったのかと、少し意外に思う。これまでの戦いの最中、様々なことを喚（わめ）き散らしてきたらしいが、両親の死について触れることだけは

しなかったということか。

カイムは答えなかったが、ドラゴンにはそれで十分に通じたらしい。そうか、と短くつぶやく声がした。

「帝国領土へ急げ。女神もきっとそこにいる」

東へ。敵の本拠地へ。今度こそ決着をつける。イウヴァルトを、今は帝国の手先と成り下がったかつての友を、この手で。

そこまで考えたときだった。ヴェルドレの悲鳴に似た声が聞こえた。何事かとカイムは振り返る。やがて、いくらか落ち着きを取り戻した、しかし困惑した声が飛んできた。

——カイムよ、すまぬが、先に西の荒野へ向かってはくれまいか。

連合軍から何か言ってきたらしい。あまりよい知らせではないのは、最初に聞いた声で想像がついた。

——帝国軍の亜人部隊が進軍中との連絡が入った。やつらを帝国領土へ向かわせては我が軍が圧倒的に不利になる。やつらの進軍を止めて欲しい。

亜人部隊。妖精の谷で遭遇したゴブリンたちを思い出す。確かに連中が本隊と合流すれば、連合軍が苦戦するのは見えている。

——私とて女神の身を案じておる。しかし、我が軍は最終決戦に向けて兵を帝国領土に集結させておるのだ。そこを挟撃されては……。

帝国軍の狙いは、再生の卵。当然、女神の命も奪おうとするだろう。今からすぐに後を追っても間に合うかどうか。まして、進軍中の亜人部隊との戦闘をすませてからとなると。

いや、イウヴァルトがそばにいる限り、フリアエを殺させはしないはずだ。イウヴァルトもろとも始末しようとすれば、帝国はブラックドラゴンという戦力を失うことになる。だとすれば、今すぐフリアエに手出しをすることは避けようとするのではないか。

皮肉なものだ。俺は今、イウヴァルトのフリアエに対する愛情と執着心に賭けようとしている。敵方に寝返り、遅かれ早かれ干戈(かんか)を交えねばならない相手だというのに。

――すまぬ……。

わかった、と短く答え、傍らのドラゴンを見上げる。

飛べるか?

当然だと言わんばかりに、ドラゴンは真紅の翼を広げた。

荒野にはすでに雪が降り積もっていた。目が痛くなりそうなほど白い大地の上、まるで虫食いのように帝国兵が点在しているのが見える。

「これは厄介だな」

亜人部隊に混じって、いくつか赤黒い鎧が見える。あの血染めの鎧があるために、上空から炎で一掃することができないと言いたいのだろう。

簡単な話だろうが。どこが厄介なんだ？

カイムはドラゴンの背から飛び降りた。剣を抜き、亜人部隊へと突っ込んでいく。

──雑魚(ざこ)どもは相手にするな。連隊を率いている者を狙え。

ゴブリンの群れが吹っ飛び、雪原が赤く染まる。どれが雑魚で、どれが隊長だか知らないが、要は皆殺しにすればいいだけのこと。いちいち見分けるほうがよほど手間がかかる。

──そなた……笑っておるのか。

驚愕したような声が聞こえてくる。野営地で休んでいろと言ったのに、ヴェルドレは聞き入れずについてきたのだ。

──この者たちを刃(やいば)で切り刻むことがそんなに楽しいか？

ああ、楽しいさ。楽しくてたまらない。悪いか。だいたい、進軍を止めろと言ったのはどこの誰だ？

──私には理解できぬ。そなた、自分がつらくないのか。

少し黙ってろ！　俺は俺のやり方でやる。

ようやくヴェルドレが黙り込んだと思えば、今度はアリオーシュの喚く声が聞こえてくる。

──何よ、これ！　まずそうなのばかり。これも……これも。いや！　おいしくない！

こいつも野営地に置いてくるんだった、とうんざりしながら思う。レオナールが黙々と敵を倒しているのだけが救いだった。この上「無益な殺生は云々」などと言われたら、帝国兵もろ

とも叩き斬っていたかもしれない。

とはいえ、一人よりは三人のほうが仕事は早い。雪原がゴブリンとオークの死骸で埋め尽くされるのにさほど時間はかからなかった。最初は喚き散らすばかりで役に立ちそうにないと思われたアリオーシュも、彼女の嗜好に合わない獲物ばかりに囲まれて癇癪を起こしたのか、群がる敵を片っ端から叩き潰してくれた。

――これだけの死骸……。手向ける花も枯れてしまうな。

雑魚は相手にするなという助言を無視したせいか、ドラゴンの声は不機嫌そうである。それとも、ドラゴンまでがヴェルドレやレオナールに与するつもりなのか。

足許に転がるトロルの骸を蹴る。八つ当たりだったが、構うまい。レオナールの言葉を借りれば、どうせ死者は土塊と同じ。何をされても文句は言わないだろう。

幾度となく蹴りを入れていると、トロルが身じろぎをした。まだ息があったらしい。剣を抜く。が、それをトロルに突き立てるよりも先にドラゴンが止めに入った。

――待て。我が心を読もう。こやつ、何か知っているようだ。

仕方がない。カイムは剣を収めた。

――女神……帝国……要塞……。要塞だと？　そんなものが。いったいどこに？

しかし、その疑問にそれ以上関わり合っていることはできなかった。雪原の向こうから地鳴りのような耳慣れない音が響いてきたのである。

「この気配は。まさか、ゴーレム？」

レオナールが眉根を寄せ、目の前に手をかざしている。ゴーレムといえば、石の隠れ里がこの辺りにあると聞いたことがある。土の化身であるゴーレムを操り、使役する人々が住まうという里。もっともおとぎ話や伝説の類に近い話で、里の存在を否定する者も多いという。

何か視えたのか？

「いえ、残念ながらはっきりとは。何か禍々しい力で遮られているようで……」

再び地鳴りに似た音が聞こえた。今度はカイムにも、その禍々しい気配がはっきりとわかった。確かに、何かがいる。

舞い降りてきたドラゴンに飛び乗る。音の正体はわからないが、放置しておくわけにはいかない。音が聞こえてきたのは、雪原に隣接した渓谷。その渓谷の向こうは帝国領土への近道になっている。ということは、間違いなく帝国軍が絡んでいるのだ。

渓谷に入ると、途端に視界が悪くなった。切り立った崖が迷路のように両側から張り出してきている。崖に挟まれた道は狭く、曲がりくねっていた。その狭い道をクリムゾンゴブリンが埋め尽くしていた。遠目にはまるで赤い服を着た子供たちが群れ集っているようだ。彼らの赤い皮膚は、エルフの血同様、炎や魔力を跳ね返すと聞いたことがある。その群れの中に、ぽつりぽつりと人間が立っているのが見える。

「魔獣使い……」

レオナールがつぶやいた。あの人間がゴブリンたちを操っているということか。と、魔獣使いの右手が挙がった。火の玉が飛んでくる。術師は違うが、エルフの里や妖精の谷で食らったのと同じもののようだ。

ドラゴンは悠々と火の玉をかわし、加速する。雑魚は相手にしないということらしい。火の玉の追撃を振り切り、ドラゴンは崖すれすれに飛んでいく。禍々しい気配が次第に強くなる。地鳴りのような音がはっきりとした地響きに変わっている。

両脇からせり出していた崖が不意に開けた。そして、気配の主がいた。初めて目にするゴーレム。土の化身というよりも、岩でできた動く要塞と言ったほうが近い。それほどゴーレムは巨大だった。

「付与魔術師がいます！　おそらくあれがゴーレムを操っている！」

魔術師？　ということは……。

予想と寸分違わぬ正確さで火の玉が飛んでくる。回避したと思った直後、衝撃がきた。魔術師は一人ではなかったのだ。カイムは、衝撃で傾いたドラゴンの背から飛び降りた。

魔術師は俺が倒す。ゴーレムは任せた。

ちらりと見えただけだったが、魔術師の衣は赤黒い色をしていた。だとすれば、ドラゴンの炎では倒せない。

着地の瞬間を狙ったのだろう、火の玉が二方向から同時にやってくる。地面に転がって避け

る。すぐに起き上がり、走る。まだ火の玉の気配はない。魔術師の右手が挙がるのが見える。まだ来ない。まだ行ける。
その瞬間、体が浮き上がった。ゴーレムの腕が目の前に振り下ろされたのがわかった。その衝撃で跳ね飛ばされたのだ。直撃を避けても、あれだけの衝撃が来る。魔術師二人、ゴーレムの腕二本。計四カ所からの攻撃を避けねばならないということか。
起き上がる。いつの間にか魔術師の姿が視界から消えている。火の玉がさっきとは違う方向から飛んでくる。跳ね飛ばされている間に移動したらしい。
「カイム！　こっちの魔術師は私が！」
頼む。複数の魔法攻撃はさすがにきつい。
頭上を炎が走る。ドラゴンがゴーレムの頭部を攻撃しているのだ。ひっきりなしに振り下ろされていた腕の動きが鈍った。その隙に走る。火の玉が左腕をかすめる。
付与魔術師は、エルフの里で遭遇した白装束と違ってすばやい。なかなか狙いが定まらない。
右手が挙がる。避けきれずに食らう。起き上がる。
ようやく剣先が赤黒い衣を捉えた。そのまま倒れ込むようにして貫く。悲鳴。血がし吹く。
魔術師はもう動かない。レオナールは？
荒い息をつきながら周囲を見回す。もう一人の付与魔術師の後頭部にレオナールの武器が叩き込まれたところだった。

――離れろ！

ドラゴンの叫びを合図に走る。辛うじて熱風の直撃を避ける。一際大きな地響きが辺りの空気を震わせる。カイムが振り向くと、ゴーレムは崩れ落ち、土に還（かえ）ろうとしていた。

ゴーレムと付与魔術師を片づけた後は、そのまま渓谷を抜けて帝国領土へと向かうはずだった。しかし、そう簡単に渓谷を出ることはできなかった。

「本当にこの道で良いのか？　何度も通っているような気がするぞ」

曲がりくねった渓流と複雑に入り組んだ崖とが延々と続いているせいで、どこをどう通ったのかすぐにわからなくなってしまう。空には分厚い雲がかかっていて、方角も定かではない。自分とドラゴンだけならば崖の上を飛んでいけばすむことだったが、精霊の力を借りて飛ぶアリオーシュにはそこまでの飛行能力がない。サラマンダーとウンディーネの両方の力を合わせればもう少し高く飛べるのかもしれないが、片方の力はヴェルドレを飛行させるために使っていた。

何かがおかしい。同じ場所を通っているような気がする一方で、分岐していたはずの道が一本道になったり、塞がれていたはずの道が開けていたりしている。まるで、自分たちが通った後、誰かが密かに道を組み替えてでもいるような……。

悪いことに、霧がかかり始めた。進むにつれて霧は濃くなり、視界はますます悪くなってい

く。眼下を流れているはずの渓流さえ見えない。
「人間の気配がある。こんな辺境の地に住む者があるとは思えぬが」
石の隠れ里？　まさか。あれはただの作り話だ。
「何か作為的な匂いがします。しかし、帝国軍ではなさそうですが」
レオナールの言うとおり、さっきのような禍々しい気配はどこにも感じられない。ただ、何かがいる。
かき消すように辺りの霧が消えた。突如として焼け跡が現れる。今までに幾度となく目にしてきた光景である。破壊され、焼け落ちた建物。踏み倒された草木。帝国軍の仕業だ。それとも、天使の教会のほうか。
「これは……石の隠れ里。いや、かつて石の隠れ里であった場所だな。ここも帝国軍に踏みにじられた後か」
地面が大きく揺れた。地響きと何かの気配。
「まだ帝国軍が？」
とっさに身構える。が、付与魔術師の気配はない。地響きが近づいてくる。巨大な土の化身が姿を現す。
「ここには誰もいないよ」
子供の声が頭上から降ってくる。

「父さんも、母さんも、もう……」

見上げれば、ゴーレムの肩の上に子供が乗っている。ゴーレムを操っているということは、里の生き残りなのだろう。

「ゴーレム。おぬしが岩に仕掛けをして我々を導いたのだな」

低い唸り声がした。肯定の返事らしい。子供がゴーレムの肩から飛び降りてくる。かなりの高さである。人並み外れた身軽さに驚いたが、すぐに納得した。子供の体を紋章が包んでいたのだ。

「子供！」

アリオーシュが満面の笑みを浮かべて駆け寄る。あわてたようにレオナールが間に割って入った。アリオーシュがつまらなさそうに踵を返す。精神を病んでいる彼女に「仲間」といった意識はないが、同じ契約者同士で事を構えるのはやめたほうがいいとなんとなく理解しているのだろう。

子供は不思議そうな顔でアリオーシュとレオナールを見比べ、ドラゴンを見上げた。

「こんな幼子と契約したか」

ドラゴンが呆れたように言う。幼い子供が契約者である以上に、ゴーレムが契約を交わしたという事実のほうがカイムには奇妙に思われた。伝え聞くところによれば、ゴーレムに知性や思考能力はない。だからこそ、付与魔術師たちは木偶を動かすのと同じ容易さでゴーレムを操

ることができたのだ。そのゴーレムが子供と契約を交わす。奇妙と言うよりほかにない。
ややしばらくして、ゴーレムが地鳴りそっくりの声で応えた。
「ココ、キケン。ツレテ、イク」
驚いたことに、このゴーレムには思考能力と思しきものがある。さっき倒したゴーレムとどこか違う気がしたが、そういうことだったのか。
「セエレ、ヒトリ。チイサイ。ヨワイ」
どうやら子供の名はセエレというらしい。それにしても、全身を包む紋章とは。
「ゴーレムにぼくの時間をあげたの」
カイムの疑問を察したのか、子供はにっこりと笑って答える。
「友だちになってくれるって言うから」
あまりにも無邪気な言い方に、カイムは戸惑った。この子供は契約の意味がわかっているのだろうか。自分が代償として何を支払ったのか、その重さを。
「ゴーレムに時間を渡すとはどういうことか、おぬし、わかっておるのか？　周りの人間が年老いて死んでいく中、おぬし一人老けもせず死にもせず、一生そのままの姿ぞ」
ドラゴンが向けてくる容赦のない言葉に、子供はやや怯(ひる)んだように見えた。が、それを振り払うかのように大声を張り上げる。
「一人じゃないもん！　ゴーレムがいるもん！」

自分自身の言葉に励まされたのか、子供は得意げに胸を張った。
「それにぼく、小さい勇者さまになったんだ。このお話知ってる？　ぼくは母さんから教えてもらったの」
また神話か、とドラゴンが忌々しげに吐き捨てる。
「人間はすぐに現実から目を逸らし、絵空事へと逃避する。弱いものよ。あまりに弱い……」
ドラゴンに賛同するわけではないが、忌々しい気持ちはよくわかる。弱い者は嫌いだ。とりわけ子供は。自分も昔は子供だったことを思えば理不尽な嫌悪感だとは思う。が、弱さに逃げ込み、弱さを盾に虚勢を張る、そんな子供特有の行動がどうしても許容できない。自分もまた、昔はそういう子供だったからだろう。
子供がまとわりつこうとするのを、思わず避ける。が、ゴーレムがにじり寄って退路を塞いでくる。逃げ場をなくして、カイムは天を仰いだ。……やれやれ。
「さっき、天使の教会って言ってたでしょう？　ぼくも連れてって」
カイムはドラゴンと顔を見合わせる。里人の仇討ちでもするつもりだろうか。
「マナが……妹がさらわれたままなんだ」
妹がさらわれた？　天使の教会にか？
「里の人たちが言ってた」
何かつらいことでも思い出したのか、子供の声が沈んだ。傍らのゴーレムが励ますように唸

り声を上げる。
「ゴーレムにも情けはあるのだな」
ドラゴンが意外そうにつぶやくのを聞きながら、何もかもが意外なことだらけだとカイムは思う。ゴーレムに思考や感情があることも意外なら、こんな子供が契約者であることも意外、そして、その子供の目的が自分と同じ「妹捜し」であることも。
どうする?
「連れていくしかあるまい」
子供の顔がぱっと輝いた。
「では、ゆくか。帝国領土へ」
しつこくまとわりつこうとする子供を、カイムは手を振って追い払った。

3

ゴーレムが岩の仕掛けを解いた後も、道の複雑さに変わりはなかった。隠れ里の人々が余所者の侵入を阻むために、わざと道をわかりにくくしておいたのだろう。
幼い子供とはいえ里人であるセエレのおかげで、里の周辺のごく限られた範囲内だったが、道に迷わずにすんだ。ただ、その功績をもってしても、セエレを足手まといに思うカイムの気

持ちに変わりはない。

そんなカイムと対照的に、セエレが一行に加わったのを喜んでいるのがアリオーシュだった。もっとも彼女の場合、喜んでいるのは食用となる獲物が目の前にいるからである。しかし、彼女の露骨すぎる視線に当のセエレは全く気づいていないらしく、無邪気に笑いかけ、話しかけている。

そんな無防備なセエレをアリオーシュから守らんとしているのがレオナールだった。もともと責任だの義務だのが好きそうな男である。罪のない子供を人喰いエルフの魔の手から守るという役回りが気に入ったのだろう。

好きにやっててくれ、とカイムは半ば呆れながら思う。全くお気楽な連中だ……。

「ここから先は、絶対に行っちゃだめって言われてたんだ。危ないからって」

狭い道を通りながらセエレが言った。道の両脇は切り立った崖になっていて、奇妙な圧迫感がある。歩いているうちに、崖に挟まれて押しつぶされそうな気がしてくるのだ。こんな道で崖崩れにあったとしたら、まず逃げられないだろう。実際、崖崩れに巻き込まれた者も少なくないのかもしれない。

やがて道幅が次第に広くなり、開けた場所に出る。石の谷と呼ばれる場所にたどり着いたらしい。ここを抜ければ、帝国領土は目前だった。

「あのね……」

セエレがカイムの腕を引っ張った。
「僕の妹、この谷でいなくなったんだ。捜してもいい？」
馬鹿なことを言うな。そんな暇はない。
「でも……マナを見捨てて行くなんて、いやだ」
妹は天使の教会に連れ去られたんじゃなかったのか。
「そうだけど。でも、もしかしたら、それって別の子のことかもしれないし。もしもマナがここで助けを待ってたら……」
おまえの妹がいなくなったのはいつだ？　ずっと前なんだろうが。ここは、子供がたった一人で生きていけるような場所じゃない。助けを待っていられるのは、せいぜい数日だろう。
「う、うん。でも、マナの手がかりが残ってるかもしれない」
「天使ノ　教会ノ　手ガカリモ」
横合いからゴーレムが唸る。このゴーレムは、何が何でもセエレの味方をせずにいられないらしい。
「ねえ、お願い。いいでしょう？」
いい加減にしろ！　無駄だ。
「カイム。無駄な寄り道ではないかもしれませんよ」
レオナールが取りなすように割って入ってくる。

「隠れ里に向かう途中、君も見たでしょう。付与魔術師ばかりか亜人たちまで……。石の谷に彼らの拠点があったとしても不思議はない。だとしたら、我々はそこを叩いておく必要があるのではないですか」

やれやれ、とカイムは肩をすくめた。こいつも子供の味方か。

「その代わり、日暮れまでには谷を出ましょう。捜索はそれまでの間です。それでいいですね、セエレ」

「ありがとう!」

セエレがうれしそうに飛び跳ねている。やっぱり子供は嫌いだとカイムは思う。ドラゴンが何か辛辣(しんらつ)な言葉を投げつけてくれるのを期待したが、腹立たしいことにドラゴンは沈黙したままだった。

石の谷は不毛の地だった。川や涌き水の類が全くなく、草一本生えていない。ひたすら岩と石とが転がっているばかりである。

「こんなところに、セエレの妹さんは一人で?」

母さんが、と言いかけてセエレは言葉を切った。

「美味(おい)しそうな匂いもしないわ」

アリオーシュが辺りを見回しながらつぶやく。

「とにかく、ここでいなくなったんだよ。嘘じゃない。本当なんだ」

——しかし、この環境のもとで人間が生き残るなど不可能だ。

ドラゴンの声にたちまちセエレはしょげ返った。が、すぐに顔を上げ、走り出す。その目には子供とは思えない強い意志の色があった。

「マナ！　マナ！　いたら返事して！　ぼくだよ！　セエレだよ！」

石につまずき、岩場に足をとられながら、セエレは駆け回った。妹の名を叫びながら。

「セエレ。どうか落ち着いてください」

なだめようとするレオナールの手を振り払い、セエレは叫び続ける。声を嗄らし、泣きじゃくりながら叫ぶ。その姿には、単なる妹思いというだけでは片づけられないものがあった。いったい何がこの子供を駆り立てているのだろう。

やがて疲労と気落ちとで動けなくなったのか、セエレがその場に座り込む。レオナールが慰めるようにそっと肩に手を置いた。セエレが激しく泣き出す。

「何か事情があるんですね。なぜです、セエレ。なぜ、君はそこまでして妹さんを捜そうとするのですか」

「マナは……いなくなったんじゃ……ないんだ」

セエレが途切れ途切れに言葉を絞り出す。

「捨てられた……母さんに」

セエレは何度も手の甲で涙を拭った。泣くまいと歯を食いしばっているのがわかる。
「マナは母さんに叩かれてた。マナだけ、いつも……」
泣き腫らした顔に、セエレは微笑みを浮かべる。
「ぼくは叩かれなかった。だから、マナの分まで苦しまなくちゃいけないんだ。ぼくだけ、母さんに優しくされてたから」
その微笑みにはどこか歪んだものが感じられた。無邪気な子供の笑顔とは違う。
――幼子よ、おぬしが胸に抱く悲しみは「偽善」とも呼ばれるのだ。わかるか？
一瞬、セエレの頬が強ばった。ドラゴンの言葉が真実だったからだろう。セエレは立ち上がると、顔を見られたくないというように背を向けた。
「なああ、無邪気で可愛い坊ちゃんよぉ、エルフにいっぺん喰われてきてくださいい」
どこからともなくフェアリーが現れて、セエレにまとわりつく。人の心が迷いや苦悩で揺らぐとき、すかさず現れて傷を広げようとするのはこの種族の特性らしい。ただ、付け入る隙のない者には興味がないのか、カイムやアリオーシュにはほとんど近寄ろうとしない。
「ほんっとに鬱陶しいんだよ、おまえ。妹の分まで喰われてこいよな」
耳を塞いでセエレが逃げ出す。フェアリーがしつこく追いかける。
「そうそう、喰われちゃえ。頭からばりばりばりりってさ」
フェアリーのけたたましい笑い声が響き渡ったときだった。不意に地面に影が差した。普通

の鳥とは明らかに異なる翼が舞い降りてくる。グリフォンだった。獅子の爪を持つと言われている妖鳥で、凶暴なことで知られている。

「セエレ！」

レオナールが叫ぶのと同時に、グリフォンがセエレを爪にかける。セエレの小さな体がたちまち地面を離れた。

「カミサマ、ありがとう。これであの使えねえヤツが切り捨てられるってもんだよな。ああ、よかったよかった。厄介者はさっさと死ね。死んじまえ！」

レオナールの手がフェアリーの頭を手荒く掴み、黙らせる。

「早く追わなければ」

ドラゴンの背に飛び乗りながら、カイムは内心でため息をつく。フェアリーではないが、勝手に喰われてくれ、と思う。子供なんてものは何の役にも立たないくせに、手間ばかりかけさせてくれる。

「私が助けたら、私のもの？　食べてもいい？」

アリオーシュが舌なめずりをしながら尋ねてくる。相手にするのが面倒になって、好きにしろと答える。

とんでもないことをと文句を言われるかと思ったが、レオナールは何も言ってこなかった。何か考えごとでもしていたのだろう、カイムが見ているのに気づくと、決まり悪げに視線を逸

らした。

グリフォンはかなりのすばやさで飛び去っていったが、ドラゴンの翼をもってすれば追跡は不可能ではなかった。

「ああ、あそこです」

やや遅れてついてきたレオナールが指さした。崖の途中にある窪(くぼ)みの中にグリフォンがセエレを下ろすのが見えた。おそらくそこが住処(すみか)なのだろう。セエレを下ろし、再び飛び立ったところをドラゴンが炎で焼き払う。

こんな妖鳥が巣を作っているようでは、セエレの妹が生きているはずがない。やはり無駄足だったとカイムは舌打ちしたい気分になる。

――これは厄介な。これ以上近づけば、崖が崩れる。

ドラゴンが苦り切って言う。見るからに脆(もろ)そうな窪みである。ちょっと羽ばたいただけでも風圧で崩れ落ちかねない。かといって、下から登るには、足がかりが少なすぎる。

――大丈夫だよ。この高さなら、飛び降りても。

セエレが事も無げに答える。そういえば、セエレはゴーレムの肩から造作もなく飛び降りていた。あれもかなりの高さだったはずだ。

――セエレ、大丈夫ですか。怪我(けが)は？

大丈夫、というセエレの声をドラゴンが遮った。

——待て。飛び降りてはならぬ。下を見るがいい。
崖の下を見下ろすと、岩陰に紛れて蠢くものがある。
——魔物の類ですか？
ゴブリンだ。クリムゾンゴブリンもいる。
帝国の手先なのか、野生のものなのかは定かではないが、いずれにしても危険なことに変わりはない。加えて、その数。崖の真下から広範囲にわたってゴブリンたちが群れを成している。
そんな場所へうっかり飛び降りようものなら、たちまち食い殺されてしまうだろう。
——おぬしの力ならば難なく倒せる相手であろうが。
要するに、崖下を一掃しておけということか。
——人を殺すためではなく、助けるために剣を振るうのもたまには良かろう。
ドラゴンがからかうように言うと、崖下へと降下した。あろうことか、ゴブリンの群れ集うど真ん中へと突っ込んでいく。何もこんな場所を選ばなくても、と肩をすくめてカイムは飛び降りる。
難なく倒せる相手とドラゴンは言ったが、人間を倒すよりもゴブリンを倒すほうが手がかかる。気が進まないからといって生半可な気分で剣を振っていたのでは、返り討ちにされてしまう。セエレのことはひとまず忘れて、カイムはゴブリンを片づけることに集中しようとした。
——食べてもいいのね？　ちょうどお腹がすいてたのよ。

アリオーシュの楽しげな声とゴブリンたちの叫び声を聞くともなく聞きながら、群がるゴブリンを斬り捨てていく。

――私が助けたら……。

何か言ったか？

――いえ、なんでもありません。

レオナールのことも頭から追い払う。いったいどこに隠れていたのかと思うほど、ゴブリンはあとからあとから涌いてくる。ひたすら斬り払い、薙ぎ倒す。殺すためであろうと、助けるためであろうと、やることは同じだ。何ひとつ変わることはない。

ようやくゴブリンの大群を片づけたときには、すでに夕刻だった。剣を収めたのを合図にセエレが飛び降りてくる。降り立つなりセエレが飛びついたのは、カイムの腕だった。

「ありがとう！　本当にありがとう！」

ぐずぐずと泣く子供も苦手だったが、こうしてじゃれついてくる子供はもっと苦手だった。

カイムはセエレの手をほどく。

やっぱり人助けは柄じゃない。どうにも居心地が悪い。

「また食べ損ねたわ」

アリオーシュが鼻を鳴らした。と、それに重なるように金属音に似た不快な音が響いてくる。

さすがにアリオーシュがぎょっとした顔をする。ヴェルドレがたちまち蒼白になった。

「この声は……フェアリーの」

レオナールの言葉をドラゴンが引き継いだ。

「森の封印が破られたのであろう。この断末魔の悲鳴は」

「なんということ……」

ヴェルドレが天を仰ぐ。砂漠に続いて、森までもが。

「ぼくの……ぼくのせいだね。ぼくが谷に行きたいなんて頼んだから」

その卑屈な言い方が気に障った。カイムは無言で背を向ける。

――反省という名の言い訳ばかりしていても、事態は何も変わらぬぞ。

ごめんなさい、と蚊の鳴くような声でセエレが謝った。ドラゴンに辛辣な言葉を投げつけられても、今度は逃げようとしていない。セエレはうつむいて、じっと考え込んでいる。

「帝国領土へ急がねば」

ヴェルドレの言葉にレオナールがうなずく。最終封印である女神を取り戻す。今やらねばならないのはそれだけだ。

ゴーレムがセエレを手のひらに載せようとしたときだった。小さく息を吸い込み、セエレが言った。

「あの……あのね。聞いてくれる?」

きつく握りしめた両手が震えている。もう一度、息を吸い込むと、セエレは一気に言葉を吐

き出した。

「マナをいじめる母さん、怖かった。ぼく、本当は怖かったんだ。でも、何も言えなかった。マナが泣いてても、知らん顔してた。だって、母さんはぼくには優しかったから。もしもマナが母さんに優しくされたら、今度はぼくがいじめられるんじゃないかって……。ううん、母さんがぼくをいじめないってわかってても、きっと知らん顔してた。ぼくにだけ優しくして欲しいって思ってた。ぼくだけ……」

子が母を独占したいと思う気持ちは決して不自然なものでも、めずらしいものでもない。ただ、現実にそれが叶えられるとは限らないというだけだ。もしも幼い独占欲が完全な形で満たされたとき、それを自ら手放せる子供がいるだろうか。

異様なまでの熱心さで妹を捜す姿は、本来ならば分け合うべきものを独占し続けた罪の意識によるものだったのだろう。卑屈なまでに自分を責めようとするのも。妹マナが赦しの言葉を口にしない限り、セエレの罪悪感が消えることはない。もしもマナがすでに死んでいたならば、セエレは一生、その罪悪感を抱えて生きていくことになる。

——利己的な愛と憎しみを受けて育った子供らに……未来はあるのか。

人間に対して冷淡なドラゴンも、あまりにも極端な環境で育てられた双子には同情を禁じ得なかったらしい。

「セエレ。おぬしの妹が生きておると良いな」

谷を後にしながら、ドラゴンがセエレにかけた言葉は優しかった。

4

帝国、と人々が呼ぶ集団は、正確には「国」ではない。帝国領土と呼ばれ、帝都と呼ばれる場所も、実際に彼らが治める土地や都ではなかった。

帝都とは最初に帝国軍が滅ぼした国の都であり、帝国領土は彼らによって廃墟（はいきょ）となってしまった町や村を指している。帝国が国家でない以上、厳密な意味では領土も国境もあり得ないのだが、他国の人間を寄せつけないのが国境で、他国の人間が住まうことができないのを領土と呼ぶならば、確かに国境も領土も存在していた。

そして、帝国に与さない人々にとって、帝都とは魔の都であり、帝国領土とは死霊や妖魔の跋扈（ばっこ）する暗黒の大地であった。帝国軍の勢力圏内に足を踏み入れ、その目で確かめることが叶わない以上、どうしても虚像だけが膨らみ、独り歩きしてしまうものである。

しかし、実際に目にする帝国領土は暗黒に覆われているわけでも、荒れ果てた不毛の大地でもなかった。他の国々と同じように、緑の草原が続き、或いはゆるやかに川が流れ、鳥が歌い、獣が駆け回っていた。単に行き交う人々の姿や人家が全くないだけで。

帝国軍によって焼き払われた町や村、田畑は恐ろしいほどの勢いで朽ち果て、風化していっ

たのだろう。まるで大地が人間の痕跡をすべて消し去ろうとしたかのように。

今、連合軍の兵士たちが集結している広大な丘陵地帯もまた、元の姿は豊かな田園を周辺に持つ城塞都市であったと聞く。整備された街道には商人や旅人が行き交い、常ににぎわっていた。昔の姿を知る者は、ひたすら緑の野原が広がり、道も建物の跡さえもない丘陵地帯をいかなる感慨を持って眺めることだろう。

夜明け前の青さが丘陵地帯を押し包んでいた。薄闇の中、丘陵を埋め尽くした兵士たちが、じっとその時を待っている。やがて東の地平線が白く煌めいた。薄くかかった雲の切れ間から光が覗く。丘陵がゆっくりと青から緑に変わり、兵士たちの足許に長く影が伸びる。

朝の風に連合軍旗が翻る。そして、その先には帝国軍旗を掲げた大軍が待ち受けている。決戦だった。

数の上では五分と五分か。

上空から丘陵を見下ろしながら、カイムは独りごちる。亜人部隊を殲滅しておいたのは正解だった。ヴェルドレの危惧したとおり、ここであの化け物どもに背後を突かれたら、連合軍側は大苦戦を強いられただろう。

——地上が気になるか。

そんなに剣を振り回したいかと言いたげな問いかけである。図星だったが、カイムは黙って聞き流した。

レオナールたちは地上軍と合流していた。セエレもである。子供を戦場に連れてくるのは気が進まなかったが、セエレを一人で残せばアリオーシュもまた戦線を離脱するのは見えている。彼女のセエレに対する関心の高さは相変わらずで、四六時中つきまとって離れようとしなかった。アリオーシュがセエレの許へ向かえば、当然、レオナールもそれを阻止しに走るだろう。

いずれにしても、セエレを後方に残すのは得策ではないという結論に至った。いやしくも契約者である以上、自分の身くらいは守れるであろうし、ゴーレムもいる。働きには期待しないが、足手まといにはなるまいと踏んだ。

ゴーレムの手の上で、セエレがドラゴンに向かって手を振っているのが見える。無邪気なものだ。

眼下で鬨の声が上がった。連合軍の兵士たちが怒濤のように丘陵を下っていく。

——来るぞ。

帝国側から次々に空中兵器が現れる。地上での数こそ五分五分だったが、上空となると、連合軍側には迎え撃つ戦力が極端に乏しい。カイムが地上戦に加わることができなかった理由がそれである。

——あれは？

ドラゴンに言われて、丘陵の向こう側に目を移す。黒い巨大な何かが蠢いている。と、それが不意に盛り上がって山になる。いや、頭だ。頭を上げて、立ち上がったのは、ゴーレムの数

倍はあろうかと思われる巨人だった。それも一体ではない。次々に黒い巨体が姿を現す。

連合軍の雄叫(おたけ)びが悲鳴に変わった。兵士たちが傾(なだ)れを打って逃げ出す。

あの一つ目の巨人はいったい？

――サイクロプスを人工的に繁殖させたのであろう。正気の沙汰(さた)とは思えぬがな。

地響きをたてて巨人たちが歩き出す。長い鉤爪(かぎづめ)の生えた足が敵と言わず味方と言わず踏みつぶそうとしている。ただ、思ったよりも動きは鈍い。そのままでは味方にとっても危険だからか、両腕も後ろ手に拘束されている。上空にいればさほどの脅威にはならないのではないか。

――一つ目の薄鈍(うすのろ)め。我が炎で貴様の目玉を焦がしてくれようぞ。

その目玉が異様な光を帯び始める。が、ドラゴンは構わず炎を吐いた。動きの鈍いサイクロプスは避けきれず、炎は顔面に直撃した。

効いてない？

――馬鹿な。

異様な光はいよいよ強くなる。ドラゴンが再び炎を吐く。強い光が放たれている中、今度ははっきりと見えた。炎が目玉に吸い込まれて消えたのである。

次の瞬間、目玉が膨れ上がったかに見えた。強烈な光が束になって飛んでくる。ドラゴンがぎりぎりのところでかわす。それでも爆風に似た衝撃を完全には避けきれなかった。音も熱も全く感じられない、奇妙な光だが、直撃を受ければ一溜まりもないことがよくわかる。

光を放った後の目玉は輝きを失い、黒く穿(うが)たれた穴のようにも見えた。しかし、すぐにまた明るさを取り戻す。あの光の束が放たれるまでに多少なりとも時間がかかるのだけが救いだった。

甘かった。帝国軍も馬鹿ではない。いくら連合軍側に空中兵器が乏しいとはいえ、上空への攻撃手段を持たない兵器を作るはずがなかった。

空中兵器が一斉に火を噴く。それを炎で返しながら、ドラゴンが空中兵器の群れに突っ込む。一瞬にして周囲は黒い煙に包まれる。空中兵器が次々に炎上、墜落していく。

次が来る！　左だ！

ドラゴンが急上昇した。そのぎりぎり下を光がかすめていく。サイクロプスは一体ではない。動きが遅いとはいえ、他に気を取られていると狙い撃ちにされてしまう。いったいあれをどうやって倒せばいいのか。ドラゴンの炎が吸収されてしまっては、攻撃手段がない。

——あの目玉が元凶か。

ドラゴンがサイクロプスの胸元めがけて炎を吐いた。が、目玉は難なく炎を吸い寄せ、呑み込んでしまった。正面からの攻撃は効かないということだ。正面？　正面以外は？

わかった！　背後だ。目玉の真後ろを撃て！

サイクロプスは動きが鈍い。加速して背後に回れば。ドラゴンがサイクロプスの頭を飛び越える。反転し、炎を吐く。サイクロプスも振り返ろうとしていたが、当然、間に合わない。後

頭部を炎が直撃する。

サイクロプスが巨体を震わせ、膝をつく。二度、三度と炎を浴びせかけると、音をたてて倒れ伏した。足許にいる帝国兵たちを巻き添えにして。

——弱点がわかれば、図体ばかりの薄鈍どもなど物の数ではないわ。

ドラゴンはサイクロプスの間を縫うように飛び回りながら、彼らの後頭部に炎を吐いた。周辺をうろうろしている空中兵器がたちまち巻き添えになる。実際、ドラゴンの言うとおり造作もなかった。次々に一つ目の巨体は頽れ、地上の帝国兵たちを押しつぶしていった。

——これで一つ目も、小蝿どももすべて倒したようだな。あとは、地上の雑魚どもを片づけるだけか。……おぬしの好きな時間だぞ。

小馬鹿にした口調で言われても、別に腹も立たなかった。いつの間にか、ドラゴンの皮肉や当てこすりに慣らされてしまったらしい。以前ならば気に障っていたであろう言葉も、今ではなんとなく納得してしまうことさえある。妙なものだと思う。

地上に降りてみると、連合軍が再び隊列を組み直し、丘陵を駆け下りていくところだった。サイクロプスを撃破したことで勢いを取り戻したのだ。さらにサイクロプスの下敷きになって多くの帝国兵が死んだ。数の上でもいくらか帝国軍を上回っている。

この戦いに勝利すれば、この丘陵地帯に集結した帝国軍を一掃すれば、俺の復讐も終わるということか？　帝国がこの地上から消滅すれば、俺が剣を振るう必要もなくなる。そうなった

ら俺は……。

カイムは考えるのをやめた。今は来るか来ないかわからない明日のことを考えるときではない。目の前の敵を倒す。それだけ考えていればいい。

――これが、人と人が行う最後の戦いになるようにと……そう願っておるよ。

ヴェルドレのつぶやきが聞こえてくる。最後、という言葉がひどく不吉なものに響いたのは、気のせいだろうか。

余計な考えを振り払い、敵の真っ直中へ斬り込んでいく。傭兵として様々な戦場を駆け巡ってきたが、これほど多くの帝国兵を見るのは初めてだった。

わざと敵が密集している場所へ突っ込み、剣を振り回す。一振りで幾人もの帝国兵が骸に変わる。ほとんど反撃を受けることはない。契約者の力を使った一方的な殺戮行為。楽しい。面白くてたまらない。

今まで、復讐のために戦っていると思っていた。憎むべき敵だからこそ殺しても良心が痛まない、それどころか喜びさえ覚えるのだと、そう解釈していた。違う。今、わかった。俺は殺戮そのものを愉しんでいる。流される血が誰のものであろうと構いはしないのだ。

心の奥に底無しの闇を持つ者だけが契約者となれる、そう聞いた。その底無しの闇の中に、いつの間にか魔物が棲みついていた。殺意と悪意だけを喰らって生きる魔物が。

もしもヴェルドレの言うように、これが最後の戦いとなったならば、明日以降、俺は何をす

ればいい？

——カイム、聞こえますか？　帝国兵の動きが変です。

レオナールの声で我に返った。

——動きがあまりにも単純すぎる。彼らには我々の姿が見えていないんじゃないでしょうか。

そんなことはないだろう。統率がとれすぎているせいで、かえって単純に見えるんじゃないか。連中が一糸乱れぬ動きをするのはいつものことだ。

——違うんです。一定の距離を置いてしまうと、彼らは全く攻撃してこない。それどころか、逃げる敵を追いかけようともしないんです。これではまるで……。

馬鹿な、と否定したものの、言われてみれば味方が全く苦戦していない。これはおかしい。今まではこれよりもずっと少ない数の帝国兵に手こずってきた。数の上で五分五分ならば、実際の戦力としては向こうが上ということになる。少しくらいこちらの数が多くても、決して有利とは言えない。それが帝国軍との戦いだったはずだ。

——連合軍が優勢になったようだな。しかし、容易すぎないか？

上空から戦況を眺めていたドラゴンも、訝しげな声を送ってくる。やはり何かがおかしいのだ。しかし、いったい何が……。

違和感の正体がわからないまま、ただただ帝国兵を殺し続ける。手を止めれば、余計なことばかり考えてしまう。片時も手を休めてはならない。立ち止まってはならない。

ふと気がつくと、向かってくる帝国兵はいなくなっていた。周囲の帝国兵をすべて倒してしまったわけではない。少し離れたところに、小隊がいくつか見える。当然、彼らからもこちらの姿は見えているはずだ。なのに、彼らは動こうとしない。見えていないのではないかとレオナールが言った理由がようやくわかった。

その小隊に向かって、連合軍の兵士たちが突っ込んでいく。帝国兵たちはごく当たり前の動作で応戦し始める。全く見えていないわけではないようだ。ある一定の範囲内の敵ならば認識できるのだろう。しかし、これはまるで判断力や思考力を奪われてしまっているかのようだ。まさか彼らはゴーレム同様、付与魔術師に使役されているのだろうか。

勢いづいた連合軍の兵士たちが雄叫びを上げて戦場を駆け回っている。ここで彼らの士気を挫(くじ)くような真似はできない。カイムは剣を握り直すと、ぼんやりと突っ立っているようにしか見えない帝国兵の群れに向かって走った。

丘陵が足の踏み場もないほどの骸で覆い尽くされるころ、帝国軍はついに撤退を始めた。カイムの中にあった疑問と違和感は、帝国兵を切り刻むうちに消えていた。今はただ、終わったという安堵(あんど)感と脱力感だけがあった。

——なんだ、この威圧的な気配は。……悪い予感がする。

ドラゴンの不吉なつぶやきを追い払いたくて、カイムは剣を天に向かって突き上げた。周囲

の兵士たちがそれに呼応して勝ち鬨を上げる。

余計なことは考えまい。まだやるべきことがある。イウヴァルトとの決着、そしてフリアエの奪還。まだ戦える。帝国との決戦が終わっても、まだ剣を握っていられるのだ。

「なんだ？　いったい何が……」

兵士たちが不安そうに空を見上げた。不意に辺りが暗くなったのである。薄曇りだった空はいつの間にか、どす黒い雲で覆われている。音をたてて風が吹き抜ける。

敗走していた帝国兵たちが歓声を上げた。倒れ伏していた兵士までが起き上がって、拳を振り上げている。裁きが来た、と叫ぶ声が風に乗って聞こえてくる。

黒く垂れ込めた雲が大きく口を開けるのが見えた。そこから光の塊が地上めがけて落ちてくる。閃光と轟音。落下地点からは離れているのに、爆風で体が浮き上がるのがわかった。投げ出された地面も激しく揺れている。

急降下してきたドラゴンの背に飛び乗る。ヴェルドレたちの無事を確かめると、ドラゴンは雲の上めがけて上昇し始めた。

——いったい何が起きているのだ？

そうしている間にも、光の塊が次から次へと地上へ落ちていく。地面に激突した光は一瞬にして辺りを焼き尽くす。大地に大きく亀裂が入るのが見える。

——まだ見えぬか。

雲の中に入ったのか、全く見通しが利かなくなる。しかし、上空には何かの気配があった。何か、大きなものがあるのがわかる。ドラゴンの言った威圧感の源だろう。

——貝殻？

雲の切れ間から、遥か上空に丸く浮かぶものが見える。

——要塞とはあれのことか！　しかし、人間どもの力であのようなものが作れるはずがない。ましてて、あれほどの破壊力を持つ光が人の手によるものだとは、到底信じられなかった。地上の人間を一瞬で焼き尽くし、大地を引き裂く光。空中兵器やサイクロプスの比ではない。

——消えた？

貝殻に似た巨大な浮遊物は、かき消すようになくなっていた。同時に、辺りを覆っていた威圧感も消えた。閃光も、轟音も、何もかもが止んで、風の音だけが残った。

「お、恐ろしい……。私は悪い夢を見ているのか？」

地上は死神が舞い降りたかのような惨状だった。地面が大きく陥没しているのは、光が直撃した跡である。その周辺は骸ひとつ残っていない。一瞬にして熔かされ蒸発してしまったのだろう。少し離れたところでは、熔け残った鎧が地面にこびりついている。

空は今なお暗い。黄昏の色とも闇の色とも違う、赤黒い暗さである。その空の下、辛うじて生き残った者たちが苦痛と恐怖と絶望の声を上げていた。

「ま、まさか……最終封印が解かれた？」
ヴェルドレが震えながらつぶやく。頭に血が上るのを感じた。カイムは思わずヴェルドレを突き飛ばす。
いい加減なことを言うな！
「この惨状は天からの戒め。我ら人間への呪いだ」
みっともなく地面に這い蹲りながら、ヴェルドレが叫ぶ。
「そうだ、女神は天に捧げられたに違いない！」
剣の柄でヴェルドレを殴った。それでも怒りはおさまらない。まだ何か喚こうとしているヴェルドレを蹴り倒す。
「真実は天のみぞ知る。おぬしも見たであろう？」
ドラゴンの静かな声にようやくカイムは殴る手を止めた。
「あの巨大な貝殻。おそらくすべての鍵はそこにある」
帝国兵たちと戦ったときの違和感の正体が朧気ながらにわかった。彼らは囮だったのだ。連合軍をこの丘陵に集結させ、一挙に始末するための。釣り餌に使うなら雑魚で十分、まともな判断力も思考力もないほうが望ましい。
「ならば、女神は何処に？」
ヴェルドレがよろよろと立ち上がる。いくらか落ち着きを取り戻していたものの、まだ声は

震えていた。が、すぐにその声が悲鳴に変わった。
ヴェルドレの視線の先には帝国兵がいた。正確には帝国兵だったはずのものが。熔け残った鎧が次々に起き上がり、熔けて曲がった剣を構えて向かってくる。手足の長さが不揃いだからか、一様にその動きはぎこちない。
釣り餌とはいえ、あれだけの人数を連合軍もろとも葬り去るのは、帝国にとっても痛手なのではないかと疑問に思っていた。あの兵士たちは捨て石にされたわけではなかった。こうして死霊となって蘇り、再び戦力に加わったのだ。
——こやつら、我の炎が効かぬのか。小癪な。
ドラゴンが苛立ちの声を上げる。血染めの鎧のように跳ね返されはしないが、死霊兵士たちは炎の中を平然と歩いているのである。剣で攻撃するしかないということだ。
ぎくしゃくと近づいてくる死霊兵の胸に剣を突き立てる。が、兵士の動きは止まらない。考えてみれば、彼らの心臓はすでに止まっているのだ。当然、どこを斬っても痛みなど感じないだろう。急いで剣を引き抜き、首を斬り落とす。それでもまだ胴体だけがゆらゆらと歩いている。両の腕を落とし、脚を潰し、ようやく動きが止まった。ばらばらになった鎧が土に還っていく。
「なんという……。死人を蘇らせるなど、まさしく神への冒瀆ではないか」
ヴェルドレの言葉に耳を貸す余裕などなかった。死霊兵を一体倒すには、生きている帝国兵

の数倍手間がかかる。彼らには急所というものが存在しないのだ。ばらばらになるまで切り刻むか、原型をとどめないほど叩き潰すか、そのどちらかしか倒す方法がない。

それでも、ゴーレムがいたことは僥倖だった。ゴーレムの重量ならば、踏んでも叩いても一撃で死霊兵を葬り去ることができる。セエレの命じるままに、ゴーレムは兵士たちを叩き潰していった。

ようやく死霊の姿が消えたときには、誰もが疲れ切っていた。決戦の後での死闘である。とはいえ、ゆっくり休んでなどいられない。次の行き先はすでに決まっている。あの光の塊の源、空中要塞である。

しかし、カイムたちはすぐに空中要塞に向かうことはできなかった。

「いや……っ！　いやあああああっ！」

いきなりアリオーシュが悲鳴を上げたのである。アリオーシュは激しく頭を振り、耳を押さえて地面にうずくまった。

「やめて……やめて……やめて……」

やや遅れて聞こえてくる断末魔の悲鳴。遠く微かな声だったが、カイムの耳にも辛うじて届いた。

「この声はエルフの……」

「そんな！　海の神殿には十分すぎるほど十分な兵力を割いてある。森と砂漠の封印が破られ

た後、それを教訓に守りを固めたのだ。そこが破られるなど……」
帝国軍相手に「十分な兵力」などはあり得ない。そのことをたった今、思い知らされたばかりではないか。
何もかもが裏目に出てしまった。丘陵地帯に派遣した兵の半分でも海上へ回していれば、神殿は死守できたかもしれない。また、ここで失った兵の数もずっと少なくてすんだだろう。
「エルフは神殿の扉を開く鍵。扉が破られても、帝国軍が封印に達するまで多少の猶予はある」
間に合うか?
「なんとしてでも間に合わせねば」
とはいえ、帝国領土から海の神殿まではドラゴンの翼をもってしても遠い。ヴェルドレが口にした「多少の猶予」が気休めにすぎないことを、誰もが理解していた。

5

海の神殿の扉は、歴代のエルフ族の長がかけた魔法によって守られている。それはエルフの命を鍵として施錠するという魔法だった。扉を開くためには、その都度、エルフを犠牲にしなければならない。
また、鍵となるエルフは誰でもいいというわけではない。術者の魔力と同等以上の魔力がな

ければ開錠できないのである。術者であるエルフの長は、エルフ族の中で最も強い魔力を持つ。つまり、術を施した本人以外が扉を開けようと思えば、最低でも二人の犠牲が必要になる。場合によっては、何人もの命を奪わなければならない。

神殿の番人であるエルフたちが、敢えて神殿から遠く離れた場所に住んでいたのは、彼ら自身が神殿の鍵だったからである。

「エルフの里を襲ったのは、彼らの命で神殿の扉を開錠するためであろう。なぜ、もっと早くその可能性に気づかなんだか」

連れ去られたエルフたちは、魔法除けの防具を作るために殺されたのだと思っていた。現に、エルフの里が襲撃されて以来、血染めの鎧を纏った帝国兵を頻繁に見かけるようになった。

「確かに、ほとんどの者は血を搾り取る目的で殺されたに違いないが」

そうでなかった者もいた、ということだ。これ見よがしに血染めの鎧を戦場に送ったのも、エルフたちを全員殺したと思い込ませるためだったのだろうか。

カイムはちらりとアリオーシュに目をやった。同族の声を聞いて悲鳴を上げた彼女だったが、今は何事もなかったかのように水平線を眺めている。さっきの取り乱しようは同族が危険にさらされているからではなく、彼女自身の忌むべき記憶を引きずり出してしまったためかもしれない。

水平線の向こうから真っ黒な雲が現れた。いや、雲ではない。帝国軍の空中兵器が一カ所に

びっしりと固まっている。まるで骸にたかる蝿のようだ。

「け、結界が……消えている！」

空中兵器で隙間なく埋め尽くされているのは、海の神殿上空だった。エルフの里のように周辺には幾重にも結界が張り巡らされていたのだろう。結界、強力な魔法による扉、そして周囲を守る連合軍の大船団。本来ならば守りは万全だった。……相手が帝国軍でさえなければ。

ドラゴンが一気に加速し、炎を吐き散らす。ここまで敵が密集していると、かえって効率が良い。たちまち炎が空中兵器の大編隊に穴を穿つ。霰（あられ）か何かのように、ばらばらと焼け焦げた欠片が落ちていく。

――いったいやつらは何処から涌いてくるのだ？　丘陵地帯の大軍といい、この空中兵器部隊といい……。

半ば呆れた様子でドラゴンがつぶやく。いくら効率よく焼き払えるとはいえ、この数である。さすがにうんざりしたのだろう。

敵の残骸と灰を降らせながら、少しずつ神殿に近づいていく。それでもまだ、神殿の入り口が遠い。

――あれは。エルフの子供たちではありませんか。

神殿の入り口に折り重なるようにして子供たちが倒れているのが見える。扉を開く鍵に使われたのだ。大人は防具の材料に、搾り取れるほどの血を持たない小さな子供たちは鍵に利用さ

れた……。
——むごい。なんとむごいことを。
——小さき者を弱き存在と思うは皆同じ。ゆえに守るか、ゆえに捨てるか。その違いよ。
怒りに身を震わせるレオナールに対して、ドラゴンはにべもなく言い捨て、下降を始める。進路を阻む空中兵器はあらかた焼き払ったが、周辺の海上を帝国の武装船団が固めている。それらを沈めておかないことには神殿に近づけない。
ドラゴンが船団に向けて炎を吐こうとしたそのときだった。アリオーシュが海へと身を躍らせた。
——アリオーシュはいったい何を？
アリオーシュは敵の船団の間を縫うように泳ぎ、神殿へ向かっている。すぐに彼女の目的は知れた。倒れている子供たちの中に、まだ息のある者がいたのだ。
——まずは雑魚どもを始末せねばどうにもならぬ。
アリオーシュを巻き添えにしないように、一隻ずつ船を焼き払う。手間をかけさせおって、とドラゴンが苦り切ってつぶやいた。
——あれほど多数のエルフの子供たちが殺されていたのでは、アリオーシュの心が乱れても仕方はない……が。
ヴェルドレの困惑した声は、これから目にするであろう光景を予想してのものに違いなかっ

た。そして、誰もが同じことを考えていた。

神殿周辺の船を沈めると、真っ先にアリオーシュの許へ向かったのはレオナールだった。その間にもアリオーシュの笑い声と、狂気を孕んだつぶやきとが聞こえてくる。

——可愛い、可愛い子供たち。もう大丈夫。安心なさい。私が守る。可愛い、可愛い……。美味しい、美味しい子供たち。

「なんということを！」

レオナールがその場に立ちすくんだ。目には見えなくても、新しい血の匂いと肉を咀嚼する音とで何が行われているのか理解したのだろう。しかし、そんなレオナールの声など聞こえないのか、聞く気がないのか、アリオーシュは背を向けたまま座り込んでいる。その膝の上から細い手足が突き出している。さっきまで辛うじて息のあった子供だった。

「アリオーシュ、あなたに子供はいないのですか！」

レオナールの絶叫に、ようやくアリオーシュが振り返る。楽しげに笑う口許は血で真っ赤に染まっている。口の端を拭う手は、爪の中までが赤い。アリオーシュは再びレオナールに背を向け、抱きかかえている子供の胸に顔を埋めた。

「なぜです……。なぜ、あなたは……」

絶句するレオナールの前にサラマンダーとウンディーネが姿を現した。

「殺された」

「彼女の子供は」
「殺された」
「彼女が見ているその前で」
「殺された」
「帝国軍の手によって」
「殺された」
「頸を絞められへし折られて」
サラマンダーとウンディーネの言葉も耳に届かないのか、アリオーシュはひたすら骨を嚙み砕き、肉を食いちぎっている。
「この先子供を持つこともない」
「再び母になることもない」
「我々との契約に」
「子宮を使ってしまったから」
「よって永遠に続く狂気」
「よって永遠に続く孤独」
ヴェルドレが杖を振り上げ、口の中で小さく呪文を唱えた。血塗れの骸を抱えたまま、アリオーシュが仰向けに倒れる。

「急がなければ。神殿の中はエルフたちが様々な仕掛けを施している。まだ間に合う。間に合うと思いたい」
ヴェルドレが無惨に打ち壊された神殿の扉を見据えて言う。もっとも彼自身、その微かな希望がすでに絶望に変わりつつあることを感じているかのようだった。

エルフたちが施した仕掛けは、一定の効果を上げていた。回廊のあちこちにはその餌食となった帝国兵の骸が転がっていたし、反撃してくるわずかな帝国兵もどこか怯えた様子だった。しかし、夥しい数の犠牲者を残しながらも、仕掛けは確実に破られ、骸の山は奥へと続いている。いったい帝国軍はどれだけの兵士を投入したのだろう。加えて、空中兵器部隊と海上の船団。ヴェルドレの想定していた「十分すぎる兵力」を遥かに上回る数だったことは確かである。
ヴェルドレの術で狂気を抑え込まれたアリオーシュは、何事もなかったかのように帝国兵を叩き潰している。食べられないものばかり、とつまらなそうにつぶやきながら。
この先子供を持つこともない、という精霊たちの言葉を思い出す。アリオーシュがこの状態では、かえって幸いなのではないかと思う。今の彼女では、自分の産んだ子供でさえ食欲の対象にしかねない。何より、再び母となったところで、死んだ子供が帰ってくるわけではない。
一度失われたものは永遠に取り戻せはしないのだ。仮によく似たものを手に入れたとしても、

所詮、代用品にすぎない。失ったものの大切さ、かけがえのなさを改めて思い知らされるだけだろう。失ったものは失ったままにしておいたほうがいい。

ここに集う者たちは皆、失ったものを取り戻すことはできないと知っている。代わりの何かを求めることもない。契約者でなければ間違っても行動を共にしたくない連中ばかりだと思っていたが、カイムは自分と彼らとの間にある共通点に初めて気づいた。

「つまらない。つまらないわ」

アリオーシュが癇癪を起こして帝国兵を壁に叩きつけている。骸を踏みつけては、訳のわからない言葉を喚き散らす。共通点があったとしても、やはりこの連中とは仲間扱いされたくないとカイムは思い直した。

迷路のように入り組んだ回廊を進むにつれて、骸の数は相変わらずだが、反撃してくる帝国兵の数が次第に減っていった。奥に進めば進むほど、仕掛けも巧妙になっているらしい。

「封印まであと少し……。間に合うか」

ヴェルドレの声に焦りがにじむ。丘陵地帯からの距離を思えば、ここまで保ちこたえられているのは奇跡に近い。

「あれだ！　最後の扉が！」

回廊の終わりを告げる扉はすでに開け放たれていた。そして、扉をくぐり抜けたまさにその瞬間。カイムたちの目に飛び込んできたのは、三人の魔術師が結界をうち砕く光景だった。

「一足違いだったか……」

がっくりとその場に膝をつくヴェルドレを突き飛ばし、カイムは魔術師たちに斬りつける。呆気ないほどの容易さで、三人の魔術師は絶命した。頽れた体の下で、封印の欠片が飛び散り、淡い緑色に煌めいた。

「きれい。きれい。きれい」

アリオーシュが砕けた封印の欠片を両の手に掬い上げ、まき散らす。緑色の光が舞い散り、輝く。アリオーシュは何度も何度もそれを繰り返した。

――封印を作るも人間。壊すも人間。愚かな独り遊びをいつまで続ける？

アリオーシュはまだ封印の欠片を弄んでいる。魔術師の骸の上に緑色の欠片が降り積もっていく。

――兄さ……ん……。

カイムは目を見開いた。レオナールも驚愕の表情を浮かべている。間違いなくフリアエの声だった。

フリアエは無事なのか？

――断末魔の声ではなかった。最終封印はまだ無事であろう。

フリアエは……。　あの貝殻か。

帝国領土の遙か上空を飛行していた巨大な貝殻。丘陵地帯に集う連合軍を一瞬にして焼き尽

くし、地上を地獄に変えた、人の力を越えた空中要塞。フリアエがいるとすれば、あの中だ。
――気落ちしている暇などないぞ。残るは女神の命のみ。
すべてが後手に回り、ついに三つの封印を守ることは叶わなかった。しかし、今度は一足違いだったではすまされない。なんとしてでもフリアエを救い出さねば。
――ゆくぞ！



第四章
女神の涙で四つの祠は

1

夢を見ていたのだろうか。とてもなつかしい光景を見たような気がする。何ひとつ思い出せないけれども、泣き出したくなるような胸苦しさだけは覚えている。あのまま、ずっと夢を見続けていたかった。たとえそれが悪夢であったとしても。

二度と目を覚まさぬようにと祈りながら眠りに落ち、眠りから覚めれば未だ生き続けていることに絶望する。そんな朝を幾度繰り返してきたことだろう。女神と呼ばれ、この身を封印という名の呪いに縛りつけられたその日から。

眠りの中にいるとき以外は、絶え間なく続く痛み。オシルシと呼ばれるこの文字が、鋭い棘（とげ）となり、焼けつく刃（やいば）となる。なぜ、こんな苦痛に耐えなければならないのだろう。封印の女神と呼ばれる者だけが、なぜ？

「神は私たち人間が自らの手で世界を守ることをお望みなのよ」

よくあんなことが言えたものだと、フリアエは苦い思いを噛みしめる。あのときはまさか自分が女神と呼ばれるようになるとは思いもしなかったから、他人事にすぎなかったから、平気であんな言葉を口にできた。

私たち人間が？　違う。正確には女神だけが。他の人間は何もしなくていい。女神だけが苦

痛と孤独の中にいれば、それですむ。俗世の人々は時折、神殿や遙拝所に出向いて形ばかりの祈りを捧げていれば、何事もなく幸せに暮らしていける。

どうして、私だけが。よりにもよって、この私が。なぜ、他の人ではいけないの？

「この重い責務に耐えられる方だと思し召したからこそ、神はあなたをお選びになったのです」

封印の儀式を終えた後、神官長はそう言った。そして、女神の果たすべき役割について懇々と説いた。神官長の言葉を聞き流しながら、フリアエは全く別のことを考えていた。

神は本当に人間のことがわかっておいでなのかしら？　私なんかをお選びになったこと自体、大きな間違いのような気がするわ。私よりもずっと我慢強い人なんていくらでもいる。私よりも心が清らかな人だって。それとも、私は神に憎まれているの？　そうかもしれない。神はこの世で一番罪深い人間を選ぶのかもしれない……。

それほど神に憎まれているのなら、あのとき死んでしまえばよかった。どうして言えなかったのだろう。私を放っておいて。このまま死んでしまっても構わないから、と。

「フリアエ……許してくれ」

兄の声は震えていた。その気持ちが痛いほどわかってしまったから、何も言えなかった。もう二度と、目の前で家族に死なれたくない。きつく握りしめてくる手から、その思いが伝わってきた。だから。

思い出してはいけない。これ以上。フリアエはきつく目を閉じて、兄の面影を追い払う。思

い出せば余計につらい。過去を忘れ、現在から目を逸らす。未来に何の望みも持てない者はそうやって生きていくしかないのだ。何も考えない、何も感じない、何も……。それがこの五年間で学んだ生き方だった。

なのに、ここへ連れてこられてからというもの、余計なことばかり考えてしまう。昔のことばかり思い出してしまう。なぜだろう。

フリアエは目を開けた。ゆっくりと首を巡らす。奇妙な色の柱と、奇妙な形の寝台。毒々しいほど真っ赤な花と壊れた玩具が供えられ、時折、赤い目の兵士たちが祈りを捧げにやってくる。フリアエは、その寝台に寝かされていた。逃げ出すなど考えもしなかった。ふたつの封印が破られてからというもの、オシルシがもたらす苦痛はほとんど耐え難いものになっていた。時折体を起こすのがやっと、とても逃げられる状態ではなかったのだ。

この場所が、天使の教会の本拠地だということはわかっていた。帝国軍と呼んでいたものが、実は天使の教会の信者たちによる軍隊だということも、ここで知った。そして、この狂信的な集団を束ねる「司教」が、実は子供だということも。

不気味な子供だった。目の色が兵士たちと同じように赤いのはまだいい。不気味なのは声だった。可愛らしい子供の声だったかと思うと、突然、野太い男の声でしゃべり出したりするのだ。加えて、子供とは思えない言葉の数々。あの子供は「神に愛されている」そうだけれども、もっと邪悪な何かに愛されているような気がする。

それとも、神とはもともと邪悪なものなのだろうか。悪意に満ちた存在だからこそ、世界の秩序を守る者を苦しめようとするのか。

「天使を語ってはならない。
天使を描いてはならない。
天使を書いてはならない。
天使を彫ってはならない。
天使を歌ってはならない。
天使の名を呼んではならない」

もうすっかり覚えてしまった天使の教会の「教義」が聞こえてくる。野太い声に続いて、兵士たちが同じ言葉を唱和する。彼らは事あるごとに、この教義を詠唱していた。彼らにとってそれは、とても大切な意味を持つ文句らしいのである。

天使の教会の教義は、フリアエの知っている教典とは全く違う。そもそも彼らの言う「天使」そのものがフリアエの知る天使とはずいぶん異なっている。天使が神の遣いであることに変わりはないのだが、彼らの言う天使は「世界を無に帰す存在」らしい。天使の出現は世界の終わりを意味し、地上のすべての生命が失われるという。その恐ろしい役割ゆえに、語ってはならないとか描いてはならないと戒められているのだろう。

不意に全身が締めつけられた。息ができない。三つめの封印が破られたのだと知った。突き

刺すような痛みに加えて、体の内側がねじ切られていくような痛み、骨という骨を粉々に潰されていくかのような痛み。

助けて……。

思わず兄の名を呼んでしまう。決して呼んではならないと自分に言い聞かせてきたというのに。あの苦しかった封印の儀式の最中、ひたすら兄の名を呼び続けた。けれども、呼べばますますつらく苦しくなる。もう二度と兄の名を呼ぶまい、二度と思い出すまいと誓った。なのに。

何も考えてはいけない。私が感じている痛みは私のものじゃない。私は何も感じない。だめだった。いつものように心の中を空にしても、苦痛は少しも薄らいでくれない。今までとは違う。世界の秩序を支える力がすべてのしかかってきているのだ。

なぜ私が？　なぜ私だけが？　助けて。お願い。いっそ殺して！

赤い目の子供が覗き込んでくる。その顔は笑っていた。苦痛にのたうち回る者を見るのが楽しくてたまらないとでも言いたげに。三つめの封印が破られたのだ。天使の教会の目論見どおり。あとは最後の封印を残すのみ。

ただ、天使の教会の者たちは自らの手で女神を殺すことはできないらしい。それができるくらいなら、封印が破られるより先に殺されていただろう。彼らの目的は、封印がすべて解けた後に出現する再生の卵だと聞いた。最終封印を解くために、彼らは何かを待っている。自らの手で為し得ない何かを。

いつまで待てばいいの？　私は早く楽になりたいのに……。

「司教」

聞き慣れた声がした。足音。首だけを動かして声のほうを見る。イウヴァルトが赤い目の子供の前にひざまずいている。

「カイムは私にお任せを」

フリアエは、引きちぎられそうな痛みに逆らって身を起こした。イウヴァルトが何をしようとしているのかわかった。止めなければ。

イウヴァルトは立ち上がると、赤い目の子供に深く一礼した。声をかけるより先に視線がぶつかり合う。イウヴァルトが手を伸ばしてくる。

「俺は強い」

指先が頬に触れる。フリアエは動けなかった。

「俺は愛を知っている。天使への愛。君への愛」

イウヴァルトの赤い目が恐ろしい。その目がゆっくりと近づいてくる。

「君は……だれ」

不思議そうにイウヴァルトが首を傾げる。なぜ、そんなことを訊くのだろう？　まさか……。

暗い予感にフリアエは身を震わせる。

「イウヴァルト？」

呼びかけても応えはない。やはり。彼には目の前にいるのが誰なのか、全くわかっていないのだ。イウヴァルトが小さく頭を振って踵を返す。体を起こしていられなくなって、フリアエは再び寝台に横たわった。

ごめんなさい、とつぶやく。もう何度めになるかわからない、謝罪の言葉。兄とともに王宮を出ると決めたそのときから、ずっと心の中で謝り続けてきた。イウヴァルトに対する気持ちが、単なる幼なじみへの好意でしかないと気づいたそのときから。

初恋だと思っていたのに。いいえ、違う。あれは恋なんかじゃなかった。私の愚かな企み。隣国から嫁いでいらしたお母さまのように、いつか私も遠い国へ嫁ぐのかもしれないと思うと、悲しかった。イウヴァルトと結婚すれば、ずっとこの国にいられる。イウヴァルトとカイム兄さまと私、三人でずっと。幼い日々はいつか去っていくものなのに、それを認めたくなかった。

王宮を去ると告げたとき、イウヴァルトの顔をまともに見られなかった。嘘をついていたから。たった一人の家族、そんな言葉でイウヴァルトを、自分自身をも騙した。たった一人の家族だからついていく……いいえ、そうじゃない。家族なんかじゃないほうがよかった。兄妹でないほうがよかった。もしも兄妹でなければ、私は……。

なんて罪深いこと！　だから、神は罰を下したのだろうか。女神の器に値しない者にオシルシを与え、平穏な暮らしを奪った。それでも自らの罪を悔いることなく、ひたすら運命を呪い、

恨み続ける愚か者に、神は呆れ果て、さらなる罰を与えた。忘れようと努めたことを思い出さずにいられないように、残酷な再会を用意した。

この苦痛も罰なのだろうか。まだ足りない、おまえの罪はそれほどに重いのだと、そう神は告げているのだろうか。

でも、なぜ私だけが？　私だけじゃないのに。罪深い人間なんて、いくらでもいる。その人たちは何事もなく暮らしていけるのに、私一人が罰せられなければならないの？　ひどい。そんなの許せない。嫌いよ。みんな大嫌い。封印なんて知らない。世界なんて知らない。何もかも壊れてしまえばいい。みんな……みんな死んでしまえばいい。

心の奥底からわき上がる黒い感情に、フリアエは戦いた。抑えても抑えても、しつこく頭をもたげてくる憎悪。怨恨。自分自身の心でありながら、耐え難いほど醜い。

いや……。助けて。兄さん……私を助けて。

自らに課した戒めを破り、フリアエはひたすら兄を呼び続けた。

2

丘陵地帯はまだ分厚い雲に覆われたままだった。闇色の空の下、緑の草原だったはずの大地は見る影もなく焼け爛れている。せめて空が晴れていれば、ここまで殺伐とした印象は受けな

かったかもしれない。

「世界の終わりとは、こんな光景なのかもしれぬな」

ヴェルドレが暗澹とした面持ちでつぶやく。その間にも、助けを求めるフリアエの声が切れ切れに聞こえてくる。弱々しい声ではあったが、海の神殿よりも明らかに近い。やはり空中要塞に囚われているのだろう。

この上か、と重く垂れ込めた雲を見上げたときだった。

「この匂いは……。やつがいる！」

カイムにもはっきりとわかった。この雲の真上にブラックドラゴンが、イウヴァルトがいる。空中要塞への侵入を阻むつもりなのか、或いは、この前の決着をつけようと言うのか。

──ドラゴン族でありながら赤い目に甘んじた愚か者よ。恥を知れ！

ドラゴンが怒りの声を上げる。イウヴァルトの一件で、帝国兵たちが生まれながらに赤い目をしているわけではないことがわかった。帝国を束ねる者にからめ取られた証があの目の色だったのだ。

あのブラックドラゴンが俺の両親を殺したのか？　それとも、他にも帝国の軍門に下ったブラックドラゴンがいるのか？

「我らが眷属で、闇の色を纏う者は極めて稀。まして人間どもの前に姿を現すとなると……」

ドラゴンは曖昧に言葉を濁したが、おそらく同一のものだと考えて良いということだろう。

父と母を殺したブラックドラゴンが、よりにもよってイウヴァルトの契約相手だとは。なんと皮肉なことか。

いや、かえってよかったのかもしれない。これでイウヴァルトに要らぬ情けをかけずにすむ。かつての友を心の底から憎むことができる。

「カイム、私も共に……」

ドラゴンが翼を広げるのを見て同行しようとするレオナールを、カイムは手を挙げて押し止めた。

来るな。決着は俺がつける。

しかし、と口ごもるレオナールを無視するようにドラゴンが飛び立つ。この辺りの経緯については、レオナールよりもドラゴンのほうがよく知っている。これだけは何も言わなくてもわかってもらえるらしい。黒雲を突き破り、上空へと向かう。

──カイムよ、おまえに今の俺を倒すことができるかな。

嘲笑(ちょうしょう)とともにイウヴァルトの声が降ってくる。ようやく雲が途切れ始める。開けた視界の片隅に、それはいた。右に左にと黒い影が揺れる。速い。

──黒き竜を駆りしイウヴァルト、侮れぬぞ。

ドラゴンがうなった。炎が易々(やすやす)とかわされる。黒い疾風だと、あのときも思った。間違いない。あのブラックドラゴンだ。これでイウヴァルトを憎むことができる、敵として思う存分戦

える、そう思っていたが、未だ胸の内にわだかまるものがある。
よりにもよって、なぜブラックドラゴンと契約した？　祖国を滅ぼす元凶となった敵じゃないか。国を失ったのは、おまえも同じことだろう。その憎むべき相手と……なぜ？
――ならば、おまえの契約相手は？　親の仇と同種族だろうが。目的のためなら手を組む相手を選ばないのはお互い様だ。
ブラックドラゴンが青白い炎を吐いてくる。赤い翼が翻る。急反転しながらドラゴンが炎を返す。
――俺はおまえが憎い。おまえを倒すためなら、誰とだって手を組むさ。
なぜ……。なぜ、そこまで俺を憎む？
――決まってるだろう。邪魔なんだよ。おまえはいつも俺の邪魔をする。
いつ、俺が邪魔をした？
――いつも俺のものを奪おうとする。フリアエが出ていくのを俺がどんな気持ちで見送ったか、わかるか？
奪ってなどいない。何ひとつ。俺は、何も手に入れていない。何ひとつ、俺のものにはならなかった。ほんの一時でさえ手にすることはできなかった。奪おうとしていたのは、おまえのほうだ！　俺は……。
――うるさい！　いつもおまえは俺を見下していた。俺を見くびっていた。何をやっても俺に

負けることはないと優越感に浸っていた。さぞかし気分が良かっただろうよ。俺は……最低最悪の気分だった。何をやっても敵わない。何をやっても負ける。結果の見えている勝負。おまえはそんな思いを味わったことなんてないだろう？

青白い光が目の前で炸裂した。遅れて衝撃がやってくる。

——フリアエ！　見ているか。おまえの兄はここに眠るぞ！

イウヴァルトの笑い声が響いてくる。しかし、ドラゴンはすぐに体勢を立て直し、ブラックドラゴンめがけて突っ込んでいく。

——所詮、貴様の炎などそんなものだ。身の程を知れ！

ドラゴンが吼える。赤い炎が黒い翼に襲いかかる。

——俺は力を手に入れた！　だからフリアエも手に入れる！　俺は……。

イウヴァルトが絶叫する。が、炎が片翼に直撃したためか、ブラックドラゴンの動きがわずかに鈍る。赤い炎が続けざまに漆黒の影を撃つ。

——俺は……俺は……。俺は……誰だ？

不意にイウヴァルトの様子がおかしくなった。尋常とは思えぬ笑い声がけたたましく響く。

——殺す……殺す殺す殺す！

ドラゴンが容赦なく炎を撃ち込む。ブラックドラゴンには、もはやそれを回避するだけの速さはない。

——死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね！

深手を負えば負うほど、イウヴァルトの狂気の色合いは強まっていく。笑い声と絶叫とが辺りに木霊(こだま)する。

次の一撃で終わりだ。カイムは来るべき時を予感して、かつての友と仇敵(きゅうてき)とを見据える。が、その瞬間はやってこなかった。ドラゴンは止(とど)めを刺さなかった。ブラックドラゴンの横をすり抜けるようにして、急上昇し、空中要塞へと飛んだ。

——これで良いのであろう？

俺は何も……。

カイムはその先を続けるのをやめた。何も言わなかったが、ほんの一瞬、イウヴァルトに対して憐憫(れんびん)の情を覚えたのは事実なのだ。ドラゴンの要らぬお節介に文句を言う資格などない。

——全く人間どもは。いつも要らぬ手間ばかりかけさせおる。

そういえば、以前にも似たようなことがあった。ドラゴンなりに気を利かせたつもりなのだろうと苦笑したことが。

——今ぞ！

いつの間にか空中要塞が目前に迫っていた。周囲を渦巻く気流に逆らって、ドラゴンは要塞の開口部へと突入した。

3

侵入は容易ではなかった。要塞の開口部には、棍棒に植えられた棘のようにぎっしりと砲台が並んでいたのである。

降り注ぐ砲弾をくぐり抜け、ドラゴンは炎を吐き、ひたすら飛んでいた。

――この程度の砲撃で、我が墜ちるとでも？

笑止なことをと言いながら、ドラゴンはまた炎を吐く。砲台は思いのほか頑丈で、人間を焼き払うようなわけにはいかない。それでもドラゴンは、少しずつ砲台を残骸に変え、じりじりと開口部を上昇していく。

こうして間近に見ると、要塞は恐ろしく巨大だった。こんなものがどうやって空に浮いていられるのか、不思議に思う。

――人間どもの力だけで、これほどのものが造れるはずがない。天使の教会とはいったい何なのだ？

カイムも同感だった。天使の教会の背後にいるのは何なのだろう。少なくとも、ただの人間ではない。広大な丘陵地帯を一瞬にして死の土地に変えてしまうような兵器を、ただの人間が造れるはずがない。とてつもなく邪悪で、とてつもなく強大な何者か。それが天使の教会を陰

で操っている。おそらく。
ドラゴンが一際大きな炎を吐いた。最後の砲台が熔けて崩れる。ようやく開口部を突破したのだ。
──ここから先は何の手助けもしてやれぬ。おぬしが、やるのだ。
ドラゴンの背から飛び降り、剣を抜く。通路の先の先まで隙間なく帝国兵が埋め尽くしているのが見える。
──行け！　その手で己の妹を連れ帰れ！
ああ。わかっている。必ず。
帝国兵の一団が向かってくる。剣で薙ぎ払いながら、気づく。丘陵地帯で見た帝国兵に通じる、「何か」に。どこか不自然で、違和感のある動き。ただ、丘陵地帯の兵士たちよりもずっと強い。
違和感の正体はすぐにわかった。怯んだり、恐れたりといった感情の動きが全く感じられないのだ。歴戦の勇士であっても、腕を切り落とされて平然としているなどまずあり得ない。普通の兵士であれば、目の前で仲間の首が飛ぶのを見た瞬間に怯み、逃げ腰になる。
しかし、ここに群れ集う兵士たちには怯えも恐れもない。腕を切り落とされても全く頓着しない。仲間の首が足許に転がっても、蹴り飛ばして突進してくる。これだけ激しく血飛沫が上がっているのに、どこからも悲鳴が聞こえない。

――さすがのおぬしも、これほど多くの命を奪うのは心苦しいか。

カイムの戸惑いが伝わったのか、ドラゴンがからかい気味に声をかけてくる。

心苦しいわけじゃない。何か割り切れないものを感じるだけだ。この連中は、本当に人間なのか？

――こやつらは、もはや人間ではない。意思も感情も抜き取られておるようだ。これではただの物にすぎぬ。

斬っても斬っても、帝国兵はどこからともなく涌いてくる。まるで灌木を薙ぎ払って歩いているようなものだ。確かに「ただの物」だった。それなりに強いのだが、手応えというものがない。敵の悲鳴も怯えた顔もなく、ただ同じ作業を延々と繰り返すのみ。初めて戦いをつまらなく感じた。これでは身の内を灼く怒りを鎮めるどころか、虚しさだけが募る。

しかし。ただ同じ作業を延々と繰り返しているのは、いつものことではないのか。戦場を駆け巡り、ひたすら敵を殺す。どこに違いがあるというのだろう。

それ以上考えると、剣を振る手が止まってしまいそうな気がした。余計な考えを追い払い、カイムは作業に没頭した。

通路を突き当たりまで進み、階段を昇る。昇りきってしまうと、また通路が続いている。階下と同じく、物と化した帝国兵の群れ。半ばうんざりしながら斬り込んでいく。

――助けて、兄さん……。

またフリアエの声がした。これほど近くまで来ているのに、今まで聞いたどの声よりもずっと弱々しい。急がなければ。虚しいだの、うんざりするだのと考えている場合ではなかった。剣を振り回して走る。

どこだ？　フリアエ、どこにいる？

階段が見えてくる。フリアエの気配を階上に感じた。そこか！　駆け上がろうとしたときだった。いきなり体が弾き飛ばされる。立ち上がり、今度は手だけを階段のほうへ突き出してみる。手のひらに押し返す力を感じた。結界が張られているのだ。ということは間違いない。この上には天使の教会にとって重要なものがある。つまり、フリアエが囚われている場所、というわけだ。

どこか近くに術者がいるはずだ。結界を自在に操る術者が。これだけの数の兵士を抱える要塞である。階段を完全に塞いでしまうはずがない。

通路に面した部屋の扉を蹴り開け、中に突入する。一見、無人の部屋だった。が、すぐに室内の空気が揺らめき、魔術師と死霊が現れる。

こいつが術者か？

追いすがる死霊を避け、まず魔術師から倒しにかかる。先に魔術師を倒しておかないと、例の火の玉で攻撃されるだろう。次々に死霊を召喚しようとしている魔術師に向かって、剣を振り下ろす。魔術師が断末魔の悲鳴を上げると、死霊たちも耳を覆いたくなるような声を上げて

消えていった。
魔術師が死んだことで術が切れたのか、壁だと思っていた場所に通路が現れた。剣を構えながら慎重に進む。短い通路の突き当たりに、大きな箱が見える。何やら箱を操作している兵士が四人。即座に斬り捨てる。ここの兵士も意思や感情を抜き取られているらしく、全く抵抗することなく息絶えた。
再び階段へと向かう。結界はやや薄くなったように感じられたが、やはり通ろうとすると弾き返される。他にも術者がいて、さっきと同じような箱があるということだ。それを片づけない限り、ここの結界は解けないのだろう。
通路を挟んで反対側の扉を開ける。当たり、だった。さっきの部屋と同じように魔術師と死霊が現れる。ただ、今度は魔術師が二人だった。白く光りながら伸びてくる死霊の手をかいくぐり、魔術師だけを狙う。
一人めを倒したと思った瞬間、火の玉が背中を直撃した。体が前のめりに浮き上がり、床に叩きつけられる。すぐには起き上がれなかった。死霊の手がカイムに触れる。激烈な痛みが走った。別の死霊が手を伸ばしてくる。転がって避ける。
起き上がろうとしたところを再び火の玉がかすめる。左腕に衝撃が走った。そして、死霊の手。まずい。このままでは殺（や）られる。
左手で上体を支え、闇雲（やみくも）に剣を振り回す。狙いをつける余裕などない。手応えがあった。跳

ね起き、また剣を振り回す。死霊が一体消える。魔術師に向かって跳ぶ。剣先がようやく獲物を捉(とら)えた。薙ぐ。やっとの思いで、二人めの魔術師を倒した。

肩で息をしていると、やはり部屋の奥に通路が現れる。さっきと同じように大きな箱とそれを操作する四人の兵士が見える。ここからは造作もなかった。無抵抗の兵士を斬り殺し、カイムは部屋を後にした。

大きな箱は全部で四個あった。ひとつひとつが結界を発生させる装置になっていたのだろう。それらを操作していた兵士を倒してしまうと、ようやく階段の結界は消滅した。

階段を駆け上がる。今度の通路は短かった。その短い通路の先、赤い扉が見える。扉の向こうにフリアエがいる。気配でわかった。扉めがけてカイムは走った。幸い、結界の類(たぐい)はない。あの扉の向こうだ。早く。

赤い扉を押し開けると、広間だった。やたらと天井が高く、奥行きがある。何かの儀式の最中なのか、帝国兵が整列している。ここからでは見えないが、広間の最奥にフリアエの気配を感じた。

妙だ。なぜ、帝国兵は誰も振り返ろうとしない？

剣を振り上げて居並ぶ帝国兵に向かって斬りつける。が、帝国兵たちは誰一人として動こうとしない。反撃するでもなく、ただ斬られるに任せている。薄気味悪く感じながらも、剣で帝国兵をかき分け、広間の前方へと向かう。

最前列の兵士を突き飛ばす。斜めになった柱と、花や玩具を載せた寝台。花は毒々しいほど赤く、玩具はどれも壊れ、或いは短剣が突き立ててある。その花や玩具とともにフリアエが横たわっていた。

「兄さん……」

驚いた顔でフリアエが体を起こす。と、その体がふわりと浮き上がった。見えない手で運ばれているかのように空中を移動し、斜めになった柱に吸い寄せられていく。

「天使は笑う?」

柱の陰から赤い目の子供が顔を出す。どこかで会ったような気がして、カイムはその顔をじっと見つめる。思い出せない。その口許が笑った。子供はカイムを見、そしてフリアエを見る。

「私は女なのに。普通の女なのに」

今度はフリアエだけを見つめながら、子供は言葉を紡ぐ。

「どうして私だけ。どうしてこんな……ちぇっ。ちぇっ。クソが!」

やめて、とフリアエがか細い声で訴える。

「封印が何だってんだよ。私を助けろよ。役に立たない男どもめ」

子供は声をたてて笑う。

「わたし、あなたの心が読めるの」

「違うわ。私、そんなこと思ってない」

「憎い。憎いよ。クソ野郎！　こんな世界滅びればいい」
「違う！」
必死で頭を振る様子から、子供の言葉がすべて嘘というわけではないとわかった。当然だろう。世界中でたった一人の犠牲者。同じ運命を背負う者が他にもいれば、いくらかなりとも慰めになるかもしれないが、封印の女神は常にただ一人。己の運命を恨み、自分以外のすべてを憎む。それがごく普通の人間なのだ。誰がそれを責められるだろう。
「助けて。お兄ちゃん。お願い。私を助けて」
子供がちらりとカイムに視線を移す。赤い目が邪悪な光を帯びる。
「汚いの。私、汚いの。女神なんかじゃない。あきらめてるだけ」
「やめて！」
「お兄ちゃん、抱きしめて。私を抱きしめて。お願い。お兄ちゃん、私に……」
「いや！」
フリアエの絶叫が広間を震わせる。カイムはただ目を見開く。フリアエの泣き出しそうな顔。その視線がカイムを捉える。すがりつくような眼差しにカイムはうろたえた。
だめだ。見るな！　俺は……。
とっさに目を逸らす。このまま視線を合わせていたら、心の内を見透かされる。心の奥深く、決して誰の目にも触れぬよう、封じ込めてきたものが引きずり出されてしまう。自分自身から

も隠し続けてきたものが。
見てはならない。見られてはならない。気づいてはならない。気づかれてはならない。そう自分に言い聞かせてきた。フリアエの気持ちも、とっくの昔に気づいていた。何もかも知っていた。ただ知らないふりをしていただけだ。
欺瞞？　逃避？　何とでも言うがいい。それ以外に何ができる？　すべてをなかったことにして忘れてしまう以外に何ができる？　互いに気づけば、より不幸になる。踏み出せば、地獄に堕ちる。妹だ、妹なんだ、そう呪文のように繰り返して心を殺す以外に何が……。
何か不吉な音を聞いた気がして、カイムは顔を上げる。玩具に突き刺さっていた短剣が引き抜かれた音だった。フリアエの手が短剣を逆手に握る。その目には、はっきりと絶望の色が見てとれる。拒絶された、或いは蔑まれたと誤解しているのだ。
やめろ！　そうじゃない！
間に合わなかった。カイムが止めるよりも早く、短剣はフリアエの胸を貫いた。フリアエの体がゆっくりと傾き、柱に張りつく。再び視線が絡み合う。
「私を……見ないで」
拒むようにフリアエが目を閉じ、顔を背ける。細い肩が微かに震え、やがて動かなくなった。
違う！　違うんだ！
その叫びを伝えることはできなかった。せめて誤解だったと伝えたかった。拒絶したわけで

も、蔑んだわけでもないのだと。ただ、己の本心を知られてしまうのが怖かっただけなのだと。しかし、それを知ることなく、絶望を胸に抱いたままフリアエは死んだ。

フリアエが短剣を手にしたとき、その言葉を口にしていたら。フリアエは思いとどまったかもしれない。せめて息のあるうちに告げていれば。魂だけは救われたかもしれない。契約の代償をこれほど重く感じたことはなかった。

本人にとって最も大切な機能を失う。こういうことだったのか。

言葉などいらない、失っても構わない、そう思っていたが違った。言ってはならない言葉、封じ込めなければならない言葉が多すぎて、気づかなかった。己の内で行き場を無くしていた、あまりに多くの言葉に。契約によってその言葉は外に出る術を失い、そして今、受けとめてくれる相手を永遠に失ったのだ。

「天使は笑う?」

赤い目の子供がくすくす笑っている。口の端を吊り上げ、瞳に嘲りの色を湛え、声をたてて笑っている。

こいつが……。こいつがイウヴァルトを狂気に走らせ、フリアエを死に追いやった。

頭に血が上るのを感じた。怒りが体の内で膨れ上がる。こいつが! 皮膚を突き破って噴き出すのではないかと思うほどの憎しみが全身を駆け巡った。カイムは剣を握りしめる。

——馬鹿者! 激情に走るな!

ドラゴンの声を無視して剣を振り上げる。

——冷静になれ！　卵が生まれるのだ。次の手を打たねば、世界が本当に終わるぞ。一刻も早く外に出てこい！

卵？　世界が終わる？　俺の知ったことじゃない。

——カイム！　おぬしの妹が耐えて守ってきたことがすべて無駄になるのだぞ！　ここでおぬしが放り出してどうする。

放り出してどうする、という言葉がカイムの記憶を揺さぶった。荒廃した国土、無言で歩く人々が脳裏に蘇る。あのとき、自分に課せられたものを放り出したことを悔いた。俺は何をしていた、もっと他にやりようがあったはずだ、と。今ここで、怒りに我を忘れれば、また同じ過ちを繰り返すことになる。

すまない。フリアエ。

生きている間は何もしてやれなかった。守ることも、助けることも。……愛することも。ならばせめて、絶望の年月と引き替えに守ってきた世界を無為に終わらせることだけはするまい。

白い死に顔を瞼に焼きつけ、カイムは踵を返す。ドラゴンの呼ぶ声に応えながら、ひたすら走り続けた。

4

苦い屈辱が胸の内を灼いていた。ただ、なぜこれほど腹が立つのか、悔しくてたまらないのかがよくわからない。

倒すべき敵を倒せなかったからか？　空中要塞への敵の侵入を許してしまったからか？　それとも、敵が止めを刺さずに飛び去っていったからか？　わからない。思い出せない。無理に思い出そうとすると、頭の中がますます混乱してくる。

そういえば、自分はいったい誰と戦っていたのだろう？　たとえ刺し違えてもこいつだけは殺さなければならないと思っていたはずなのに、その相手が思い出せない。ブラックドラゴンの翼を射抜き、振り切るように飛び去っていった……あれは誰だったのだろうか。

傷ついたブラックドラゴンで空中要塞に戻るのは、予想以上に骨が折れた。何度も突風に煽(あお)られ、気流に巻かれた。ただ、なんとしてでも戻らなければならないと思った。急がなければならないことはわかっていた。

なぜ？　何のために？

考えようとすると、頭の芯が鈍く痛んだ。イウヴァルトは額に手をあてたまま、長い通路を抜け、いくつもの扉をくぐった。時折、血糊(ちのり)で足が滑った。そこかしこに骸が転がっている。

何があったのだろう。司教様はご無事だろうか。

司教？　誰のことだ？

思い出そうとすると、意識がふっと遠くなる。傷を負ったせいだろうか。ブラックドラゴンの傷は思いのほか深いようだった。契約相手が傷つけば、自分もまた……契約相手？

なぜ？　何のために？

力が欲しいと強く願ったような覚えがある。俺に力があればと、何度も繰り返し思ったような気がする。

なぜ？　何のために？

ひどく耳鳴りがした。通路がぐるぐると回っている。気分が悪い。歩くのがつらくてたまらない。この場で座り込んでしまいたくなる。しっかりしろ、と自分に言い聞かせ、重い足を引きずる。こんなことではまた守ってやれない。俺はフリ……。

頭が割れるように痛んだ。まるで脳天に杭を打ち込まれているようだ。もう少しで思い出せそうなのに。何かとても大切なことを。深い霧の向こうに何かがある。わかっているのに、思い出せない。

早く戻らなければ。いやな予感がする。

何かが背後から追い立ててくるような気がした。イウヴァルトは走った。喉元が激しく震える。叫んでいるのか、悲鳴をあげているのか、自分でもわからない。何度もつまずき、転びな

がら、それでも走った。
最後の通路を抜け、祭壇の間へと駆け込む。居並ぶ兵士たちをかき分けて進む。大切なものが、そこにある。早く……。
天使の教会の司教が踊っていた。赤い花びらをばらまきながら、柱の周りを回っている。斜めに傾いた柱に誰かが貼りついているのが見える。黒い服を纏った……。
「フリアエ？」
耳鳴りが止まった。意識の表面に被せられていた何かが剥がれ落ちる。頭の中に立ちこめていた霧が晴れていく。
俺はなぜ、ここにいる？
疑問の答えを捜そうとして周囲を見回したイウヴァルトは瞠目した。フリアエの胸から剣の柄が生えている。足許にまき散らされた赤い花びらと、赤い……血溜まり。目を閉じたままの、血の気のない顔。
踊り続けていた司教の肩を掴む。思い出した。女神の任を降りれば生き長らえることができると教えられ、新しい世界を作ればフリアエと幸せに暮らしていけるのだと言われた。そのためには強大な力が必要である、と。
「フリアエに何をした！」
司教は、赤い目の子供は、にっこりと笑った。

「封印は解けた。もう要らない」
もう要らない？　だから殺したのか！
肩を掴む手が震えた。怒りの言葉をぶつけようとしたときだった。赤い目が強い光を放った。
何かが弾ける音を聞いた。目に見えない力に吹き飛ばされ、イウヴァルトは床に転がった。
「天使は笑う」
赤い目の子供は花びらをばらまきながら、踊り続けている。イウヴァルトの目の前にも花びらが舞い落ちる。
「フリアエ……」
床に手をついて体を起こす。が、とても立ち上がれそうになかった。
「俺は……君の幸せを思って……」
本当にそうか？　それだけか？　フリアエは何を望んでいた？　フリアエは何を願っていた？
「違う！」
いやがるフリアエをここに連れてきたのは俺だ。カイムから引き離し、ここへ連れてくれば、きっと何もかもうまくいくと信じた。フリアエを守るために力が欲しかった。力を得るために歌を捨てた。本当にフリアエはそれを望んでいたのか。
「違う。俺の幸せのため……。俺が、君を……殺した？」
もう一度歌って、とねだるフリアエの顔が浮かんだ。まだ幼さの残る笑顔。もっと歌って、

イウヴァルト。その歌、好きよ。ねえ、もう一度。あなたの歌に私は癒(いや)されます。フリアエの言葉が次々に蘇る。

「俺は、君に歌すら贈れなかった」

歌と引き替えに得た力がもたらしたもの。それがこの結末なのか。

床に両手をついたまま、イウヴァルトは動けなかった。嗚咽(おえつ)を漏らすまいと必死で歯を食いしばる。

「さあ、最後の審判の時です。あの方はすべてを見ているのです」

赤い目の子供が兵士たちに向かって演説を始めている。イウヴァルトは白けた思いでそれを聞き流す。

最後の審判？　馬鹿馬鹿しい。フリアエのいない世界に何の意味がある？　フリアエのいない世界など滅びてしまえばいい。

「私たちは新しく生まれ変わるのです。再生の時がやってきたのです。今こそ、再生の卵のもとへ！　帝都へ！」

帝都へ、と兵士たちが唱和する。やがて、赤い目の子供が兵士たちを引き連れて出ていき、祭壇の間には静寂だけが残った。

「フリアエ……」

ようやくイウヴァルトは立ち上がった。冷たくなったフリアエに手を伸ばす。

「もう邪魔はいない」

胸に刺さったままの短剣を引き抜き、抱きしめる。誰にも渡さない。どこへも行かせない。たとえこの目が二度と開くことはないとしても。

いや、できることならもう一度、あの笑顔を見せて欲しかった。女神の城で再会して以来、フリアエはとうとう一度も笑わなかった。昔のような笑顔を見たかった。たとえつかの間であってもいい、もう一度だけ君に……。

はっとしてイウヴァルトは顔を上げる。再生の卵は奇跡を起こすと、あの子供は言っていなかったか。卵の中に入れば、新しく生まれ変われるのだと。命ある者にしか奇跡はもたらされないのだろうか。そんなことはないはずだ。命があろうとなかろうと、等しく神の奇跡はもたらされるに違いない。だとすれば。

イウヴァルトはフリアエの亡骸(なきがら)を抱え上げた。帝都へ、再生の卵のもとへ行こう。奇跡はきっと起こる。俺がこの手でフリアエを蘇らせてみせる。

「女神の復活を！」

冷たい唇にくちづけると、イウヴァルトは確かな足取りで歩き始めた。


第五章
紅き雷の塔より
ドラゴンが堕ちゆく先は

1

帝国領内はどこも同じ色の雲がかかっていた。あの丘陵地帯で見た黒雲である。空は青さを忘れ、大地は緑を忘れ、すべてが闇の色に包まれていた。帝都へ近づくにつれて、その闇が濃さを増していくように思われるのは気のせいだろうか。

「おぬしの真の復讐は、これから始まるのだな」

復讐。いつもいつも己の内にあった馴染みの言葉が、これほどよそよそしく響くのはなぜだろう。

「しかし、今は己の悲しみに浸っているときではない。わかるな」

わかるさ。為すべきことを放り出した後にやってくる悔恨の情を、俺は覚えている。あのやりきれなさを覚えている。

それでも、後悔というものはしつこくやってくる。何をやっても、どう転んでも。今まで後悔せずにすんだことなどひとつもないのではないか。

「人間とは全く以て厄介なものよ」

言葉こそいつもと変わらないが、そこに辛辣な響きはなかった。憐れみとも違う、何か今までとは違う口調だった。ドラゴンは何を思っているのかと、カイムはふと興味を覚える。が、

その先を推し量ることはできなかった。

「あれは！」

ヴェルドレの指さす方向にあったのは、椅子だった。椅子が空を飛んでいる。そして、そこに座っているのは、あの赤い目の子供だった。

「あれが天使の教会の司教とは」

やがて椅子はカイムたちを易々と追い抜くと、帝都の方角へと飛び去った。

「あの小娘が向かう先は、おそらく再生の卵であろう」

しかし、帝都へ向かっていたのは、赤い目の子供だけではなかった。その後を追うようにして、黒い影が飛んでくる。

「あやつもか！」

ブラックドラゴンが疾風の如き勢いで飛んでいた。その背に乗る者を見たカイムは瞠目する。フリアエの亡骸を抱いたイウヴァルト。その目的は一目瞭然だった。イウヴァルトは再生の卵を使ってフリアエを蘇らせるつもりなのだ。

「追うぞ」

ドラゴンが翼を鳴らす。ブラックドラゴンは速い。本気で逃げたならば、振り切られていたかもしれない。しかし、ブラックドラゴンは空中で急反転した。

――また俺の邪魔をするのか！

青白い炎が続けざまに襲いかかってくる。それをかわして、ドラゴンが静かに声を発した。

——おぬし、何をするつもりだ？

——決まってるだろう。フリアエを生き返らせる。再生の卵で奇跡を起こすんだ。

イウヴァルトの声がどこかおかしい。やはり狂気から逃れることはできなかったかと、カイムは暗澹(あんたん)たる気持ちになる。

——起こらぬからこそ奇跡と呼ぶ。無駄ぞ。

——う、嘘だ。俺は信じない！　俺は信じないぞ！

エルフの里が全滅したと聞かされたときのイウヴァルトを思い出す。あれからまだいくらも経っていないというのに、この変わり様はどうしたことか。イウヴァルトだけではない。自分自身も、自分を取り巻く人々も、そして世界も。

——おぬし、世界のこれからについては考えぬのか。

ドラゴンの問いかけが青白い炎で返ってくる。信じない、信じないとイウヴァルトが憑(つ)かれたように繰り返す。

——俺はフリアエさえいればいい。フリアエのいない世界など、どうでもいい。

——溺(おぼ)れゆく者は海の深さに気を取られ、広さを知らぬ……。

ドラゴンが何を言いたいのか、カイムにはわかっていた。今度こそイウヴァルトに止(とど)めを刺さねばならない。

──おまえだって、フリアエを生き返らせたいだろう？　違うのか？　目の前に道がありながら、背を向けるのか？

フリアエにもう一度会いたい。同じ思いはカイムの内にもある。だが、再生の卵がその願いを叶えてくれるものなのか、今ひとつ信じることができないのだ。以前、ドラゴンは再生の卵のことを「人間が都合よくねじ曲げた神話」だと言った。その言葉がずっと引っかかっていた。ドラゴンは確かに辛辣な言葉ばかり口にするが、嘘をついたことはない。

──そうか。おまえのフリアエへの愛など、所詮その程度なんだな。じゃあ、僕の勝ちだ。

イウヴァルトがけたたましく笑う。

──僕は強い！　僕は強いんだ！　僕はやれる！

その笑いと叫びは、かつての友が完全に狂気の淵に沈んだ証だった。

──もう……良いな？

ああ。わかっている。

赤い炎が一直線に飛んだ。黒い翼にではなく、その胸に。

──僕は……。

ブラックドラゴンの翼が力を失う。二度、三度と、赤い炎が漆黒の鱗を貫く。黒い翼が完全に動きを止めた。落下していくイウヴァルトは、それでもフリアエの亡骸を抱きしめ放そうとはしなかった。

イウヴァルトを追ってドラゴンが下降を始める。今は一刻も早く、天使の教会の司教を捕らえなければならない。それがわかっていながら……。カイムは初めてドラゴンの「要らぬお節介」に感謝した。

地面に叩きつけられても契約者であるイウヴァルトにはまだ息があった。しかし、その顔色はすでに死人のようで、残された時間はいくらもないことがよくわかる。

「フリアエ……フリアエ？」

視力が失われているのか、それとも身動きできないのか、イウヴァルトは横たわったまま手だけでフリアエを捜している。いつの間にか、赤かったはずの瞳の色が元に戻っていた。

「どこ…に……？」

イウヴァルトに見えているのかどうかわからないが、カイムはうなずいた。傍らに横たわるフリアエの手をとり、イウヴァルトの手に握らせる。

「ああ……幸せ…だ……」

イウヴァルトの瞼が閉じる。フリアエの手を握りしめたまま。

片時も離れず三人で過ごした。二人と一人に別れ、やがて三人ともばらばらになった。そして今、再び二人と一人になった。生と死に隔てられて。

「ゆくぞ。司教を追わねば」

そうだな。すまなかった。……感謝している。

ドラゴンが吼える。心の中で死者たちに別れを告げながら、カイムはその背に飛び乗った。

帝都周辺は異様な光景だった。地上には夥しい数の魔物が群れ集い、空は妖鳥や妖精、精霊の類が覆い尽くしている。それらは互いに争い、狂ったように殺し合っていた。飛ぶ者たちの血と肉が、地を這う者たちの屍に降り積もる。

――ここはすでに人間どもの住める場所ではない。いや、ここ以外の場所でも、じきに同じ光景が繰り広げられることになる。

どういうことだ？　こいつらはいったい？

――再生の卵に引き寄せられて集いし者どもよ。生きとし生けるものすべてが同じ場所へと向かっておる。

行く手を阻む妖鳥の群れを、ドラゴンは炎で追い払う。ヴェルドレがため息まじりにつぶやく。

――封印解除の後に来るものが、このような光景であったとは。

すべての封印を解けば世界が無事であるはずはないと、以前、ヴェルドレは言った。しかし、そのヴェルドレでさえ、これほどの酸鼻の極みを予測し得ただろうか。

――神話によれば、再生の卵に入ることで人類には新たな道が開けるというが……。

これほどの殺戮の後に開ける新たな道が、果たして真っ当なものだろうか。これほど多くの

血を流して生まれてくる卵が、本当に希望をもたらすのだろうか。
――一度しか言わぬ。よく聞け。
ドラゴンが厳しい声で言った。
――人間を生き延びさせたくば、決して卵には入れるな。
なぜだ？　新たな道が開かれるためには、卵に入る必要があるんだろう。
ドラゴンはそれ以上は何も語ろうとしなかった。沈黙を守ったまま、ひたすら炎を吐き、帝都へと飛ぶ。
やはり、とカイムは心の中でつぶやいた。再生の卵がもたらす未来に希望などないのだ。だとすれば帝国軍は、天使の教会の司教は、何を考えているのだろう。世界中の人間を道連れに滅亡へと突き進む気なのか。或いは、それが最善の道であると勘違いしているだけなのか。
――生き残りたくば、何にも巻かれるな。
それ以上のことは教えてくれないのか。卵に人間を入れたらどうなるのか。俺は知りたい。
封印とは何だ？　再生の卵とは何なんだ？
しかし、その問いの答えは得られなかった。ドラゴンの返事はただ、己を信じよ、だった。
――たとえ、復讐しか信じぬ己であっても。
やがて眼下に見えていた光景が変わった。鬱蒼（うっそう）とした森や荒れ地がいきなり途切れ、四角い建物が次々に現れる。しかし、そのどれもが半ば崩れ落ち、まともな形を保ったものはない。

帝都と呼ぶよりむしろ廃都と呼んだほうがふさわしい街並みである。

——これが帝国の本拠地か？　こんなところに人が住めるものなのか。

ヴェルドレが訝(いぶか)しげにつぶやく。人の気配はおろか、草一本生えていない。あるのは、人ならぬ者たちの気配と死臭ばかりである。こうして見下ろしている間にも、音をたてて崩れていく建物もある。

あの赤い目の子供は、こんな廃墟(はいきょ)で何をしようとしているのだろう。いや、そもそも、こんな場所に再生の卵などが生まれるのだろうか。

——この澱(よど)んだ空気。さすがの我もいささか震えが来るわ。

実際には震える様子など全く見せずに、ドラゴンがゆっくりと首を巡らせた。相変わらず空でも地上でも、人ならぬ者たちが相争っている。彼らが集まってきているのだから、やはりこの廃墟に卵が生まれようとしているのだろう。

やがて前方の空が赤みを帯びてくる。遠目には巨大な炎が空を焦がしているように見えた。が、近づくにつれて、赤い霧の中にある輪郭が浮かびあがった。

——塔？

ちょうどそこが帝都の中心部なのだろう。巨大な塔が赤い霧に包まれてそびえ立っている。これだけ離れていても、禍々(まがまが)しい気配が伝わってくる。おそらくあの中に、赤い目の子供がいるのだ。

――あの霧……。小細工をしおって。

赤い霧に見えたのは、塔全体を覆う結界だった。空を飛ぶ者たちが十分すぎるほどの距離を保っていることから、相当強力なものだとわかる。いったん地上に降りるしかないということだ。あの赤い霧の効力も地上には及ばないらしく、塔の周囲では魔物たちが群れ集っている。容易いとは言い難いが、下からならば侵入は可能だろう。

ドラゴンが地上に向けて炎を吐く。地面が見えないほどぎっしりと密集していた魔物が、一瞬にして灰になる。ドラゴンが地上に降り立ったまさにそのときだった。広い影が舐めるようにして地面を覆った。ドラゴンが首をもたげるなり凍りつく。

――伝説が……来おった。

見上げれば、空には巨大な翼があった。レッドドラゴンよりも一回り大きく、どこかくすんだ色の体。

「エンシェント……ドラゴン？　実在していたとは！」

ヴェルドレが驚きの叫びを上げる。エンシェント、古のドラゴン。歴史書や古文書にわずかな記録が残る程度で、その存在は疑問視されてきた。

エンシェントドラゴンも他の生き物たち同様、再生の卵に惹かれて降臨したのだろう。その咆哮で、辺りの空気ばかりか大地までが鳴動した。エンシェントドラゴンの行く手を阻んだ妖鳥や妖精が、ばらばらと墜ちていくのが見える。

まずはあれを倒さないと、おちおち塔にも登っていられないということか。
カイムは再びドラゴンの背に飛び乗った。が、ドラゴンは翼を畳んだまま動こうとしない。
――我にはできぬ。
エンシェントドラゴンがまた吼える。傾きかけた建物が次々に崩壊していく。
――神聖なるドラゴンと戦うなど……我にはとても……。
伝説だか神聖だか知らないが、あれは敵だ。違うか？
ドラゴンは答えない。折り畳んだ翼が不自然に強ばっている。震えている？　まさか。こいつに限って、そんなことは。
咆哮が木霊する。ドラゴンがびくりと身を固くするのがわかった。間違いない。怯えている。
未知なる力、しかし確実に自分を凌ぐであろう力を前にして。
これまで強大な力を目の当たりにしてきたせいで、ドラゴンには人間のような弱さや脆さはないのだと思い込んでいた。まして恐れや怯えを抱くことなどあり得ないだろうと、勝手に決めつけていた。
違う。もしもドラゴンが人間とは全く異質な心を持つものならば、両親の仇と友との間で揺らぐ気持ちを汲みとってはくれなかっただろう。石の谷を去るときにセエレに見せた優しさも。
あれは己の弱さを知る者だけがとれる行動なのだ。
ふと気がつくと、カイムはドラゴンの首に腕を回し、抱きしめていた。微かな震えが腕に伝

わってくる。
「は、離れろ！」
ドラゴンがあわてふためいて叫ぶ。
「暖めてどうなるものでも……。全く、どうかしておる」
どこか決まり悪げな口調がおかしかった。ばさばさと音をたててドラゴンが翼を広げる。
「伝説も神も善悪も関係ないとは。そんな酔狂な馬鹿者と契約した身を恨むとしようぞ」
ドラゴンが大地を蹴って飛び立った。その翼にもはや迷いはない。一直線にエンシェントドラゴンへと向かっていく。
——偉大なる古のドラゴンよ。我らのような馬鹿者に出会ったことを後悔するがいい！
地上から見上げたときにはドラゴンより一回り大きい程度だと思っていたが、上空で間近に見るエンシェントドラゴンはさらに巨大だった。それとも、畏怖する心が相手を実際以上に大きく見せているのか……。
だが、畏れているのは自分一人ではない。ドラゴンもまた同じ畏れを抱き、それでもなお、立ち向かっていこうとしている。
エンシェントドラゴンがその巨体を大きく反らせた。大地の裂け目にも似た口から真っ白な冷気が吐き出される。しかし、その動きはいささか鈍い。ドラゴンは冷気を難なく回避し、炎で返した。逃げ遅れた妖鳥たちが凍りつき、或いは焼け焦げて落下していく。

また冷気が吹きつけられる。十分な距離を保って回避しているにも拘わらず、まるで吹雪の中で戦っているかのようだ。もしも直撃されたら、一瞬で凍てついてしまうに違いない。

——古のドラゴンに挑むなど、やはり愚行にすぎぬのか……。

ドラゴンが弱々しくつぶやく。幾度炎を撃ち込んでも微動だにしない翼、尽きることなく吐き出される冷気。とても勝てる気がしないのはわかる。それは同時にカイム自身の気持ちでもあったからだ。そして、そんな思いを過去に何度も味わってきた。

それでも俺は戦った。剣を振る手を止めてしまえば即座に死がやってくる。

——それが人間どもの生きる意思だというのか。愚かな……。全く以て愚かなことよ。

愚かと言いながらも、そこに嘲りの響きはない。ドラゴンが吼える。力強い咆哮とともに炎が吐き出される。エンシェントドラゴンめがけて何度も、何度も。

立ちはだかる壁のようだった翼がわずかに揺らいだ気がした。たとえ小さなものにすぎなくとも、穴を穿つことはできたのだ。いくつも穿てばいつかは崩れる。とても破れそうにない壁であったとしても。

——ドラゴンとそなたの間に何があった？　何がドラゴンをこれほどまでに駆り立てる？

半ば驚き、半ば呆れたようなヴェルドレの声が聞こえてくる。

ドラゴンが炎を吐き続ける。冷気の押し寄せてくる間隔が少しだけ間遠になったように思えた。エンシェントドラゴンとの距離を一気に詰め、炎を撃ち込む。冷気を避け、また撃つ。今

度ははっきりと翼が揺らいだ。
吐き出される冷気が止まった。さらに至近距離で炎を吐く。エンシェントドラゴンが吼える。しかしそれは、雄叫(おたけ)びではなく悲鳴に近い。続けざまに襲いかかる炎の中で、巨大な翼がもがき、のたうち回る。そのたびに吹き下ろす突風が、帝都を破壊していく。
ついに炎はエンシェントドラゴンの左胸を貫いた。翼が止まった。落下が始まる。巨大な体が地響きをたてて帝都に突っ込んだ。
――我らが古のドラゴンに……勝ったと？
半ば呆然(ぼうぜん)とした様子でドラゴンが地上を見下ろした。廃墟の中に横たわる巨大な骸(むくろ)。生き延びる意思を持つ者が伝説を打ち破った証だった。
――信じられぬ。
最後まで剣を捨てなかった者が勝つ。当然だろう。
――我もまた、馬鹿者になったということか。
そうかもしれないな。
口の端に微笑が浮かぶのを感じた。久しく忘れていた何かが胸の内に広がる。
――礼を言うぞ、カイム。我は今、我自身を越えられたように思う。
ドラゴンが翼を翻し、赤い霧に包まれた塔へと向かった。
「もはや我らより強き者はおらぬ。命が惜しくば道を空けよ！」

辺り一面に炎を吐き、魔物たちを焼き払う。ヴェルドレが驚嘆の声を上げる。
――ドラゴンとそなたの絆の強さがうらやましいぞ。……我らの間には終ぞなかった。
赤い霧が目前まで近づいてくる。ドラゴンは一際大きな炎で地上を焼き尽くすと、下降を始めた。
地上に降り立つと、さっきよりも空気がさらに澱んでいるのがわかる。ぬるま湯の中を歩いているかのような湿気と、不快な臭気。石畳の道のあちこちが、奇妙な形に窪み、ひび割れている。いったいこれは何の跡だろう？
不意に窪みのひとつから何かが立ち上った。いや、その周囲の空気が、空間そのものが揺らいでいるのだ。見回せば、どの窪みの周囲も同じようにゆらゆらと揺れている。
「これは……？」
「いよいよか」
ドラゴンが厳かな声で告げた。
「卵が生まれ出ようとしているのだ」
揺れ動く空気は次第にひとつの輪郭を結び始める。
「これが再生の……」
レオナールの言葉を最後まで聞くことはできなかった。目の前が真っ白になり、すべての音が消えた。あまりのまぶしさに、カイムは思わず目を閉じる。その閉じた瞼の裏側にくっきり

と浮かぶ光景があった。
なんだ、これは！
フリアエがいた。再生の卵から生まれ出たばかりのフリアエが。背中に真っ白な翼を生やし、体のあちこちから不気味な触手が伸びている。かつて妹であったはずの異形の者が、次々に人間を襲う。逃げ惑う人々の上に鞭（むち）のような触手が何度も振り下ろされ、また立ち向かおうとする者を串刺しにする。白い翼を返り血で赤く染め、次なる獲物を探してフリアエは空を舞う。人間のものとは思えない甲高い笑い声が響き渡る。そして、カイムは己の手で異形と化した妹を倒そうとしていた……。
「いやだっ！　やめて！」
セエレの悲鳴で、我に返った。辺りを見回す。フリアエの姿も、逃げ惑う人々の姿もない。カイムは汗ばんだ手のひらをきつく握りしめる。
「ドラゴンが……」
しゃくり上げながら、セエレがカイムにしがみついてくる。
「カイムとドラゴンが殺し合ってて……。怖かった」
セエレもまた、幻を見たらしい。ということは。カイムはヴェルドレに視線を移す。
「天使……を見た。天使が降臨して地上を……人々を喰らい尽くし……。恐ろしい。とても神の遣いとは思えぬ姿であった」

「私は奇妙な町を視ました」
レオナールが瞼を押さえる。
「巨大な建物の群れと巨大な尖塔、灰色の街路。そして真っ白な光。あれは、何だったのでしょうか」
アリオーシュにも何を見たのか訊いてみたかったが、彼女はただただ笑うばかりである。しかし、何かの幻を見たのは確かだろう。
「あれはいったい？」
「生まれ出ようとする再生の卵の為せるもの。人には終焉を、人ならぬ者には繁栄の幻を見せる。おぬしらが見た幻は、人間どもの終末の光景。終末の可能性のひとつなのだ」
生き延びたくば人間を卵に入れるなというドラゴンの言葉の意味がようやくわかった。イウヴァルトの目論見が成功していたら、あの光景が現実のものとなっていたのだ。
「あれが神話の言う再生の卵なら……」
「人間は、自分に都合の良いように神話をねじ曲げる。再生の卵？　そのようなものは、はなから存在せぬわ」
新しい秩序を世界にもたらすと言われた再生の卵。あれが再生の卵でないならば、いったい何だというのだ？
「人ならぬ者どもが人を襲う理由を考えたことがあるか？」

カイムの問いかけをドラゴンは別の問いで返してくる。答えられずにいると、ドラゴンは空を仰いで言った。

「人間以外のあらゆる生き物に神の意思が反映されている。ただ人間のみが神に逆らう」

「神に逆らうなど、そのような……」

ヴェルドレの反論をドラゴンは遮った。

「己の意思にのみ従って行動し、己が今以上に強くなれると過信する。神の意思を知らず、神の与えし力を侮る。これを逆らうと言わずして何を言う？」

「それは……」

「人ならぬ者は神の意思に従って人を襲う。自らの失敗作を抹殺せんとする神の意思に従って」

神が人間を抹殺したがっている？　まさか。

「あの卵こそがその証。卵に入った者は人であろうと人ならぬ者であろうと、人間どもを惨殺する者として生まれ変わる。あの卵がもたらすものは世界の再生ではなく、滅びなのだ」

そんな馬鹿なと思う一方で、心のどこかで納得していた。神の手によって世界に新しい秩序がもたらされるというのなら、なぜそれを封印する必要があるのか。卵がもたらすものが滅亡であるならば、すべて説明がつく。神の手による滅亡を回避するために、人は三つの封印を厳重に守り、封印の女神という名の人柱を立ててきた。

ドラゴンは何もかも知っていた。だからこそ、滅びへの扉である卵に再生の名を与え、神話

として伝えた人間の愚かさを嘲笑ったのだ。
「あの卵が人間を抹殺するためのものならば、天使の教会は……」
「思い上がった人間どもの集まりか、或いは、神の悪意の反映か。我にもわからぬ」
「亜人を従えし力といい、空中要塞といい、人間の力によるものとは思えぬ。ならば、天使の教会には神がついている？　我々は神に刃向かっていると？」
ヴェルドレが恐ろしげに身を震わせ、その場に座り込んだ。その脇をすり抜け、カイムは塔の入り口へと走る。
背後に何がいようと構わない。たとえ神が相手であっても。帝国を、天使の教会を叩き潰すと誓った。俺は戦う。最後まで。
「まだ間に合う！　司教を倒し、祭壇の卵を封印せよ！」
急げ、とドラゴンが叫ぶ。
「待って。ぼくも行く」
セエレの声にカイムは思わず足を止めた。駆け出そうとするセエレをレオナールが押し止めている。
「いけません、セエレ。君はここに……」
「ううん。ぼくも行かなきゃいけないんだ」
まさに生きるか死ぬかというときに、子供の面倒まで見ている暇はない。足手まといだ、お

まえはここに残れ、そう言おうとしたときだった。
「さっき、椅子に乗って飛んでいった子、ぼくの妹なんだ」
その言葉で思い出す。あの子供を初めて見たとき、どこかで会ったことがあるような気がしたことを。目の色と邪悪な表情とに惑わされてわからなかったが、セエレに似ていたのだ。
「ちらっとしか見えなかったけど、間違いないと思う」
あの子供が。今から倒そうとしている天使の教会の司教が。
「お願い。ぼくも連れてって。足手まといにならないようにするから」
連れていく気はない。子守りの片手間に戦える相手じゃないからな。
「どうしても……だめ?」
来るなら勝手に来い。自分の身は自分で守れ。
泣き出しそうになっていたセエレの顔がほころんだ。妹が目の前で殺されるかもしれないというのに。いや、逆かも知れない。その妹にセエレは殺されるかもしれないのだ。妹に……。
胸に去来するものを振り払い、カイムは踵(きびす)を返した。セエレが駆け出すのを見て、アリオーシュが後を追う。そして、レオナールが、遅れてヴェルドレが続く。
——カイムよ。絶対に死ぬな。
ドラゴンの声に手を挙げて応え、ひたすら走る。赤い塔が口を開けて待ちかまえているかのように見えた。

2

「もうすぐ。もうすぐ……」

マナはうっとりとした顔で、自分の背丈よりも大きな球体を見つめていた。その白い球体は刻々と輪郭を鮮明にしていく。最初は陽炎のように揺らめいていただけだったが、やがて白い霧となり、今は球体であることがはっきりと見てとれる。

この球体がくっきりとした輪郭を描くようになったとき、世界は再生するのだ。

「もうすぐ、新しい世界が始まる。あの方に愛されている者だけが幸せになれるの」

新しい世界には、もうセエレはいない。わたしからお母さんを取り上げた、憎らしいセエレはいない。

マナは声をたてて笑う。

うぅん。セエレがいてもいいわ。でも、お母さんに愛されるのは、わたしだけよ。セエレは絶対に愛されないの。何をやっても怒鳴られて、何をやってもぶたれるの。そして、石の谷に捨てられてしまうの。なんていい気味！

セエレなんか大嫌い、とマナはつぶやく。それでは足りない気がして、死んでしまえばいい、と付け加える。

お母さんを独り占めして、わたしを追い出したのは全部セエレの仕業なんだから。石の谷に置き去りにされたのも、きっとセエレのせい。セエレがお母さんにそうしろって言ったんだわ。

マナはぞくりと身を震わせる。石の谷で過ごした夜の寒さを思い出したのだ。

「ごめんなさい、もうしません、しませんしません！」

そう叫んでも、お母さんは許してくれなかった。わたしは悪いことなんてしてないのに、お母さんは許してくれなかった。

石の谷に着いたときには日が暮れていた。いきなり突き飛ばされ、マナは岩だらけの斜面を転がり落ちた。幼い子供の力では登ることができなかった。声が嗄れるまで泣いても、誰も迎えに来てくれなかった。

マナは年齢の割に知恵のある子供だった。自分が置かれた状況を的確に理解していた。石の谷が恐ろしい場所だということも、大人たちの話から聞き知っていた。食べる物はもちろん、飲み水さえも手に入らない。谷の近くには魔物の巣があるとも聞いている。

食べ物がもらえないことは今までにもあったけれども、水も飲めないようなことはなかった。きっと今までの何倍も苦しい思いをするだろう。里の中と違って、ここにはゴーレムがいない。魔物が出たら、間違いなく食い殺されてしまうだろう。

岩陰にうずくまって、マナは死の影に怯えた。このまま誰も迎えに来てくれなければ、自分は死ぬ。絶対に生き延びることはできない。

死んだら、どこへ行くの？　ずっと眠っているようなもの？　それとも、何もかも消えてしまうの？

脳裏に母の顔が浮かんだ。

ここでわたしが死んでしまっても、お母さんにはわからないんだわ。わたしがいなくなっても、きっと何も変わらない。セエレはいつもと同じようにご飯を食べて、いつもと同じようにお母さんにお話をしてもらって……。もしかして、わたしって、いなくてもいいの？　いないほうがよかったの？

突然、激しい憎悪がわき上がった。それが、自分の存在を否定されたことへの怒りであるとまではマナは理解していなかった。ただ、無性に腹が立った。何もかも死んでしまえばいいと思った。

嫌い！　みんな大嫌い！　セエレも、お父さんも。里の人たちも。お母さん以外はみんな嫌い。みんな死んでしまえばいい。お母さん以外は、誰もいなくなればいい。わたしとお母さんだけがいればいいのよ。あとはみんな死ねばいい。

ひもじさと寒さに震えながら、マナはひたすら世界を呪った。自分がもうすぐ、その世界から弾き出されてしまうのはわかっていた。消えるのは世界ではなくて自分のほうなのだ。自分は悪くない、何も悪いことはしていないのに。

闇はますます濃くなり、辺りの空気も地面も氷のように冷たく固くなっていく。体を起こし

ているこどもできなくなって、マナは冷たい岩にもたれて目を閉じていた。頭の中が次第にぼんやりとしてくる。何も考えられなくなったとき、死がやってくるのだ。

わずかに残る意識のすべてで、マナは憎悪した。自分から母を奪ったセエレを、自分を無視し続ける父を。そして、セエレの存在を許し、自分の存在を消し去ろうとしている世界を。

こんな世界、滅びてしまえばいい!

意識が闇の中に吸い込まれて消える、まさにそのときだった。マナは声を聞いた。

だれ?

その声は、するりとマナの中へと入ってきた。はっきりとした言葉ではない。具体的な言葉は何ひとつなかったが、マナには声の言わんとすることがよくわかった。ほんの一瞬で、すべてを理解した。ずっと前からあったように、その考えはたちまちマナの中に根づいた。

わかりました。あなたの教えに従います。すべては、あなたのために。

マナはそう答えて立ち上がった。手足に新しい力が生まれていた。闇の中をマナは一人歩いた。空腹も寒さもすっかり消え去っていた。マナの内に宿った強大な力を畏れてか、石の谷に巣くうという魔物も襲ってはこなかった。

どれくらい歩き続けただろうか。やがて東の空が明るくなった。暁の光の中、マナは空に向かって手を差し伸べた。赤い光がマナを包み、その場から運び去った。行き先は天使の教会。

その日からマナは司教となり、多くの司祭や兵士たちを率いる身となった。そして、マナとい

う「神の器」を得たことにより、天使の教会と帝国軍は急速に勢力を拡大していくことになる。

誰からも愛されず、誰からも顧みられることがなかったマナにとって、神の愛を信じ、神の教えを実践する生活は幸福そのものだった。食べる物も玩具も好きなだけ与えられた。何より、ここにいる大人たちは誰もがマナと同じ目の持ち主だった。不吉な色、血の色と母が忌み嫌った瞳の色が、ここでは当たり前のもの。それどころか、赤い瞳は神の忠実なるしもべである証、神に愛されるために欠くことのできない資格だった。

だからわたしは神に選ばれた。赤い瞳を持って生まれてきたから。お母さんは何も知らなかったんだわ……。

天使の教会こそが自分の在るべき場所だったのだとマナは悟った。これまでの生活が間違いだったのだ。

神はマナの口を借りて多くの言葉を紡ぎ出し、いくつもの命令を下した。そうやって神に忠実に仕え、神の愛を一身に受ければ、いつか母の愛も手に入るとマナは信じた。国を攻め滅ぼし、里を焼き払うように命じることに罪悪感を覚えたことなど一度たりとてなかった。強大な力を行使して、人の心を暴き立て、感情や意識を抜き取ることも、神の意思に叶う行いだった。

古き世界は堕落した世界。古き人々は悪しき人々。

そう信じたマナにとって、破壊も殺戮も正義だった。マナはひたすら新しい世界を夢見た。そこには優しい母がいて、愛に包まれた生活が待っている……。

「もうすぐ。もうすぐ」

再生の卵の周りで、マナは歌い、踊る。

わたしは神に愛されている子供。わたしは正しい。わたしは……きっとお母さんにも愛される。お母さん……。

いつの間にか、マナは「神の声」で笑っていた。このところ、マナの中で神の声はますます強く、大きくなっている。常に神の存在を身の内に感じる。どこからどこまでが自分なのか、わからなくなるときもある。いつしか、自分自身が神と溶け合って消えてしまいそうな……。

わたしは神に愛されている。愛されているから、わたしは神とひとつになる。わたしがわたしでなくなっても、神がわたしでいてくれて……だからわたしは……わたしは……。

白い球体がまた少し輪郭を露わにしたようだった。

3

塔の内部は、ひたすら螺旋階段が続いていた。結界のせいでドラゴンの声は全く聞こえない。それどころか、自分たちの声ですら遠く感じられる。上へ昇るにつれて空気はますます澱み、視界が歪むのではないかと思うほどの重さを増していた。

——あまり離れないほうがいいようですね。声が届かなくなるとまずい。はぐれる心配はない

でしょうが。
ひたすら階段を昇るだけの一本道である。要塞内部のような複雑な造りでなかったのは幸いだった。
螺旋階段の途中、思い出したように帝国兵が攻撃を仕掛けてくる。とはいえ、その数は決して多くはなかった。帝国といえども、この巨大な塔を埋め尽くすほどの兵力は残っていないということなのだろう。
——もしも、卵が孵ったら、あの幻が現実のものとなるのであろうか。
あくまで可能性のひとつだ。あれよりはましかもしれないし、もっとひどい終末を迎えるのかもしれない。
——あの光景が神の意思に叶うものならば、私がこれまで捧げてきた祈りはいったい何であったのか。
神官長であるヴェルドレにとって真実は残酷なものであったが、自分にとってはむしろ福音であったとカイムは思う。少なくとも、フリアエの苦しみは無駄ではなかったのだ。フリアエは身を挺して世界を守った。神の悪意から。その事実は、わずかながらも慰めになる。
そして、自分はようやく復讐すべき相手が誰であったのかを知った。造られた者の分際で創造主に逆らうなど、無謀なことなのかもしれない。とても勝てる相手ではないのかもしれない。
それでも、最後まで剣を放さなかった者が勝つと信じていたかった。

どれくらい昇り続けただろうか。さらに空気は重くなり、視界が奇妙な形に歪み始める。目に映るものすべてがねじれ、色彩を失う。足許の階段が二重に見える。錯覚だとわかっていても、踏み外してしまいそうで、つい足が鈍る。

追われる夢を見ているかのように、足が重くもどかしい。必死で動かしているのに、少しも進んでいる気がしない。

——これは、結界の力なのか。それとも、卵の……？

いずれにしても人の力ではあるまい。人の手によって為されたにしては、あまりにも禍々しすぎる。

規則正しく響いていたはずの足音までが、水中で聴く声のようにぼやけて遠くなる。ここは本当に塔の中なのだろうか？　いつの間にか自分たちは水底に沈められてしまったのではないか……。

それでも前へ。少しでも上へ。足を動かしていれば、いつか必ず螺旋階段は終わる。どれほど巨大な塔であっても、いつかは最上階にたどり着く。階段を昇っているのか、それとも単にもがいているだけなのか、もはや自分ではわからない。ただ長い長い時間が流れたような気がした。

気がつくと、足音が元の規則正しさを取り戻していた。視界の歪みも消えている。相変わら

ず空気は澱んでいたが、あのまとわりつくような重さは感じられない。目の前に続いていた階段が消えている。最上階に着いたのだ。

最上階はだだっ広く、やたらと天井の高い造りになっていた。床の敷石が血のように赤い。遮るものの何もない広間の向こうに、ぽつんと丸いものが見える。そして、その前で踊る小さな人影。両腕を広げ、卵の周りを回りながら、踊っている。

「マナ！」

制止する間もなくセエレが駆け出した。

「ぼくだよ！　セエレだよ！」

小さな人影が動きを止めた。

「セ……エレ？　お母さん……」

マナの体ががくりと頽れた。

「お…かあさん……」

マナはひざまずいたまま、両手で頭を抱え込む。

「しっかりして、マナ！　母さんはもう……死んじゃったんだ」

「かあさ…ん……死……？」

マナの両腕がだらりと垂れ下がった。セエレが駆け寄り、肩に手を載せようとした。その瞬間、光が弾けた。セエレの体が吹き飛ばされる。

「天使は笑う」

赤い目が異様な光を帯びている。レオナールがセエレを助け起こす。

「天使は笑う……天使は笑う……天使は笑う……」

いつの間にかマナの声は、子供とは思えない野太い声に変わっている。その小さな体から激しい憎悪と狂気とが噴き出してくるのがありありと感じられた。

「かような幼子のどこに……これほどまでの憎しみが？」

これが、神の人間に対する憎しみなのだろうか。母の愛情を独占する兄への激しい憎悪を持つ子供だからこそ、神の憎しみを宿し得たのか。

「封印の解かれし今、すべてが無駄なあがき。人間どもよ。すべてが無駄であることをその身をもって知るがよい」

「マナ！」

セエレの叫びもマナの耳には全く届いていないようだった。野太い声と子供の声と、ふたつの声でマナが笑う。

「マナ……どうして……」

カイムは剣を抜いた。こいつを倒して卵を封印すれば、まだ間に合う。あの幻の中、己の手でフリアエを殺そうとしていた。もはや妹ではないとわかっていても、自らの身を斬るような痛みを覚えた。マナを殺せば、セエレは同じ痛みを味わうのだろう。……この現実の世界で。

それでも。生き延びるために。

剣を振りかぶったそのときだった。マナの周囲の床が膨れ上がった。赤い敷石のひとつひとつが膨らみ、どす黒く変色していく。

「セエレ！　下がって！」

レオナールが叫んでセエレを背後に押しやる。敷石は夥しい数の死霊兵へと変わっていた。それがぎっしりと密集してマナの周囲を守っている。丘陵地帯で戦ったときよりも遥かに数が多い。悪いことに、丘陵地帯で死霊兵をあらかた片づけてくれたゴーレムもいない。

セエレとヴェルドレは階下へ逃げろ！

苦戦するのはわかりきっていた。ゴーレムがいてもあれだけ手こずった敵である。加えて、これだけ密集していれば囲まれるのは見えている。果たして全部倒せるか……。

――カイムよ。我との約束を覚えているか？　絶対に死ぬな。

ドラゴンの声が聞こえたような気がした。結界に阻まれ、届くはずのない声が。

カイムは渾身(こんしん)の力で剣を振り下ろした。剣を握る右腕を叩き潰し、盾もろとも左腕を斬り落とす。背後に回ろうとする兵を剣先で止め、首を刎(は)ねる。

絶対に死ぬものか。何が何でも生き延びてやる。

突然、背後で悲鳴が上がった。振り向いて確かめることはできないが、ヴェルドレとセエレが退路を断たれたのだろう。階段の周囲にも死霊兵が現れたに違いない。

自分の身は自分で守れ！

この状態では手を貸してやるどころか、この場を動くことすらできそうにない。気を逸らせば自分が危ない。熔けた鎧から変じた丘陵地帯の死霊兵よりも、ここの死霊兵のほうが形が整っている分、動きが速いのだ。

ひたすら斬り続けているのに、死霊兵の数は少しも減ったように見えない。マナの周囲に群がる死霊兵たち、そして背後からじりじりと迫ってくる死霊兵たち。これだけの数をこの人数で相手にすること自体、無謀なのだろう。

次第に腕が疲れてくる。いつまで続くかと、弱気な考えが頭をもたげてきたころ、今度はアリオーシュが叫んだ。死霊兵を薙ぎ払う剣の向こう、アリオーシュがふらふらと歩いていくのが見える。

あの馬鹿……！　何をしている！　戻れ！

アリオーシュがマナに向けて両手を広げている。その手はすでに剣を捨てている。

――捜した……捜したのよ。やっと見つけたわ。

もはや彼女の目には死霊兵の姿は映っていないらしい。

――さあ、母さまのところへいらっしゃい。

死霊兵たちがアリオーシュに襲いかかる。

――怖かったでしょう。もう大丈夫よ。

この上なく幸せそうな声でアリオーシュが耳慣れない名を呼んだ刹那、幾本もの剣が一斉に彼女の体を貫いた。

――もう……大…丈夫……。

死霊兵と激しく斬り結びながらも、カイムは見た。アリオーシュの血が飛沫を上げて死霊兵たちに襲いかかっていくのを。魔力を跳ね返す力を秘めたエルフの血が、周囲の死霊兵たちを跡形もなく溶かし消し去っていった。

同時に炎と水とが音をたてて爆ぜた。サラマンダーとウンディーネの命もまた、多くの死霊兵たちを道連れにした。

――そうか。この忌まわしき臭いの者ども……。

レオナールはそうつぶやくと、背後に向かって駆け出した。

――カイム。司教は君に任せましたよ。

おい、いったい何を……。

そこまで問うのがやっとだった。右から左から、容赦なく突き出されてくる剣をかわし、斬り返す。いや、問わずともわかっていた。アリオーシュと同じことをしようとしているのだ。

「いやだよ！　ぼく、いやだ。もう人が死ぬのはいやだ！」

泣きそうな声でセエレがレオナールを引き留めている。

「セエレ。心配は要らない。君はとてもいい匂いだ。……大丈夫。私は死にません」

初めて出会ったとき、この男と理解し合える日は永遠に来ないだろうと思った。契約者でなければ間違っても同行したくない相手だ、とも。それでも共に戦った。思うところは違っても、同じものを敵としてきた。仲間だったのだ。今、そう気づいた。

「おい、バカ！　何すんだよ。オレまで死んじゃうよ」

レオナールが何をしようとしているのかを察したフェアリーが騒ぎ出す。

「死んだら、セエレちゃんとも遊べないよ？　お願いしますよ、生きてください。レオナールさんってば。どうせ怖くて死ねねえんだろがっ！　なっ、そうだろ？　おい、やめろ！　やめろって！　やめ……」

フェアリーの喚き声が途切れた。

――希望の最期は死にあらず！

緑色の光が弾けるのを背中に感じた。爆風が辺りを薙ぎ払う。一瞬にして、背後から死霊兵の気配が消えた。

カイムは残る死霊兵に斬りかかった。すでに剣を握る手は痺れて感覚がなくなっている。しかし、ここで手を止めるわけにはいかない。なんとしてでも司教を倒し、卵を再び封印する。アリオーシュが道を開き、レオナールが背中を押した。進むのは自分だ。もう後には引けない。

ついに最後の一体が土に還った。疲労のせいか、ひどく剣が重い。ふらつきそうになる足を踏みしめ、赤い目の子供へと向き直る。世界にこれほどの破壊と殺戮をもたらした罪を死で償

わせるために。

マナが後ずさる。さっきはあれほどの悪意を感じたというのに、この弱々しさはどうしたことか。いや、惑わされてはならない。セエレを弾き飛ばしたときの邪悪な目、フリアエの心を暴き立てたときの狡猾(こうかつ)な笑い。この子供がすべての元凶なのだ。

「やめて！　お願い……ぼくの妹を……」

セエレの泣き出しそうな声を無視して剣を構える。その肩を、静かにヴェルドレが叩いた。

「カイム。神官長としての務めを果たさせてはもらえぬだろうか。この幼子の内なる邪悪を封じ込めようぞ」

内なる邪悪。神の悪意。怒りに任せてマナを殺したとしても、共に神の悪意が消えるとは限らない。だとしたら。

カイムはうなずき、道を空けた。今までの自分ならば、決して聞き入れはしなかっただろうと思う。しかし、今は己の恨みを晴らすよりも、己に課せられたものを全うしなければという気持ちのほうが勝っていた。

ヴェルドレが杖を掲げて呪文を詠唱し始める。杖の先が揺らめく。

「お…かあ…さん……」

マナが胸を押さえてうずくまる。呪文の詠唱が続く。ヴェルドレの声が一際高くなる。呻(うめ)き声とともに、マナの口から真っ赤な泥のようなものが流れ出す。この小さな体のどこにと思う

ほど大量に、赤い泥はあとからあとからあふれ出してくる。やがてそれは霧となって立ち上り、マナの全身を包んだ。

「人間どもめ……まだ生き延びようとするか……」

野太い声がマナからではなく塔全体から響いてくる。

「醜い……醜いぞ！」

赤い霧に包まれたマナがみるみる膨れ上がる。カイムはとっさにヴェルドレとセエレを背に庇う。しかし、すぐにそれが無意味だと気づく。マナの体が膨張し続けていけば、この巨大な塔といえども一溜まりもないだろう。ここは最上階である。塔が崩壊すれば逃げる術はない。

マナの頭が天井を突き破った。柱が折れ、壁に、床に亀裂が走る。セエレがしがみついてきたちょうどその瞬間、轟音とともに足許が崩れ落ちた。急激な落下がやってくる。フェアリーか精霊たちのいずれかが生きていればと痛切に思う。

ここまでか……。

落ちるに任せながら、それでも剣が手の中にあることに安堵する。と、軽い衝撃とともに落下が止まった。

――この程度であきらめてどうする。馬鹿者が！

気がつくと、ドラゴンの翼に拾い上げられていた。塔の崩壊とともに結界が消えたらしい。ヴェルドレとセエレを背に庇ったのは無駄ではなかった。そのおかげで三人まとめて拾い上げ

てもらえた。

地上ではところどころに輪郭のぼやけた球体が出現していた。塔に入る前、幻覚を見たときにはまだ陽炎のようなものでしかなかったというのに。塔の最上階にあったものはさらに輪郭がはっきりしていたから、あれがまず孵り、続いて地上にある無数の卵が孵るのだろう。

振り返れば、崩壊した塔の上空にマナが浮かんでいる。赤い霧に包まれ、マナが叫ぶ。その叫びに共鳴して、空が、大地が激しく震えた。

——もう時間がない。行くぞ！

ドラゴンが吼え、翼を広げる。

「カイム！　死なないで！」

背後からセエレが叫んだ。己の妹を倒しに行く者に死ぬなと願うことが何を意味するか。いくら子供であっても、それがわからないはずがない。

——マナ、ごめんね。ごめんね。

そのつぶやきは、悲しげというよりもむしろ、覚悟を決めた者の強さを感じさせた。

ドラゴンが一直線に上空へと向かう。赤いふたつの目が邪悪な視線を投げ降ろしてくる。膨れ上がった体の分だけ、悪意もまた膨れ上がっているかのようだった。

炎を吐く。しかしそれは、赤い霧に阻まれ、かき消された。

——やはり、か。

すでに予想していたために、驚きはない。あの赤い霧が強力な結界であることはわかっている。まず、それをなんとかする必要があることも。

不意にマナの周囲で赤い霧が渦を巻いた。マナが両腕を大きく広げる。渦から飛び散る水飛沫のように無数の球体が生まれ、それらが一丸となって襲いかかってくる。急旋回したが完全には避けきれない。

大丈夫か？

愚問だとはわかっていた。尋ねるまでもない。カイムの左肩にも衝撃とそれに続く鈍痛とが残っている。

――おぬしこそ、無理をするでないぞ。

互いに無意味なことばかり言っていると、カイムは内心で苦笑する。無理をしなければ勝てない相手だ。そして、勝てなければ世界が終わる。無意味な言葉が欲しくなるのは、その重圧を少しでも紛らわしたいからかもしれない。

再び赤い渦から例の球体が飛んでくる。今度は十分な距離を保って回避したはずだった。が、球体は急角度で進路を変えた。急上昇で避けるが、球体のひとつが脇腹をかする。腑を絞り出されるような痛みが走った。

――弱点だ。やつがいかなる姿になろうとも、必ず弱点があるはずだ。

攻撃を受けつけないと思われたサイクロプスも後頭部が弱点だった。守りが鉄壁であればあ

るほど、どこかに致命的な弱点を持つものである。
あの赤い霧。あれさえ、なければ。
考えている間にも容赦なく攻撃がやってくる。赤い渦からいくつもいくつも生まれ出てくる球体。回避しても、しつこく追いかけてくる……。ドラゴンが急角度で翼を傾けたそのときだった。カイムは見た。赤い霧に穴が開いている。あの球体がちぎれ飛んだ跡だ。攻撃をかわすのに気を取られていて気づかなかった。
やがて、水面の波紋が静まるように、結界の表面はゆっくりと元に戻った。あの穴から結界の内部に入り込めるのではないだろうか？
赤い渦の表面が盛り上がり始める。泡のように球体が浮かび上がる。
球体に向かって突っ込め！　あれが突破口だ！
——しっかり我が背につかまれ！
ドラゴンが球体の群れに正面から飛び込む。全身を壁に打ちつけられているかのような衝撃と激痛とが一度にやってくる。カイムは必死で瞼を開き、歪む視界の向こうを見据える。
まっすぐ。そのまままっすぐだ！
結界に開いた穴がじわじわと元に戻ろうとしている。傷ついた翼でドラゴンが飛び込む。弾き飛ばされる感覚はやってこなかった。結界内部への侵入に成功したのだ。
喉だ。喉を狙え！

神の力で姿を変えたとはいえ、元は人間である。弱点があるとすれば、左胸か喉元だろう。さらに喉ならば、衣服に守られていない分、攻撃も効きやすいのではないか。

炎がマナの襟元へと走る。青白い喉に赤い炎が食らいつく。空気が激しく震える。マナが絶叫したのだ。巨大な頭をのけぞらせて、マナが喉元を掻きむしる。その喉へ二度、三度と繰り返し炎を浴びせかける。

唸り声をあげてマナが右手を振り上げる。その指先から迸り出た光の帯が炎を弾き返した。白く、或いは赤く、帯は結界の内側にあふれ返る。ほんの少しかすっただけでも、焼けつくような熱さを感じる。

光の帯をくぐり抜け、ドラゴンが上昇する。わずかな隙間を捜し、マナの喉をめがけて炎を吐く。光の帯が鞭となって襲いかかってくる。焼けつく鞭が翼を打つ。

――怯むな。決して退くな。

そうだ。怯むな。決して退くな。

帯の隙間がますます狭まってくる。もはや回避するだけの力は残っていない。熱さも痛みもすでにわからなくなっている。

光の帯に頭から突っ込んだ。悲鳴とも咆哮ともつかない声とともに炎が迸る。翼から力が抜けていくのをカイムは感じた。霞む視界に白い光が迫ってくる。思わず目を閉じる。

しかし、その一撃は来なかった。光の帯が跡形もなく消えている。

赤い霧が飛び散っていくのが見えた。マナの体がねじれ、歪み、崩れ落ちていく。ほとんど落下しそうになっていたドラゴンが体勢を立て直す。傷つき、ところどころ焼け焦げた翼を懸命に動かして、地上へと向かう。互いに言葉はなかった。ひたすら地上へ、塔が崩れ落ちた跡へと向かうだけだった。

カイムたちが地上へ戻ったときには、すでにヴェルドレが卵に封印を施そうとしていた。あれほど巨大な塔の最上階から落下したにも拘わらず、卵には傷ひとつない。塔の中で見たときよりも、その輪郭はさらに白くくっきりとしていた。

ヴェルドレが呪文の詠唱を終えると、卵の輪郭は再びぼやけ始め、やがて完全に消滅した。あちこちに出現していた卵も、一斉に消え去った。世界の崩壊はぎりぎりのところで食い止められたのだ。

しかし、地上にはそこかしこに屍が転がっている。人の骸もあれば、人ならぬ者の骸もある。崩壊は免れたものの、世界は多くのものを失った。

「マナ！」

驚きの声をあげて、セエレが駆け出す。瓦礫（がれき）の間に、子供の姿に戻ったマナが倒れていた。

「しっかりして！　マナ！」

セエレに抱き起こされたマナは、ゆっくりと目を開く。瞳は未だ赤い。何度か目を瞬（また）かせ、

マナは周囲を見回した。やがて自分を助け起こしているのが誰なのかに気づき、その手を振り払う。なおも手を差し伸べようとするセエレを突き飛ばし、マナは立ち上がった。笑い声がその口から漏れる。

「あなたたち、ほんっとにバカね。せっかくの再生の好機を逃したりして」

大人びた口調ではあったが、それは精一杯背伸びをしようとしている子供の声だった。

「神はすべて見ているのよ。最後の審判なのよ。わたしたちは変われるのよ。それをみすみす逃すなんて」

マナは胸を反らす。その姿は、初めて出会ったときのセエレとよく似ていた。

「わたしたちは再生するの。何も不安はないの。愛されているんだから」

カイムは静かに剣を構えた。神という後ろ盾を失ってしまえば、ただの子供だ。少しばかり生意気で、口達者なだけの。が、子供だから、幼いからという理由で罪が消えるわけではない。この胸に渦巻く憎悪も。

「憎いのね？　わたしが。……殺してもいいよ」

こいつを殺せば俺の復讐は終わるんだろうか？　この怒りと憎しみが消えるんだろうか？

「殺しなさいな。遠慮なんかいらないわ。殺してよ。ほら、殺してよ」

マナが歩み寄ってくる。必死で虚勢を張っているのがわかる。

「わたし、平気なんだから。だって愛されてるの。神に愛されてるの。神に愛される子供はお

母さんにだって愛されるはず。絶対平気なの。愛されてるんだから」
利己的な愛と憎しみを受けて育った子供たち。ドラゴンの言葉が思い出された。その成れの果てがこれか……。
怒りも憎しみも変わらずにあったが、殺意だけが消えた。許す気にはなれないが、殺す気にもなれない。
「殺せよ！　殺せ！　早く殺せ！　殺せって言ってんだろ！」
カイムは剣を下ろした。
「殺せ！　殺さねえと……わたし……。わたし、これからどうすればいいんでしょうか。憎むくらいなら殺してください。一気に殺してください」
ふたつの赤い目からぼろぼろと涙が流れ落ちた。マナはその場に膝をつく。
「憎まないで……。憎まないで、お母さん。わたし、死ぬから。お願い、憎まないで」
身を震わせ、唇を戦慄(わなな)かせながらマナは声を絞り出す。その目はもはやカイムを見ていなかった。
こんなものに俺は振り回されていたのか。こんなもののせいで、フリアエは、イウヴァルトは死んだのか。
マナは立ち上がると、ヴェルドレにすがりついた。
「あなたでもいいわ。わたしを殺してください。お願いします。殺してください」

ヴェルドレは無言のまま、マナを見下ろしている。
「殺して。お願い。殺して。殺せ。殺せ！」
「カイムはおぬしを一生許さないそうだ」
ドラゴンが静かに口を開いた。
「やすやすと死ねると思うは大間違いぞ」
マナが怯えたように後ずさる。
「おぬしはこれまで何をした？　天使の教会の司教として何をしてきた？　おぬしの言葉ひとつでいったいどれだけの人間が死んだことか。わかっておるのか」
ドラゴンの言葉の中には、静かではあったが確かに怒りの色があった。人間が神の失敗作であると知っているはずのドラゴンが、人間を見下していたはずのドラゴンが、人間のために怒っている。
「数多の親が子を失い、子は親を失い、愛し合う者たちはその片割れを失い……。生き残った者の数だけ悲劇が生まれた。聞こえるか？　生き残った者たちの嘆きの声が。彼らの憎しみはすべておぬしに向けられる。おぬしは生き残ったすべての者たちに、世界中の人間たちに憎まれるのだ」
「いや……いやよ……」
マナは震えながら頭を振った。

「決して許されることのない罪。命ある限り、いや、命尽きても、生き残った者たちはおぬしの罪を忘れぬことであろう。彼らの憎しみを背負い、生き続けるがよい。それがおぬしに与えられた罰なのだ」

「いや……許して……許して……」

地面に倒れ伏し、マナは激しく泣きじゃくった。

「お母さん！　ごめんなさい！　もうしません！　しません！」

母親の虐待を受けて育ったマナにとって、これが己の罪を認めたときの精一杯の態度なのだろう。憎まれることと憎むこと、泣き喚いて許しを請うこと。彼女が短い人生の中で学び得たものは、たったそれだけだったのだ。

「マナ……泣かないで」

おずおずと差し出されてくるセエレの手をマナは激しく払いのけた。

「お母さん、ごめんなさい！　ごめんなさい！」

セエレに背を向け、マナは泣き続ける。しかし、セエレは手を差し伸べることをやめない。マナが払いのけ、セエレが差し伸べる。この先ずっと、この双子はそうやって生きていくのだろうか。

次第にマナの泣き声に狂気の色がにじみ出す。泣いているのか、笑っているのかわからない甲高い声を上げて、マナは喚き続ける。セエレのかける言葉は悉くマナの喚き声にかき消され

てしまう。それでもセエレはマナに言葉をかけ、手を差し伸べる。その瞳には、共に罪を背負う決意があった。それがセエレにとっての贖罪なのだろう。
ドラゴンはしばらく無言で双子を見下ろしていたが、ヴェルドレのほうへと向き直った。
「封印の適合者はおるのか？」
ヴェルドレの顔に苦渋の色がにじむ。
「いいえ。一刻も早く新しい女神を探し当てねば」
出現した卵を消し去ることはできたとはいえ、封印の女神がいなければ卵は再び現れるだろう。神の手による「再生」が幻想にすぎなかったと判明した今、以前にも増して封印の役割は重い。
「また誰かを犠牲にせねばなりません。私は……神官長という名の死刑執行人です」
自嘲的に言うと、ヴェルドレはうつむいた。女神の命は短い。神官長の任に就いてからというもの、すでに幾人かの最期を看取ってきたのだろう。また、俗世の人間で唯一、女神に接する者として、その孤独と絶望をいやというほど目にしてきたに違いないのだ。そして、これからも……。
ドラゴンがゆっくりとカイムの許に歩み寄った。
「また進めぬようになった。……暖めてくれぬか？」
何を言われたのか、すぐには理解できなかった。言葉の意味するところはわかっても、意図

するところはわからなかった。ただ、じっと目の中を覗き込まれ、何かを求められていることだけはわかった。

もはや敵はいない。世界も終わらなかった。何を恐れることがある？

カイムはぎこちなくドラゴンを抱きしめる。震えも、怯えも伝わってはこない。ただ静けさだけが、ある。

「もう……大丈夫だ」

ドラゴンがそっと体を離した。再びヴェルドレに向き直る。

「我を封印に使うがよい。精神力、生命力、すべてにおいて人間の比ではないぞ」

耳を疑った。さっきよりももっと意味のわからない、理解を超えた言葉だった。

なぜだ？　なぜ、たかが人間のためにそこまでする？

ドラゴンが小さく笑ったような気がした。

——そういうおぬしも、人間ではないか。

信じられないという面持ちで、ヴェルドレがドラゴンを見上げる。

「そのようなことが……。よろしいのですか」

ドラゴンはちらりとカイムに目をやったが、すぐにヴェルドレに視線を戻した。

「我の気が変わらぬうちにすませたほうがよい」

ヴェルドレが深々と一礼するのを、カイムは呆然として眺めていた。まだ信じられなかった。

まだ幻の続きを見ているのではないか。再生の卵、神の悪意が見せた幻を。
為す術もなく立ち尽くすカイムの前で、ヴェルドレが杖を高く振りかざした。耳慣れない呪文のような言葉がその口から紡ぎ出される。長い、永遠に続くかのように長い詠唱だった。
やがてドラゴンの体を青白い光が包んだ。ドラゴンの口から呻き声が漏れる。光は次第に螺旋状へと変わり、その体に巻きついた。カイムの脳裏に蘇る光景があった。あの夜。国境近くの町で。同じだ。苦しむフリアエの体に巻きついた螺旋状の光。
横たわるドラゴンに駆け寄る。寄り添い、抱きしめる。同じだ。あのときと同じ。何もできない。何もしてやれない。
詠唱の声が次第に高くなる。光が細かい文字の形をとり始める。文字のひとつひとつがドラゴンの体に音をたてて焼きついていく。血が幾筋も流れ落ち、ドラゴンが苦悶の声をあげて身を捩る。
しかし、その痛みを分かち合うことはできなかった。契約相手が傷を負えば、また自分も傷を負う。なのに今、目の前に、腕の中にいる相手を苛んでいる苦痛は全く伝わってこない。封印が、人の世界を超えた領域での事柄だということを思い知らされる。もはや契約も心臓も関係ない。人の世界に属するものとは違うのだ。
互いの心臓を交換し、共に新たな力を手に入れた。その相手との間に越えることのできない隔てが生まれようとしている。

これまで多くのものを失ってきた。家族を失い、友を失い、仲間を失った。失うことには慣れてしまっていたはずだった。慣れていたはずなのに、この苦しさはどうしたことか。なぜ、こんなにも苦しいのだろう。

決して分かち合うことのできない痛みが別の痛みを連れてくる。ドラゴンを抱きしめたまま、カイムはきつく歯を食いしばった。

「おぬしの涙……初めて見る……な……」

言われて自分が泣いていることに気づく。フリアエを失ったときにも流すことはなかった涙。両親が殺されたとき、怒りに呑み込まれて消えてしまったはずの……。

夥しい血を流しながら、ドラゴンが身を起こす。

「覚えておいてもらいたいことが……ある」

ドラゴンの姿が視界の中で歪み、ぼやけた。

「アンヘル……それが我の名だ」

ANGEL（アンヘル）？　カイムはただドラゴンを見つめる。

「人間に名乗るのは最初で……最後だ」

ドラゴンがゆっくりと翼を広げる。流れ落ちた血が瓦礫を染める。別れの予感にカイムは思わず手を伸ばす。

「さらばだ……。馬鹿……者……」

指が空を掴んだ。ドラゴンの体が陽炎のように輪郭を失う。それは光の玉となり、ゆっくりと浮かび上がる。光の玉は虹色に輝きながら、いつの間にか晴れ渡っていた空に吸い込まれるようにして消えた。

ドラゴンがなぜ消えたのか、何処へ去ったのか、人の世界に属する者に知る術はなかった。喪失感と無力感とが重くのしかかってくる。カイムはその場に膝をつく。このままずっと動けないのではないかと思った。

――馬鹿者が。

ドラゴンの声が聞こえたような気がした。そうだ、ドラゴンは消滅したわけでも、死んだわけでもない。この世界のどこかで生き続けている。契約相手である自分にはそれがわかる。自分自身の命によって。この身の内に脈打つ心臓は、紛れもなくドラゴンのものなのだ。

生き続けていれば、いつかどこかで会えるだろうか。いや、永遠に会えないとわかっていても、俺は生き続けるだろう。

「神よ。それでもあなたは、我々に生きよとおっしゃるか。我々を憎み、罰するためだけに。生きよと」

傍らでヴェルドレが空を仰いで嘆いている。カイムは立ち上がった。

生きろと言われたから生きてきたわけじゃない。生きようと思ったから、生きたいと思ったからこそ生きてきた。どれほどの憎しみを受けようとも、数えきれないほどのものを失おうと

も。今日までずっと、そうやって生きてきた。……おそらく明日からも。
禍々しい色の雲は跡形もなく消え去り、蒼天（そうてん）を鳥が舞う。カイムはいつまでもその光景を見つめていた。



映島　巡　EISHIMA Jun

1964年8月26日生まれ。福岡県出身。『ZERO』で第4回ジャンプ小説・NF大賞（現ジャンプ小説大賞）受賞。主な著書は『曠野の舞姫』（EX novels）、『ダミーフェイス』（角川文庫 スニーカー・ミステリ倶楽部）、『オデュッセイア/紅衣英雄譚異聞』（Jump Jbooks）など。別PNで占い・心理テストを数誌に執筆している。

ドラッグオンドラグーン
ストーリーサイド

2003年12月19日　初版第1刷発行
2005年9月15日　初版第2刷発行

原　作◆ゲームドラッグオンドラグーン

著　者◆映島　巡

発行人◆田口浩司

発行所◆株式会社スクウェア・エニックス
東京都渋谷区代々木3-22-7
新宿文化クイントビル3階　〒151-8544
営　　業03（5333）0832
書籍編集03（5333）0879

印刷所◆加藤製版印刷株式会社

乱丁・落丁はお取り替え致します。
定価はカバーに表示してあります。

ISBN4-7575-1086-1　C0293

9784757510869
1920293009339
ISBN4-7575-1086-1
C0293 ¥933E
定価：本体933円＋税
SQUARE ENIX

戦乱の時代——。今は無き小国の、元王子カイム。
彼は18歳の誕生日、ブラックドラゴンに両親を殺される。
国破れその土地を後にし、さらには一緒に暮らしていた
最愛の妹フリアエも女神として召還され、すべてを失ってしまう。

やがて連合軍の兵士へと身を投じていくカイム。

復讐のためではなく自分自身の怒りを鎮めるために
戦い続ける彼に転機が訪れる。

それがドラゴンとの"契約"だった。

